

# Acronis True Image 11 Home

## ユーザーズガイド

Copyright © Acronis, Inc., 2000-2008. All rights reserved.

“Acronis”、“Acronis Compute with Confidence”、“Acronis Snap Restore”、“Acronis Recovery Manager”、“Acronis Secure Zone” および Acronis ロゴは Acronis, Inc. の商標です。

Linux は Linus Torvalds 氏の登録商標です。

Windows および MS-DOS は Microsoft Corporation の登録商標です。

ユーザーズ ガイドに掲載されている商標や著作権は、すべてそれぞれ各社に所有権があります。

著作権者の明示的許可なく本書ユーザーズ ガイドを修正したものを販売することは禁じられています。

著作権者の事前の許可がない限り、商用目的で書籍の体裁をとる作品または派生的作品を販売させることは禁じられています。

本書は現状のまま使用されることを前提としており、商品性の黙示の保証および特定目的適合性または非違反性の保証など、すべての明示的もしくは黙示的条件、表示および保証を一切行いません。ただし、この免責条項が法的に無効とされる場合はこの限りではありません。

画面は開発中のものであり、実際のものとは異なる場合があります。

# 目次

<b>第 1 章</b>	<b>はじめに</b> .....	<b>1</b>
1.1	Acronis True Image Home について.....	1
1.2	Acronis True Image 11 Home の新機能.....	1
1.3	システム要件とサポートされるメディア.....	2
1.3.1	最小システム要件.....	2
1.3.2	サポートされるオペレーティングシステム.....	2
1.3.3	サポートされるファイル システム.....	3
1.3.4	サポートされるストレージ メディア.....	3
1.4	テクニカル サポート.....	3
<b>第 2 章</b>	<b>Acronis True Image Home のインストールと起動</b> .....	<b>4</b>
2.1	Acronis True Image Home のインストール.....	4
2.2	Acronis True Image Home の取り出し.....	5
2.3	Acronis True Image Home の実行.....	5
2.4	Acronis True Image Home へのアップグレード.....	5
2.5	Acronis True Image Home のアンインストール.....	5
<b>第 3 章</b>	<b>Acronis テクノロジと概要</b> .....	<b>6</b>
3.1	ファイル アーカイブとディスクパーティション イメージの違い.....	6
3.2	完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップ.....	6
3.3	Acronis セキュア ゾーン.....	7
3.4	Acronis リカバリ マネージャ.....	8
3.4.1	動作の仕組み.....	8
3.4.2	使用方法.....	8
3.5	Acronis バックアップ ロケーション.....	8
3.6	Acronis スナップ リストア.....	10
3.6.1	Acronis スナップ リストアを使用する際の制限.....	10
3.6.2	動作の仕組み.....	10
3.6.3	使用方法.....	10
3.7	ディスクとパーティション情報の表示.....	11
3.8	試用モード.....	11
3.9	Acronis Drive Cleanser、ファイル シュレッダー、およびシステム クリーンアップ.....	11
<b>第 4 章</b>	<b>Acronis True Image Home の使用</b> .....	<b>12</b>
4.1	メイン プログラム ウィンドウ.....	12
4.2	機能.....	16
<b>第 5 章</b>	<b>バックアップ アーカイブの作成</b> .....	<b>18</b>
5.1	バックアップの対象.....	18
5.2	バックアップの手順.....	19
5.2.1	コンピュータのバックアップ.....	19
5.2.2	ファイルのバックアップ.....	22
5.2.3	アプリケーションの設定のバックアップ.....	25
5.2.4	電子メールのバックアップ.....	26
5.2.5	バックアップアーカイブの保存先の選択.....	27
5.2.6	バックアップの種類を選択.....	28
5.2.7	バックアップ オプションを選択.....	28
5.2.8	アーカイブのコメントの入力.....	28
5.2.9	処理の概要とバックアップの進行状況.....	29
5.3	バックアップ オプションの設定.....	30
5.3.1	パスワード保護.....	30
5.3.2	バックアップから除外するファイル.....	30
5.3.3	前後に実行するコマンド.....	31
5.3.4	圧縮レベル.....	31
5.3.5	バックアップ パフォーマンス.....	31
5.3.6	アーカイブの分割.....	32

5.3.7	ファイルレベルのセキュリティ設定.....	33
5.3.8	メディア コンポーネント.....	33
5.3.9	追加の設定.....	34
5.3.10	エラー対応.....	34
<b>第 6 章</b>	<b>バックアップしたデータの復元 .....</b>	<b>35</b>
6.1	Windows 環境からの復元、またはブータブル メディアから起動しての復元.....	35
6.1.1	ブータブルメディアのネットワークの設定 .....	35
6.2	ファイル アーカイブからのファイルやフォルダの復元.....	36
6.3	イメージからのディスクパーティション、またはファイルの復元 .....	39
6.3.1	データの復元ウィザードの開始.....	39
6.3.2	アーカイブの選択.....	39
6.3.3	復元の種類の選択 .....	40
6.3.4	復元するディスクまたはパーティションの選択 .....	41
6.3.5	復元先のディスクまたはパーティションの選択 .....	41
6.3.6	復元するパーティションの種類の変更.....	42
6.3.7	復元するパーティションのファイル システムの変更 .....	43
6.3.8	復元するパーティションのサイズおよび位置の変更 .....	43
6.3.9	復元するパーティションに割り当てる論理ドライブ文字 .....	44
6.3.10	別のパーティションまたはハード ディスクの復元 .....	44
6.3.11	復元オプションの設定.....	44
6.3.12	復元の概要、および復元の実行.....	44
6.4	復元オプションの設定.....	45
6.4.1	ファイル上書きモード .....	45
6.4.2	復元時に上書きしないファイル .....	45
6.4.3	前後に実行するコマンド.....	45
6.4.4	復元の優先度 .....	46
6.4.5	ファイル レベルでのセキュリティ設定 .....	46
6.4.6	追加の設定.....	46
<b>第 7 章</b>	<b>試用モード.....</b>	<b>47</b>
7.1	試用モードの使用.....	47
7.2	試用モードの使用例.....	50
<b>第 8 章</b>	<b>Acronis バックアップ ロケーションの管理.....</b>	<b>51</b>
8.1	Acronis バックアップ ロケーションの作成 .....	51
8.1.1	Acronis バックアップ ロケーションのパス設定 .....	51
8.1.2	バックアップ ルールの設定 .....	52
8.2	Acronis バックアップ ロケーションの編集 .....	53
8.3	Acronis バックアップ ロケーションの削除 .....	53
8.4	Acronis バックアップ ロケーションの選択 .....	53
<b>第 9 章</b>	<b>タスクのスケジュール作成.....</b>	<b>54</b>
9.1	タスクのスケジュールの作成 .....	54
9.1.1	日単位での実行の設定 .....	58
9.1.2	週単位での実行の設定 .....	59
9.1.3	月単位での実行の設定 .....	60
9.1.4	1 回だけの実行の設定 .....	60
9.2	スケジュールを設定されたタスクの管理.....	61
<b>第 10 章</b>	<b>Acronis セキュア ゾーンの管理.....</b>	<b>62</b>
10.1	Acronis セキュア ゾーン of 作成 .....	62
10.2	Acronis セキュア ゾーン of サイズ変更.....	64
10.3	Acronis セキュア ゾーン of パスワードの変更 .....	65
10.4	Acronis セキュア ゾーン of 削除 .....	65

---

第 11 章 ブータブル メディアの作成.....	66
第 12 章 そのほかの処理 .....	68
12.1 バックアップ アーカイブのベリファイ.....	68
12.2 処理結果の通知 .....	69
12.2.1 電子メールによる通知.....	69
12.2.2 ポップアップウィンドウによる通知 .....	70
12.3 ログの表示 .....	71
第 13 章 アーカイブの参照とイメージのマウント .....	72
13.1 アーカイブ内のファイルの検索.....	73
13.2 イメージのマウント.....	75
13.3 イメージのマウント解除.....	76
第 14 章 新しいディスクへのシステムの転送(ディスクのクローン作成).....	77
14.1 概要.....	77
14.2 安全のために .....	78
14.3 ディスクのクローン作成の実行.....	78
14.3.1 クローン方法の選択.....	78
14.3.2 オリジナル ハード ディスクの選択 .....	79
14.3.3 ターゲット ハード ディスクの選択 .....	80
14.3.4 使用中のターゲット ハード ディスク.....	81
14.3.5 オリジナル ハード ディスクおよびターゲット ハード ディスクのパーティション レイアウト.....	81
14.3.6 オリジナル ハード ディスクへの処理 .....	82
14.3.7 オリジナル ハード ディスク データの消去 .....	82
14.3.8 移行方法 .....	83
14.3.9 新しいパーティション.....	83
14.3.10 ハード ディスク構成 .....	84
14.3.11 クローン作成の概要.....	84
14.4 手動パーティショニングによるクローン作成 .....	85
14.4.1 手動によるレイアウトの確認.....	85
第 15 章 新しいハード ディスクの追加 .....	87
15.1 ハード ディスクの選択 .....	87
15.2 新しいパーティションの作成 .....	88
15.3 ディスクの追加の概要 .....	89
第 16 章 セキュリティおよびプライバシー ツール .....	90
16.1 ファイル シュレッダーの使用.....	90
16.2 Acronis Drive Cleanser .....	91
16.3 定義済みデータ抹消方式の利用 .....	92
16.4 ユーザー定義のデータ抹消方法の作成 .....	93
16.5 システム クリーンアップ .....	94
16.6 システム クリーンアップ ウィザードの設定.....	95
16.6.1 [ファイル]の設定 .....	95
16.6.2 [コンピュータ]の設定 .....	96
16.6.3 [ドライブの空き領域]の設定 .....	96
16.6.4 [コマンド]の設定.....	97
16.6.5 [システム パスワード フィルタ]の設定.....	97
16.7 個別の項目のシステム クリーンアップ .....	97

---

---

<b>付録 A</b>	<b>パーティションおよびファイル システム</b> .....	<b>98</b>
A.1	ハード ディスクのパーティション.....	98
A.2	ファイル システム.....	98
A.2.1	FAT16.....	98
A.2.2	FAT32.....	99
A.2.3	NTFS.....	99
A.2.4	Linux Ext2.....	99
A.2.5	Linux Ext3.....	99
A.2.6	Linux ReiserFS.....	99
<b>付録 B</b>	<b>ハード ディスクおよび BIOS セットアップ</b> .....	<b>100</b>
B.1	コンピュータへのハード ディスクの設置.....	100
B.1.1	一般的なハード ディスクの設置方法.....	100
B.1.2	マザーボードのソケット、IDE ケーブル、および電源ケーブル.....	100
B.1.3	ハード ディスクドライブとジャンパの設定.....	101
B.2	BIOS.....	102
B.2.1	セットアップ ユーティリティ.....	102
B.2.2	Standard CMOS Setup メニュー.....	102
B.2.3	起動シーケンスの調整 – Advanced CMOS Setup メニュー.....	103
B.2.4	ハード ディスクの初期化エラー.....	104
<b>付録 C</b>	<b>ハード ディスクの抹消方法</b> .....	<b>105</b>
C.1	データの抹消方法の機能原則.....	105
C.2	Acronis で使用できるデータ抹消方法.....	106
<b>付録 D</b>	<b>起動パラメータ</b> .....	<b>107</b>

---

# 第 1 章 はじめに

## 1.1 Acronis True Image Home について

Acronis True Image Home は、コンピュータ上にあるすべての情報の安全を確保する統合ソフトウェアのセットです。Acronis True Image Home を使用すると、オペレーティング システム、アプリケーションなど、すべてのデータのバックアップや、不要になった機密データを完全に抹消することができます。このソフトウェアを使用することにより、指定したファイルやフォルダ、Windows アプリケーションの設定、Microsoft の電子メール クライアントのメッセージや設定、または、ハード ディスク全体や指定したパーティションなどをバックアップすることができるようになります。ハード ディスクのデータが損傷した場合や、ウイルスやマルウェアによってシステムが攻撃された場合にも、迅速かつ容易にバックアップからデータを復元できるため、何時間もかけてハード ディスクのデータやアプリケーションの設定を再構築する作業から解放されます。

Acronis True Image Home には、誤って重要なファイルを削除してしまった場合や、ハード ディスクがクラッシュした場合などに、コンピュータのシステムを復元するために必要なツールがすべて用意されています。これによって、障害で情報にアクセスできない場合や、システムが動かなくなった場合に、失ったデータやシステムを容易に復元することができます。

Acronis により開発され Acronis True Image Home に実装された独自のテクノロジーにより、オペレーティング システム、アプリケーションの設定、ソフトウェアのアップデートや、個人の設定、データなどの全ての情報を含んだセクタ単位での正確なディスク バックアップを行うことができます。

Acronis True Image Home では、個人情報の保護を助けます。通常、不要なデータを削除しても、コンピュータ上にその情報は残っています。Acronis True Image には、Acronis Drive Cleanser が含まれています。Acronis Drive Cleanser により、ファイルを完全に抹消したり、パーティションやディスク全体から個人情報を抹消できます。また Windows のシステムからユーザー操作履歴をクリーンアップするウィザードも用意されています。

Acronis True Image Home では、ほとんどのストレージ デバイスにバックアップを保存することができます。これには、内蔵ハード ディスク、外付型ハード ディスク、ネットワーク上の共有フォルダ、または CD-R/RW、DVD±R/RW、MO、Iomega Zip、Iomega Jaz などの IDE、SCSI、FireWire(IEEE-1394)、USB(1.0、1.1、2.0)、PC カード(PCMCIA)のリムーバブル メディアのドライブが含まれます。

Acronis True Image Home では、スケジュールしたバックアップを実行する際に、ユーザーが設定したバックアップポリシーに従って、バックアップの種類(完全、増分、差分)を自動的に選択します。

新しいハード ディスクドライブを設置する場合に Acronis True Image Home を使用すると、オペレーティング システム、アプリケーション、ドキュメント、個人の設定を含んだ情報を数分間で、古いハード ディスクから新しいハード ディスクに転送することができます。また、新しいハード ディスクに移行した後に、古いハード ディスクからすべての個人情報を抹消することができます。古いハード ディスクを処分する場合には、この操作を行うことをお勧めします。

ウィザードと Windows XP ライクなインターフェイスを使用することにより、作業がより容易となっています。またシグナル バーにより、システムのバックアップ状態がわかりやすく表示されます。システム障害が起こった場合は、Acronis True Image Home によりすぐにコンピュータを稼働できる状態に戻せます。

## 1.2 Acronis True Image 11 Home の新機能

- **試用モード** — 仮想システム用に、ハード ディスクの一時的な複製を作成します。新しいソフトウェアのインストール、インターネットからのファイル ダウンロード、電子メールの添付ファイルを開くといった危険の要素のある変更を、仮想システム上で行うことができます。仮想システム上でこれらの変更が問題を起さなければ、変更内容を実機に適用することも、または適用せずに破棄することもできます。これらの処理の最中に、仮想システムがクラッシュするか、ウイルスに感染した場合には、一時的な複製を削除してシステムをオリジナルの健全な状態に復元することができます。再起動するだけで、オリジナルのハード ディスクが復元され、ウイルスやその他の望ましくない変更は破棄されます。
- **Acronis Drive Cleanser、ファイル シュレッダー、およびシステム クリーンアップ** — ハード ディスク全体、個別のパーティション、または個別のファイルに保存されているデータを完全に抹消し、システムからユーザー操作履歴を削除します。ファイルの削除やディスク全体の抹消には、8 種類の標準データ抹消方式、またはユーザー定義した方式を使用することもできます。この機能は同梱される Acronis Drive Cleanser によって実現されます。Acronis Drive Cleanser は、Acronis Privacy Expert Suite にも含まれている単独の製品でした。製品として、Acronis Drive Cleanser は数々の賞を受賞しています。

- **詳細な設定を可能にした柔軟で強力なスケジューラ** — 新しいスケジューラでは、バックアップやベリファイのタスクをもっと柔軟にスケジュール設定できます。新しく追加された設定オプションにより、用途が大きく広がります。ログオン/ログオフ、Windows の起動、データの追加または削除で所定のサイズを超えた場合のイベント発生、または経過時間によるイベント発生などをスケジュールすることができます。また、コンピュータがアイドル状態の場合にバックアップを開始するように設定できるため、生産性を低下させることなくバックアップを実行できます。
- **より使いやすく** — 数多くのインターフェイスの改良や操作性の向上により、さらに使いやすくなりました。Acronis True Image Home は、連携して動作するシンプルで便利なユーティリティをまとめたスイートです。また、インストール直後からコンピュータを保護します。
- **アーカイブの暗号化** — 業界標準の AES 暗号化アルゴリズムを使用した強力なセキュリティでデータを暗号化します。暗号化キーは、なし、128 ビット、192 ビット、または 256 ビットの 4 種類から選択できます。
- **全セクタのイメージを作成する** — 正確なセクタ単位のディスク イメージを作成できます。この機能は、破損したディスク ドライブのバックアップや、重要なファイルを誤って消去してしまったパーティションのイメージを作成する場合に、特に役立ちます。このオプションでは、ハード ディスクの使用されているセクタも未使用のセクタもコピーされません。
- **不良セクタを無視する** — このオプションでは、ハード ディスク上に不良セクタがあった場合でもバックアップが実行されます。手動操作ができない無人バックアップの際にも役立ちます。このオプションを有効にすると、不良セクタの読み取りエラーまたは書き込みエラーが発生した場合もバックアップが実行されます。
- **サイレント モード** — バックアップ/復元処理中のエラーを無視するように設定することができます。このモードでは、バックアップ タスクまたは復元タスクの実行中にエラーが発生した場合に通知は表示されませんが、代わりにタスクの完了後にすべての処理についての詳細なログを参照することができます。
- **イメージ内のファイルの検索** — ファイル名またはファイル名の一部を指定してイメージ内のファイルを検索できるため、個別のファイルを簡単にすばやく復元できます。
- **すべてのバックアップ ロケーションをファイル レベルまで検索** — 複数のアーカイブやバックアップ ロケーションをファイル名またはファイル名の一部を指定して検索できるため、個別のファイルを簡単にすばやく復元できます。
- **アーカイブをベリファイするためのシェル拡張** — Windows エクスプローラのコンテキスト メニューからアーカイブを簡単にベリファイできます。バックアップ アーカイブ ファイルを見つけて右クリックし、**[ベリファイ]**を選択できます。



バックアップ時に**[全セクタのイメージを作成する]**オプションを有効にし、全セクタの復元を行う事により、セクタ位置が保証されたバックアップと復元を行う事ができます。ただし次のセクタについては、オリジナルと異なります。

- ディスク署名が記録されているセクタ
- 最終セクタ
- パーティション未割当領域

## 1.3 システム要件とサポートされるメディア

### 1.3.1 最小システム要件

Acronis True Image Home には次のハードウェアが必要です。

- Pentium プロセッサまたは同等以上のもの
- 128MB の RAM
- ブータブル メディア作成用の FDD または CD-R/RW ドライブ
- マウス(推奨)

### 1.3.2 サポートされるオペレーティングシステム

- Windows 2000 Professional SP4
- Windows XP SP2
- Windows XP Professional x64 Edition
- Windows Vista (すべてのエディション)

サポートされていないファイル システムの場合でも、Acronis True Image Home はセクタ単位でデータをバックアップできます。ただし、インテル ベースの Apple Macintosh® はサポートしていません。

---

### 1.3.3 サポートされるファイル システム

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3
- ReiserFS
- Linux SWAP

サポートされていないファイル システムを使用していたり、ファイル システムが破損していた場合でも、セクタ単位でデータをバックアップできます。

### 1.3.4 保存先としてサポートされるストレージ メディア

- ハード ディスクドライブ
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- FTP サーバー\*
- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R(2層 DVD+Rを含む)、DVD+RW
- USB 1.0 / 2.0、FireWire(IEEE-1394)および PC カード ストレージ デバイス
- ZIP、Jaz などのリムーバブル メディア

\* FTP サーバーでパッシブモードによるファイル転送を許可する必要があります。FTP サーバーからデータを復元する場合は、アーカイブのサイズが 2GB 以下である必要があります。また、バックアップするコンピュータのファイアウォールの設定で、TCP/UDP プロトコルのためにポート番号 20 と 21 を開き、Windows サービスの **[Routing and Remote Access]** を無効にすることをお勧めします。



ストレージメディアは Windows から認識できるファイルシステムで予めフォーマットされている必要があります。ただし CD / DVD メディアはその限りではありません。

## 1.4 テクニカル サポート

Acronis True Image Home を正規に購入し、ユーザー登録をいただいたお客様に対して、テクニカル サポートを提供しています。詳細については同梱されている「Acronis True Image 11 Home 補足説明書」をご参照ください。

## 第 2 章 Acronis True Image Home のインストールと起動

### 2.1 Acronis True Image Home のインストール

Acronis True Image Home のインストール手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Home のセットアップ ファイルを実行します。
2. インストール メニューで、Acronis True Image Home のインストールを選択します。
3. 画面に表示されるインストール ウィザードの指示に従います。



Acronis True Image Home には**[標準]**、**[カスタム]**、**[完全]**の 3 つのインストール オプションがあります。**[カスタム]**を選択すると、Acronis True Image Home の他に**ブータブル メディア ビルダ**や**Bart PE プラグイン**のインストールを選択することができます。

ブータブル メディア ビルダを使用すると、ブータブル メディアを作成できます(詳細については第 11 章「ブータブル メディアの作成」をご参照ください)。パッケージ製品をご購入いただいた場合は、製品 CD がブータブル メディアとなっているため作成する必要はありません。ブータブル メディア ビルダをインストールすると、メイン プログラム ウィンドウまたはブータブル メディア ビルダから、いつでもブータブル メディアや、ブータブル メディアの ISO イメージを作成することができます。

Bart PE プラグインを使用すると、ブータブル メディアから Windows ライクな環境を起動することができます。アプリケーションは、プラグインの形式で Bart PE にインストールされます。Bart PE プラグインのインストールを選択すると(これはデフォルトで無効になっています)、Bart PE プラグインとして、Acronis True Image Home を含めることができます。プラグイン ファイルは、他のプログラムとともに、インストールされるフォルダにコピーされます。



ダウンロード版をご使用の場合は、ブータブル メディアを必ず作成しておいてください。



ブータブル メディアから起動できないコンピュータでは、Acronis True Image Home のいくつかの機能を利用できません。



Acronis True Image Home をインストールすると、デバイス マネージャの一覧に新規のデバイスが作成されます(**[コントロール パネル]**→**[システム]**→**[ハードウェア]**→**[デバイス マネージャ]**→**[Acronis Devices]**→**[Acronis True Image Backup Archive Explorer]**)。イメージをマウントするのにこのデバイスが必要となるため、このデバイスを無効にしたりアンインストールしないでください(詳細については第 13 章「アーカイブの参照とイメージのマウント」をご参照ください)。

## 2.2 Acronis True Image Home の取り出し

Acronis True Image Home をインストールする場合、セットアップ ファイルをローカルドライブまたはネットワーク上の共有フォルダに保存することができます。これは既存のコンポーネントのインストール内容を変更または修復する場合に便利です。

セットアップ ファイルの保存手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Home のセットアップ ファイルを実行します。
2. インストール メニューで、プログラム名を右クリックして**[取り出し]**を選択します。
3. セットアップ ファイルを保存する場所を選択して**[保存]**をクリックします。

## 2.3 Acronis True Image Home の実行

**[スタート]**メニューから**[すべてのプログラム]**→**[Acronis]**→**[Acronis True Image Home]**→**[Acronis True Image Home]**を選択するか、デスクトップ上のショートカットをダブルクリックすることにより Acronis True Image Home を起動することができます。

何らかの理由でオペレーティング システムが起動しなくなった場合でも、Acronis リカバリ マネージャを実行することができます。ただし、この場合は事前にAcronis リカバリ マネージャを有効化しておく必要があります。詳細については「3.4 Acronis リカバリ マネージャ」をご参照ください。Acronis リカバリ マネージャを実行する場合は、コンピュータの起動時に **[F11]** キーを押す操作を求めるメッセージが表示されている間に **[F11]** キーを押します。これによりAcronis True Image Home が起動され、破損したパーティションを復元することができます。

ハード ディスクのデータが完全に破損しているためシステムが起動できない場合または Acronis リカバリ マネージャを有効化していない場合は、製品 CD または作成したブータブル メディアから Acronis True Image Home を起動してください。以前に作成したイメージからハード ディスクを復元することができます。



クラシック**[スタート]**メニューを使用している場合は、**[スタート]**メニューから**[プログラム]**→**[Acronis]**→**[Acronis True Image Home]**→**[Acronis True Image Home]**を選択して Acronis True Image Home を起動することができます。

## 2.4 Acronis True Image Home へのアップグレード

Acronis True Image シリーズが既にインストールされている場合は、そのシリーズの Acronis True Image をアンインストールしてから本製品のインストールを行ってください。試用版がインストールされている場合も同様に、試用版をアンインストールしてから本製品のインストールを行ってください。

新しいバージョンを使って作成したバックアップ アーカイブは、以前のバージョンのプログラムとは互換性がない場合があります。そのため Acronis True Image Home を古いバージョンに置き換えた場合は、その古いバージョンによるアーカイブの再作成が必要となります。同じ理由で、True Image Home の各アップグレード後には、新しくブータブルメディアを作成してください。



1つ前のバージョンのバックアップ アーカイブ イメージを復元は可能ですが、2つ以上前のバージョンのバックアップ アーカイブ イメージに関しては復元できません。また下位バージョンでの復元に関しては保証いたしておりません。なお、バージョンの異なる増分、差分バックアップの作成・復元は保証されません。

## 2.5 Acronis True Image Home のアンインストール

**[スタート]**メニューから**[コントロール パネル]**→**[プログラムの追加と削除]**→**[Acronis True Image Home]**→**[削除]**を選択して、画面の指示に従います。処理の完了後に、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。



クラシック**[スタート]**メニューを使用している場合は、**[スタート]**メニューから**[設定]**→**[コントロール パネル]**→**[プログラムの追加と削除]**→**[Acronis True Image Home]**→**[削除]**を選択して、画面の指示に従います。

Windows Vista を使用している場合は、**[スタート]**メニューから**[コントロール パネル]**→**[プログラムと機能]**→**[Acronis True Image Home]**→**[アンインストール]**を選択して、画面の指示に従います。処理の完了後に、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

## 第 3 章 Acronis テクノロジーと概要

### 3.1 ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージの違い

バックアップ アーカイブ(または「バックアップ」ともいいます)は、選択したファイルやフォルダのデータのコピー、または選択したディスクやパーティションに保存されているすべての情報のコピーを含んだファイルまたはファイルのグループです。

ファイルやフォルダをバックアップする場合は、フォルダ ツリーとともにデータのみが圧縮され保存されます。

ディスクやパーティションのバックアップは、ファイルやフォルダのバックアップとは異なった方法で行われます。オペレーティングシステム、レジストリ、ドライバ、アプリケーション、およびデータ ファイル、さらにユーザーからは隠されているシステム領域も含んだディスクのスナップショットが、セクタ バイ セクタ方式で保存されます。この処理は「ディスク イメージの作成」といい、作成されたバックアップ アーカイブを「ディスク/パーティション イメージ」ともいいます。



Acronis True Image Home では、(サポートされているファイル システム)のデータを含んだハード ディスク部分のみがデフォルトで保存されます。ページング ファイル(Windows NT/2000/XP/Vista では pagefile.sys)、またはコンピュータが休止状態にあるときに RAM の内容を保持するファイル(hiberfil.sys)はダミー ファイルに置き換えられます。これによりイメージ ファイル サイズが縮小され、イメージ ファイルの作成と復元が迅速化されます。ただし、**[全セクタ単位のイメージを作成する]**オプションを使用すると、ハード ディスクのすべてのセクタ イメージを含めることができます。



パーティション イメージにはすべてのファイルやフォルダが含まれます。これにはすべての属性(隠しファイル、システムファイルなど)、ブートレコード、FAT(ファイル アロケーション テーブル)、ルート ディレクトリのファイルおよびマスタ ブートレコード(MBR)を持つハード ディスクのトラック 0 が含まれます。



ディスク イメージには、マスタ ブートレコード(MBR)を持つトラック 0 のほか、すべてのディスク パーティションのイメージが保存されます。



マスタ ブートレコード(MBR)は、コンピュータの起動時に最初に読み込まれるハード ディスク上の領域で、起動に必要な情報が記録されています。

デフォルトで、Acronis True Image Home のすべてのバックアップ アーカイブの拡張子は「.tib」となります。このファイルの拡張子は変更しないでください。



バックアップ アーカイブの保存先が FAT 32 でフォーマットされている場合は、自動的に 4GB で分割されて保存されます。分割されたバックアップ アーカイブは Acronis True Image から 1 つのファイル グループとして認識されます。

ファイル アーカイブからだけでなく、ディスク/パーティション イメージからも、ファイルやフォルダを復元することができます。ファイルやフォルダを復元するには、イメージを仮想ディスクとしてマウントするか(第 13 章「アーカイブの参照とイメージのマウント」をご参照ください)、またはイメージの復元を開始して、**[指定したファイルおよびフォルダの復元]**を選択します。

### 3.2 完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップ

Acronis True Image Home では、完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップを作成できます。

**完全バックアップ** — バックアップを作成した時点のすべてのデータが含まれます。完全バックアップは、後で作成する増分バックアップや差分バックアップのベースとして使用するか、単体のアーカイブとして使用できます。完全バックアップは、増分バックアップや差分バックアップに比べて短い時間で復元できます。

**増分バックアップ** — 直前の完全/増分バックアップの作成以降に変更されたデータのみが含まれます。このため、サイズは小さく作成に時間もかかりません。増分バックアップには変更部分しか含まれていないため、復元には以前に作成したすべての増分バックアップと、ベースとなった完全バックアップが必要になります。増分バックアップから復元する場合は、完全バックアップと増分バックアップが同じフォルダに保存されている必要があります。

**差分バックアップ** — 完全バックアップの作成以降に変更されたデータのみが含まれます。一般に、差分バックアップは増分バックアップより高速に復元されます。これは、増分バックアップのように、以前の完全バックアップからの長い時系列を処理する必要がないからです。

完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ ファイルを管理することが望ましくない場合には最適なソリューションです。すべての増分バックアップまたは差分バックアップは、完全バックアップイメージと同じフォルダに保存する必要があります。

システム障害が発生した際に、最新のデータの状態のみが復元できればよい場合などは、差分バックアップを検討してください。差分バックアップは、全データ量に比較してデータ変更が少ない傾向にある場合は特に有効です。

頻繁なバックアップおよび保存された状態の任意の時点に戻せるようにしておく必要がある場合には、増分バックアップが最も有用です。最初に完全バックアップを作成して、その後毎日増分バックアップを作成する場合は、完全バックアップを毎日作成する場合と同じ結果を得ることができます。増分イメージのサイズは、完全イメージまたは差分イメージと比べてかなり小さくなります。



ディスクを最適化した後で増分バックアップ、または差分バックアップを作成すると、通常に比べてかなり大きなサイズになります。これは、ディスク最適化ツールのデフラグ プログラムによってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにこれらの変更が反映されるためです。このため、ディスクの最適化後は、完全バックアップを再作成することをお勧めします。

### 3.3 Acronis セキュア ゾーン

Acronis セキュア ゾーンは、コンピュータ システム上にバックアップ アーカイブを保存するための、特別な隠しパーティションです。Acronis セキュア ゾーンには、バックアップ アーカイブの安全確保のため、通常のアプリケーションからはアクセスできません。Acronis True Image Home のウィザードでは、Acronis セキュア ゾーンはアーカイブを保存するために利用可能なパーティションとともに、一覧に表示されます。Acronis セキュア ゾーンは、Acronis リカバリ マネージャ、Acronis スナップ リストアまたは試用モード機能(次をご参照ください)を使用するために必要です。



外付型ハード ディスク上に Acronis セキュア ゾーンを作成した場合は、試用モードと Acronis リカバリ マネージャ機能を使用することができません。そのため、外付型ハード ディスク上に Acronis セキュア ゾーンを作成することは推奨しません。

Acronis セキュア ゾーンに空き領域があれば、Acronis セキュア ゾーンをバックアップ ファイルの保存場所として利用できます。十分な空き領域がない場合は、空き領域を作るために古いバックアップが削除されます。

Acronis True Image Home は次の方法で Acronis セキュア ゾーン内のバックアップを削除します。

- Acronis セキュア ゾーンにバックアップを作成するための十分な空き領域がない場合、プログラムは最も古い完全バックアップと、このバックアップの増分/差分バックアップをすべて削除します。
- 1 つの完全バックアップ(とこのバックアップの増分/差分バックアップ)しか残っていない状態で、完全バックアップが進行中である場合は、古い完全バックアップと増分/差分バックアップが削除されます。
- イメージ作成中に空き領域がなくなった場合、エラー メッセージが表示されます。この場合は、Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大して、バックアップを再度実行する必要があります。

Acronis セキュア ゾーンでは、領域のオーバーフローの問題を心配することなく、スケジュール(第 9 章「タスクのスケジュール」をご参照ください)に従って自動的にデータをバックアップできます。ただし、増分バックアップの作成を長く続ける場合には、**[Acronis セキュア ゾーンの管理ウィザード]**の 2 画面目に表示される、Acronis セキュア ゾーンの空き領域を定期的にチェックすることをお勧めします。



セキュア ゾーンに保存されたバックアップ アーカイブは**[アーカイブの参照]**で開くことはできません。ただし、ディスク /パーティション イメージで保存されている場合は、**[イメージのマウント]**で開くことが可能です。

Acronis セキュア ゾーンを作成、サイズ変更または削除については、第 10 章「Acronis セキュア ゾーン管理」をご参照ください。

## 3.4 Acronis リカバリ マネージャ

### 3.4.1 動作の仕組み

Acronis リカバリ マネージャを使用すれば、オペレーティング システムをロードせずに Acronis True Image Home を起動できます。この機能により、何らかの理由でオペレーティング システムが起動しない場合でも、Acronis True Image Home を実行して損傷したパーティションを復元することができます。ブータブル メディアから起動する場合と異なり、Acronis True Image Home の起動には別のメディアやネットワークへの接続は必要ありません。

### 3.4.2 使用方法

起動時に Acronis リカバリ マネージャを使用できるようにするには、次のように準備を行います。

1. Acronis True Image Home をコンピュータにインストールします。
2. 内蔵ハード ディスクに Acronis セキュア ゾーンを作成します(第 10 章「Acronis セキュア ゾーンの管理」をご参照ください)。
3. Acronis リカバリ マネージャを有効化します。有効化するには、**[Acronis リカバリ マネージャの有効化]**をクリックし、ウィザードの指示に従います。

Acronis セキュア ゾーンを作成する前に Acronis リカバリ マネージャを有効化しようとする、Acronis セキュア ゾーンの作成を求めるメッセージが表示されるので、Acronis セキュア ゾーンを作成と Acronis リカバリ マネージャの有効化を行ってください。Acronis セキュア ゾーンが既にある場合には、すぐに Acronis リカバリ マネージャが有効化されます。



Acronis リカバリ マネージャが有効化されると、MBR(マスタ ブートレコード)は Acronis リカバリ マネージャのブートコードで上書きされます。サードパーティのブート マネージャがインストールされていた場合は、Acronis リカバリ マネージャを有効化した後でそのブート マネージャを再度有効にする必要があります。Linux ロードャー(LiLo や GRUB など)の場合は、Acronis リカバリ マネージャを有効にする前に、MBR ではなく Linux ルート(またはブート)パーティション ブートレコードへのロードャーのインストールを検討してください。



メーカー製のコンピュータなどで、そのメーカー特製のリカバリ機能がある場合は、Acronis リカバリ マネージャを使用することは推奨していません。



ブータブル メディアを起動できないコンピュータでは、Acronis リカバリ マネージャを使用できません。

障害が発生した場合、コンピュータの電源を投入し、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら **[F11]** キーを押します。**[F11]** キーを押すと、ブータブル メディアと同等の Acronis True Image Home コンポーネントが起動されます。損傷したパーティションの復元方法については、第 6 章「バックアップしたデータの復元」をご参照ください。



ブータブル メディアで使用されるドライブ文字は、Windows 上のドライブ文字と順番が異なる場合があります。たとえば、ブータブル メディア上で識別される D: ドライブが、Windows 上では E: ドライブに対応している場合があります。

## 3.5 Acronis バックアップ ロケーション

最近のハード ディスクドライブは、性能、容量およびコストの面からバックアップ アーカイブを保存するために簡単で信頼性の高いストレージ メディアとなっています。外付型ドライブとネットワーク上の共有フォルダがもっとも一般的な保存場所となっています。もう一つのソリューションは、コンピュータのドライブを別の内蔵ドライブにバックアップすることです。FTP サーバー上にストレージ領域を編成して、インターネット経由でアクセスすることもできます。ハード ディスクドライブは、内蔵、外付型、ネットワーク上の共有フォルダのいずれも、大容量でスケジューリングされた無人バックアップにいつでも使用できます。

問題は、オペレーティング システム、アプリケーション、音楽やビデオなどのユーザー ファイル サイズがますます大きくなり、それらファイルのバックアップ アーカイブ ファイルのサイズも非常に大きくなり、ディスク領域を大量に消費することです。従って、最新のバックアップを最大限保存すると同時に、古いバックアップを削除することが重要になってきます。重要なデータを失うことなく、削除できる古くなったバックアップを探してバックアップ アーカイブの複数のファイルを参照することに、何時間も費やす可能性もあります。

ユーザーをこのような作業から解放するために、Acronis はバックアップ ファイルの保存先について新しいアプローチを提案します。これは、バックアップ ロケーションと呼ばれるローカルまたはネットワーク上の共有フォルダに保存されたアーカイブの自動管理機能の提供です。

バックアップ ロケーションには次のような特長があります。

- サイズが可変。
- 動作のカスタマイズと内容の表示が可能。
- Acronis セキュア ゾーンのように別の保護されたパーティションではなく、内蔵、外付型またはネットワーク上の共有フォルダ、または FTP サーバー上の通常のフォルダを指定できる。

Acronis バックアップ ロケーションの主な仕組みについては、次のとおりです。

- バックアップ ファイルの名前を自動的につける。
- Acronis バックアップ ロケーションを 1 つのフォルダ全体として指定する。
- スケジュールされたバックアップ タスクのバックアップの種類(完全、増分、差分)をユーザーが設定したバックアップポリシーに従って自動的に選択する。
- 古くなったバックアップ ファイルをユーザーにより設定されたルールに従って、自動的に統合または削除する。

### Acronis バックアップ ロケーションに対するルールの設定

1 つ以上の Acronis バックアップ ロケーションを設定し、サイズや保存期間についての全体的な制限をすべての Acronis バックアップ ロケーションに設定できます。制限には次のものがあります。

- Acronis バックアップ ロケーションの最大サイズ
- バックアップの最大数(回数)
- 最大保存期間(日)

バックアップ ロケーションにバックアップが作成されると、プログラムによってそのロケーションのバックアップ ルール違反(バックアップ用にあらかじめ設定した最大サイズを超える場合など)がチェックされ、制限を超えている場合は最も古いバックアップが統合されます。たとえば、バックアップ ロケーションにバックアップ ファイル用として最大サイズを 50GB と設定していたとして、バックアップが 55GB に達したとします。この場合、バックアップ ルール違反が発生し、あらかじめ設定したルールとポリシーに基づき統合や削除の処理がシステムにより自動的に実行されます。

この処理では一時ファイルを作成するためのディスク領域を必要とします。また、プログラムによって違反が検出された場合、制限値を超えたこととなります。したがって、ファイルを統合するためには、バックアップ ロケーションの最大サイズとは別に一定のディスク領域を必要とします。必要となる領域の大きさは、ロケーション中の最大バックアップのサイズ以上となります。



バックアップ ポリシーを設定する場合、**[タスクのスケジュール ウィザード]**を起動して、**[バックアップ アーカイブの保存先]**画面のバックアップ アーカイブの保存先を左側のフォルダ ツリーの上部にある**[Acronis バックアップ ロケーション]**一覧から選択してください。バックアップ ロケーションを**[Acronis バックアップ ロケーション]**一覧から選択せずに、通常のフォルダから選択すると、ルールは有効になりません。

### Acronis バックアップ ロケーションの管理

ユーザーは Acronis バックアップ ロケーションを削除できます。またすべての Acronis バックアップ ロケーションのルールを編集できます。

ルールの変更は、次のバックアップに適用されます。その結果、Acronis バックアップ ロケーションの内容は新しいルールに従います。

## 3.6 Acronis スナップ リストア

Acronis スナップ リストアを使用すると、イメージからシステムが完全に復元されていなくても、クラッシュしたコンピュータからオペレーティング システムを起動して作業を開始できます。なお、復元はバックグラウンドで継続されます。

### 3.6.1 Acronis スナップ リストアを使用する際の制限

1. Acronis セキュア ゾーンのイメージのみ使用できます。
2. Windows Vista のイメージをサポートしていません。Windows Vista のイメージが検出されると、Acronis スナップ リストアのオプションは表示されません。
3. イメージにオペレーティング システム(論理パーティション、またはディスク イメージ)が含まれていない場合や、ファイル アーカイブからの復元の場合には使用できません。

### 3.6.2 動作の仕組み

復元処理が開始されると、Acronis True Image Home は、次のように動作します。

1. イメージの中から、システム ファイルを含むセクタを見つけて、これらのセクタを最初に復元します。このようにしてオペレーティング システムが復元され、短時間のうちに動作を開始することができます。オペレーティング システムが動作を開始すると、ファイルの中身はまだ復元されていませんが、ユーザーはファイルとともにフォルダ ツリーを表示できます。そして、ユーザーは作業を開始することができます。
2. ハード ディスクに、ディスク固有のドライバを書き込み、ファイルに対するシステムからの割り込み要求をインターセプトできるようにします。ユーザーがファイルを開くか、またはアプリケーションを起動した場合は、このドライバがシステムからの要求を受信して、操作に必要なセクタを復元します。
3. 同時にバックグラウンドでは、完全なセクタ バイ セクタ方式によるイメージの復元が、Acronis True Image Home によって実行されています。ただし、システムから要求されるセクタの復元処理の優先順位が最も高くなります。

最終的に、ユーザーが何も操作を実行しない場合でも、イメージは完全に復元されます。しかし、システム障害の発生後できるだけ早く作業を再開する必要がある場合、(最も一般的なイメージのサイズである)10~20GB のイメージの復元に 10 分程度かかることを考えると、少なくとも数分は節約できます。イメージが大きくなればなるほど、節約できる時間は大きくなります。

### 3.6.3 使用方法

システムがクラッシュしたときに Acronis スナップ リストアを使用できるようにするには、次のように準備を行います。

1. Acronis True Image Home をインストールします。
2. ハード ディスクに Acronis セキュア ゾーンを作成します(第 10 章「Acronis セキュア ゾーン」をご参照ください)。
3. Acronis リカバリ マネージャを有効化し(「3.4 Acronis リカバリ マネージャ」をご参照ください)、Acronis True Image Home のブータブル メディアを作成します(第 11 章「ブータブル メディアの作成」をご参照ください)。
4. Acronis セキュア ゾーンにシステム ディスク(のイメージ)をバックアップします(「5.2.1 コンピュータのバックアップ」をご参照ください)。他のディスク/パーティションもバックアップすることはできますが、システム ディスクのイメージは必ずバックアップしてください。



スナップ リストアを実行すると、Acronis True Image Home は常にシステム ディスク全体を復元します。このため、システム ディスクが複数のパーティションで構成されている場合は、それらをすべてイメージに含める必要があります。スナップ リストア実行後に、イメージに含まれていないパーティションはすべて失われます。

障害が発生した場合には、ブータブル メディアまたは **F11** キーを使用してコンピュータを起動します。復元処理を開始して(「6.3 イメージからのディスク/パーティション、またはファイルの復元」をご参照ください)、Acronis セキュア ゾーンからシステム ディスクのイメージを選択し、**[スナップ リストアを使用する]**を選択して、次の画面で**[実行]**をクリックします。数秒以内にコンピュータがシステムの復元のために再起動します。ログインして作業を開始してください。

サポートされる Windows オペレーティング システムでも同様に、Acronis True Image Home から Acronis スナップ リストアを実行することができます。ただし、Windows が起動しない場合には、ブータブル メディアが必要です。

---

## 3.7 ディスクとパーティション情報の表示

各種のウィザードに表示されるすべての設定項目のうち、ディスクに関する設定およびデータの表示形式は変更が可能です。

画面の右側には 3 つのアイコンが表示されます。[アイコンの整理]、[表示項目の選択]、および選択した項目のプロパティを表示する[プロパティ](オブジェクトの右クリックで表示されるコンテキストメニューにも表示)です。

特定の項目を基準にしてメッセージを並べ替えるには、その項目のヘッダーをクリックします。逆の順番に並べ替えるには、もう一度ヘッダーをクリックします。または、[アイコンの整理]をクリックして並べ替えの基準にする項目を選択します。

表示する項目を選択するには、ヘッダー行を右クリックするか、[表示項目の選択]をクリックします。次に、表示する項目のチェックボックスをオンにします。[表示項目の選択]を左クリックすると、[上に移動]ボタンと[下に移動]ボタンを使用して表示する項目の順番を変更できます。

[プロパティ]をクリックすると、選択したパーティションまたはディスクのプロパティ画面が表示されます。

この画面は 2 つのペインで構成されています。左側のペインにはプロパティのツリーが、右側のペインには選択したプロパティの詳細な説明が表示されます。ディスク情報にはディスクの物理的なパラメータ(接続の種類、デバイスの種類、サイズなど)が含まれ、パーティション情報にはパーティションの物理的なパラメータ(セクタ、場所など)と論理的なパラメータ(ファイルシステム、空き領域、割り当てられている文字など)の両方が含まれます。

項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。

## 3.8 試用モード

Acronis True Image Home の試用モード機能を利用すると、ソフトウェアのインストールや電子メールの添付ファイルを開くことなどの潜在的に危険な操作をコンピュータに危険を及ぼさないで実行することができます。これは、管理された安全な一時的ワークスペースをコンピュータの他の部分から隔離して作成することにより実現されています。これらの処理中にシステムがクラッシュしたり、コンピュータが応答しなくなった場合、再起動すれば、システムは Acronis True Image Home によって以前の状態に復旧されます。操作が正常に終了した場合、実機に変更内容を適用するか、変更を破棄するかを選択できます。(詳細については、第 7 章「試用モード」をご参照ください。)

## 3.9 Acronis Drive Cleanser、ファイル シュレッダー、およびシステム クリーンアップ

Acronis True Image Home には、ハード ディスクドライブ全体や個別のパーティションにあるデータを完全に抹消するユーティリティや個別のファイルやシステム上のユーザー操作履歴を抹消するユーティリティが含まれています。古いハード ディスクを容量の大きい新しいハード ディスクに交換する場合、多くの機密情報を古いドライブに残してしまうことがあります。それらの情報は、たとえ再フォーマットした場合でも復元可能です。Acronis True Image Home に含まれた別製品としても販売されている Acronis Drive Cleanser は、ハード ディスクドライブやパーティション上の機密情報の抹消に、保証された機密データの抹消方式を提供します。機密情報の重要性に応じて、適切なデータ抹消方式を選択できます。ファイル シュレッダーでは、個別のファイルやフォルダに対しても保証された機密データの抹消方式が提供されます。コンピュータでの作業中には、存在することさえ知らないさまざまなシステム ファイルに操作の痕跡が何千バイトも残ります。これには、ユーザー名やパスワードなどの、あなたに「なりすます」ことに利用できる個人情報があります。[システム クリーンアップ ウィザード]を使用すれば、これらの操作履歴をすべて抹消することができます。

## 第 4 章 Acronis True Image Home の使用

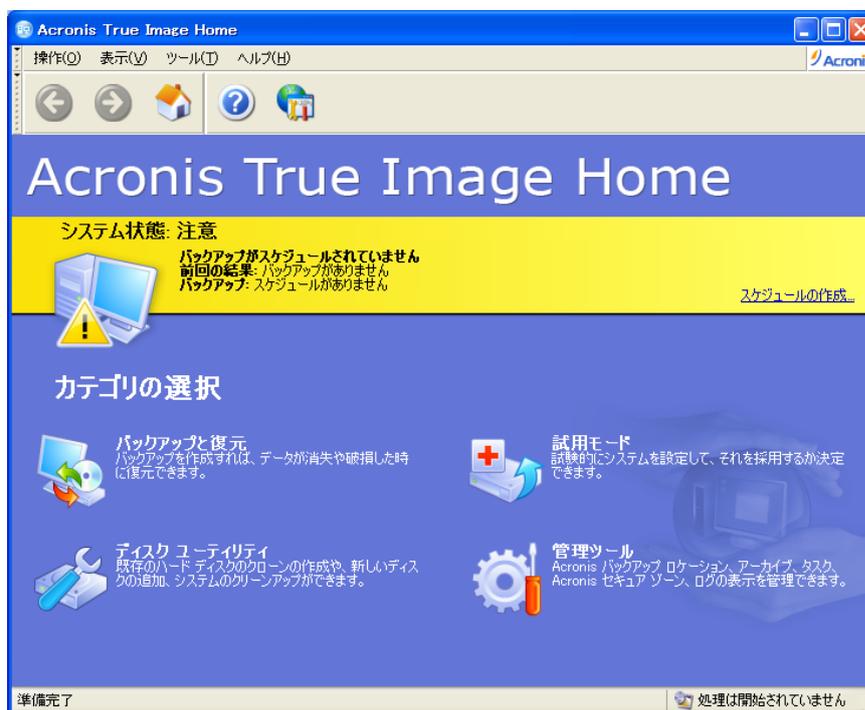
### 4.1 メイン プログラム ウィンドウ

Acronis True Image Home を起動すると最初に目を引くのは、メイン プログラム ウィンドウに色つきで表示された幅広のバーです。これを「シグナル バー」といいます。

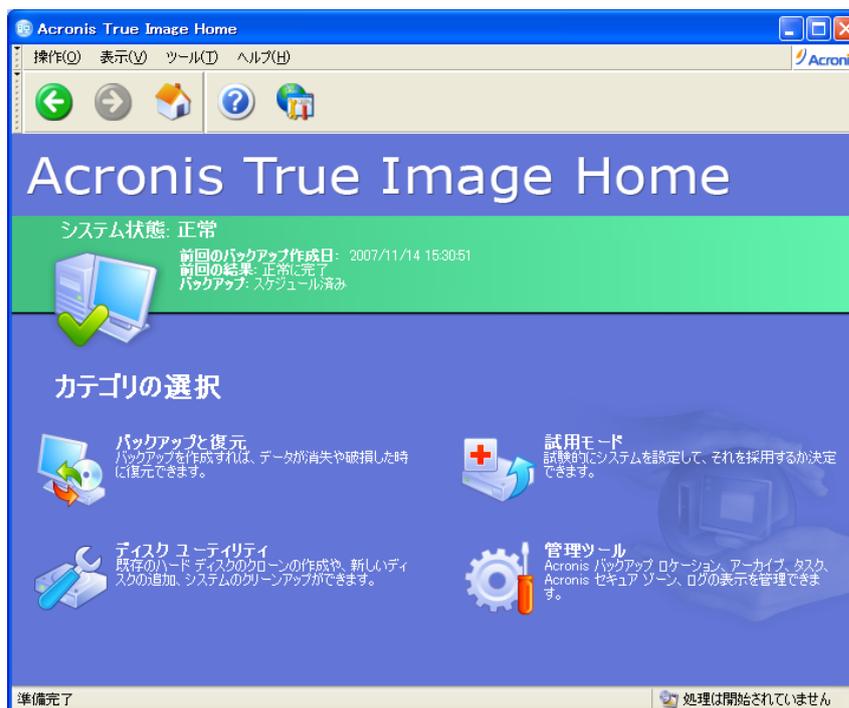
シグナル バーによって、現在のバックアップの状態をすぐに確認できます。また、前回のバックアップの日時とバックアップの結果、そしてバックアップ タスクがスケジュールされているかが表示されます。

システムの状態とシグナル バーは次のように変化します。

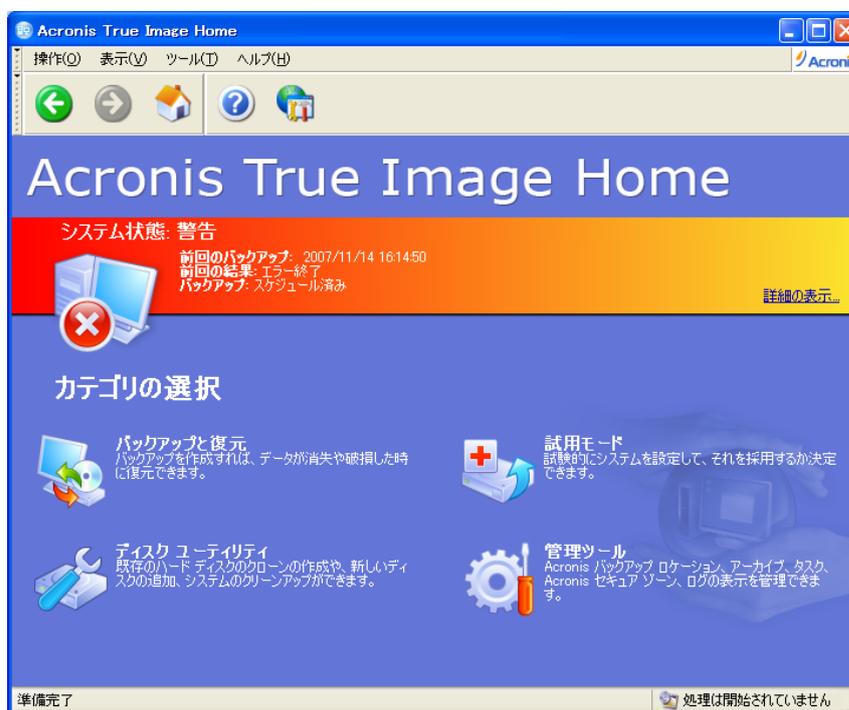
- まだスケジュールされたバックアップを実行していないか、前回のスケジュールされたバックアップが一週間以上前である場合、バーは黄色で表示され、システムが「注意」状態であることを示します。この場合、バーには[スケジュールの作成...]リンクが表示され、すぐに[タスクのスケジュールウィザード]を呼び出してバックアップ タスクをスケジュールすることができます。



- バックアップをスケジュールし、そのバックアップが正常に終了した場合、システムの状態は「正常」に変わります。シグナル バーは緑色で表示され、一週間は緑色が維持されます。その一週間の間にスケジュールされたバックアップが実行されない場合、再度黄色になります。



- スケジュールされたバックアップが何らかの理由で失敗した場合、システムの状態は「警告」に変わり、シグナル バーは赤色になります。



スケジュールされたバックアップのみによって、シグナル バーの色とシステムの状態が変わります。**[バックアップ作成ウィザード]**を手動で起動して、スケジュールされていないバックアップを行った場合、シグナル バーの色とシステム状態は変更されません。また**[一回だけ]**のバックアップ タスクがスケジュールされた場合にも、色は変更されません。

メイン プログラム ウィンドウには、メニュー、ツール バー、メイン領域、およびステータス バーがあります。メイン領域には、カテゴリのアイコンと上で説明したシグナル バーがあります。

カテゴリのアイコンには次のものがあります。

- **【バックアップと復元】** — バックアップ アーカイブを作成したり、以前に作成したアーカイブからデータを復元します。
- **【試用モード】** — システムの一時的複製で変更を行い、後で実機に対して変更内容を適用するかどうかを決定します。
- **【ディスク ユーティリティ】** — ハード ディスクのクローンの作成と追加、パーティションやハード ディスクの抹消、ファイルの完全な抹消、およびシステム クリーンアップを行います。
- **【管理ツール】** — バックアップ ロケーション、アーカイブ、スケジュール タスクの管理、およびログの表示を行います。

## プログラム メニュー

プログラム メニューには**【操作】**、**【表示】**、**【ツール】**および**【ヘルプ】**があります。

**【操作】**メニューには選択できる処理の一覧が表示されます。

- **【バックアップ】** — 指定されたデータをバックアップします。
- **【復元】** — 指定されたデータを復元します。
- **【試用モード】** — 試用モードを実行し、変更内容を保存するか破棄するかを決めます。
- **【新しいタスクの作成】** — 新しいタスクをスケジュールします。
- **【バックアップアーカイブのベリファイ】** — 選択したバックアップ アーカイブをベリファイします。
- **【バックアップアーカイブの参照】** — 選択したバックアップ アーカイブを参照します。
- **【イメージのマウント】** — イメージ アーカイブを仮想ディスクとしてマウントします。
- **【イメージのマウント解除】** — マウントしているイメージをマウント解除します。
- **【終了】** — Acronis True Image Home を終了します。

**【表示】**メニューには、プログラム ウィンドウの外観を管理するための項目が表示されます。

- **【ツール バー】** — ツール バー アイコンのサイズ、**【ナビゲーション】**と**【ヘルプ】**ツール バーの表示/非表示、ツール バー アイコンのテキスト ラベルの表示/非表示を管理するコマンドが含まれます。
- **【ステータス バー】** — ステータス バーの表示/非表示を切り替えます。

**【ツール】**メニューには次の項目が表示されます。

- **【Acronis リカバリ マネージャの有効化】** — リカバリ マネージャ(**F11** キー)を有効化します。
- **【ブータブル メディアの作成】** — ブータブル メディアの作成を実行します。
- **【管理】→【Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理】** — バックアップ ロケーションを作成、編集、削除、および参照します。復元するファイルをバックアップ ロケーション内で検索します。
- **【管理】→【Acronis セキュア ゾーンの管理】** — アーカイブ保存用の特別な非表示パーティション(Acronis セキュアゾーン)を作成、削除、およびサイズ変更します。
- **【管理】→【タスクの管理】** — スケジュールされたタスクの作成、編集、削除、タスクのスケジュールの変更、および手動によるタスクの開始を行います。
- **【ディスクのクローン作成】** — 新しいハード ディスクにシステムを転送します。
- **【新しいディスクの追加】** — コンピュータに設置された追加のハード ディスク上にパーティションを作成します。
- **【Acronis Drive Cleanser】** — ハード ディスクドライブから個人データを完全に抹消します。
- **【ファイル シュレッダー】** — 必要ない機密ファイルを完全に抹消します。
- **【システム クリーンアップ】** — Windows の操作履歴をクリーンアップします。
- **【ログの表示】** — ログ ビューア画面を開きます。
- **【オプション】** — デフォルトのバックアップ/復元オプションの編集、テキストの外観(フォント)の設定、電子メール/WinPopup 通知の設定などの画面を開きます。

**【ヘルプ】**メニューは、ヘルプの表示または、Acronis True Image Home に関する情報を取得するのに使用されます。

---

## ステータス バー

メイン プログラム ウィンドウ 下部に、2 つのペインに分割されたステータス バーがあります。左側は選択された処理の簡単な説明、右側は実行中の処理と結果を表示します。処理の結果をダブルクリックすると、ログ画面が表示されます。

## タスクトレイのアイコン

ほとんどの処理では、特別なインジケータ アイコンが Windows のタスクトレイ(ステータス バーの右部分で、時計の表示されているところ)に現れます。このアイコンにマウス ポインタを重ねると、処理の進行状況を示すツール ヒントが表示されます。このアイコンを右クリックするとコンテキスト メニューが表示され、必要に応じてプロセスの優先度の変更や処理のキャンセルを行うことができます。試用モードに入っている場合、このアイコンを右クリックすると、試用モード機能のコンテキスト メニューが表示されます。このアイコンは、メイン プログラム ウィンドウを開いていなくても表示されます。また、スケジュール設定されたタスクがバックグラウンドで実行されているときにも表示されます。



プログラムのユーザー インターフェイスとメニュー項目に表示されるテキストの外観(フォントとフォント サイズ)を変更できます。変更するには、**[ツール]**メニューから**[オプション]**を選択し、表示される**[オプション]**画面から**[外観]**→**[フォント]**を選択します。



ボタンをクリックすると、テキストの外観の変更結果をプレビューできます。

## 4.2 機能

コンピュータ上で次の処理を行うことができます。

- **システム ディスク/パーティションを含むデータのバックアップ**

**[操作]**メニューから**[バックアップ]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウで**[バックアップと復元]**カテゴリをクリックし、**[バックアップと復元]**画面の**[バックアップ]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、第 5 章「バックアップ アーカイブの作成」をご参照ください。

- **システム ディスク/パーティションを含むデータの復元**

**[操作]**メニューから**[復元]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウで**[バックアップと復元]**カテゴリをクリックし、**[バックアップと復元]**画面の**[復元]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、第 6 章「バックアップしたデータの復元」をご参照ください。

- **バックアップまたはペリファイのスケジュール設定**

**[操作]**メニューから**[新しいタスクの作成]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウで**[管理ツール]**カテゴリをクリックします。次に、**[メイン]**グループの**[タスクの管理]**を選択し、サイドバーの**[新しいタスクの作成]**をクリックしてウィザードの指示に従います。詳細については、第 9 章「タスクのスケジュール」をご参照ください。

- **Acronis True Image Home 処理のログの表示**

**[ツール]**メニューから**[ログの表示]**を選択するか、サイドバーの**[ログの表示]**を選択して、**[Acronis イベント ログ]**画面を表示します。詳細については、「12.3 ログの表示」をご参照ください。

- **バックアップ処理優先度またはファイル上書きモードなどのバックアップ/復元オプション**

**[ツール]**メニューから**[オプション]**をクリックして、表示される**[オプション]**画面から**[バックアップ オプション]**または**[復元 オプション]**を選択して設定します。詳細については、「5.3 バックアップ オプションの設定」および「6.4 復元オプションの設定」をご参照ください。

- **Acronis True Image Home 処理についての通知の設定**

**[ツール]**メニューから**[オプション]**をクリックして、表示される**[オプション]**画面から**[通知]**を選択して、設定を行います。詳細については、「12.2 処理結果の通知」をご参照ください。

- **Acronis バックアップ ロケーションの作成**

Acronis バックアップ ロケーションを管理するルールを作成することができます。メイン プログラム ウィンドウの**[管理ツール]**カテゴリをクリックし、**[メイン]**グループの**[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]**を選択して、サイドバーの**[バックアップ ロケーション]**カテゴリにある**[Acronis バックアップ ロケーションの作成]**をクリックし、ウィザードの指示に従います。詳細については、第 8 章「Acronis バックアップ ロケーションの管理」、および「3.5 Acronis バックアップ ロケーション」をご参照ください。

- **Acronis バックアップ ロケーションの編集**

作成したバックアップ ロケーションのプロパティを編集します。メイン プログラム ウィンドウの**[管理ツール]**カテゴリをクリックし、**[メイン]**グループの**[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]**を選択します。次に、サイドバーの**[バックアップ ロケーション]**カテゴリにある**[Acronis バックアップ ロケーションの編集]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。詳細については、第 8 章「Acronis バックアップ ロケーションの管理」、および「3.5 Acronis バックアップ ロケーション」をご参照ください。

- **Acronis バックアップ ロケーションの削除**

作成したバックアップ ロケーションを削除します。  
メイン プログラム ウィンドウの**[管理ツール]**カテゴリをクリックし、**[メイン]**グループの**[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]**を選択します。次に、サイドバーの**[バックアップ ロケーション]**カテゴリにある**[Acronis バックアップ ロケーションの削除]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。詳細については、第 8 章「Acronis バックアップ ロケーションの管理」、および「3.5 Acronis バックアップ ロケーション」をご参照ください。

- **Acronis セキュア ゾーンの管理(作成、削除、サイズ変更、またはパスワード変更)**

**[ツール]**メニューから**[管理]**を選択し、表示される画面から**[Acronis セキュア ゾーンの管理]**を選択して、ウィザードの指示に従います。サイドバーが表示されている場合には、サイドバーの**[参照]**グループにある**[Acronis セキュア ゾーンの管理]**をクリックして、このウィザードを呼び出すこともできます。詳細については、第 10 章「Acronis セキュア ゾーンの管理」をご参照ください。

- **バックアップ アーカイブのペリファイ(ローカル/ネットワーク上の共有フォルダまたはリムーバブル メディア)**

**[操作]**メニューから**[バックアップ アーカイブのペリファイ]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、「12.1 バックアップ アーカイブのペリファイ」をご参照ください。Windows エクスプローラでアーカイブを右クリックし、表示されるコンテキスト メニューから**[ペリファイ]**を選択してウィザードを起動することもできます。

- 
- **Acronis リカバリ マネージャの有効化**

[ツール]メニューから**[Acronis リカバリ マネージャの有効化]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、「3.4 Acronis リカバリ マネージャ」をご参照ください。
  - **アーカイブの内容の参照と個別のファイルの復元**

[操作]メニューから**[バックアップ アーカイブの参照]**を選択して、左ペインのディレクトリ ツリーで参照するアーカイブを選択します。詳細については、「13.1 アーカイブ内のファイルの検索」をご参照ください。Windows エクスプローラでアーカイブを右クリックし、表示されたコンテキスト メニューから**[参照]**を選択して、アーカイブを参照することもできます。
  - **内容の参照および修正と個別のファイルの復元のための、パーティション イメージのマウント**

[操作]メニューから**[イメージのマウント]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、「13.2 イメージのマウント」をご参照ください。Windows エクスプローラでイメージ アーカイブを右クリックし、表示されたコンテキスト メニューから**[マウント]**を選択して、イメージをマウントすることもできます。
  - **マウントしたパーティション イメージのマウント解除**

[操作]メニューから**[イメージのマウント解除]**を選択して、ウィザードの指示に従います。詳細については、「13.3 イメージのマウント解除」をご参照ください。Windows エクスプローラで仮想ディスク アイコンを右クリックし、**[マウント解除]**を選択しても、仮想ディスクのマウントを解除することができます。
  - **新しいディスクへのシステムの転送**

[ツール]メニューから**[ディスクのクローン作成]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択し、**[ハード ディスク ユーティリティ]**グループから**[ディスクのクローン作成]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。第 14 章「新しいディスクへのシステムの転送(ディスクのクローン作成)」をご参照ください。
  - **新しいハード ディスクのパーティションのフォーマット**

[ツール]メニューから**[新しいディスクの追加]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択し、**[ハード ディスク ユーティリティ]**グループから**[新しいディスクの追加]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。第 15 章「新しいハード ディスクの追加」をご参照ください。
  - **パーティションまたはハード ディスク上の個人情報の完全な抹消**

[ツール]メニューから**[Acronis Drive Cleanser]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択し、**[システム クリーンアップ]**グループから**[Acronis Drive Cleanser]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。第 16 章「セキュリティおよびプライバシー ツール」をご参照ください。
  - **機密ファイルの完全な抹消**

[ツール]メニューから**[ファイル シュレッダー]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択し、**[システム クリーンアップ]**グループから**[ファイル シュレッダー]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。第 16 章「セキュリティおよびプライバシー ツール」をご参照ください。
  - **Windows の操作履歴をすべてクリーンアップ**

[ツール]メニューから**[システム クリーンアップ]**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択し、**[システム クリーンアップ]**グループから**[システム クリーンアップ]**をクリックして、ウィザードの指示に従います。第 16 章「セキュリティおよびプライバシー ツール」をご参照ください。
  - **仮想モードでシステムに変更を行い、その変更を保持するかどうか決める**

メイン プログラム ウィンドウの**[試用モード]**カテゴリをクリックするか、**[操作]**メニューから**[試用モード]**を選択し、表示される**[試用モード]**画面の**[試用モードの開始]**ボタンをクリックします。詳細については、第 7 章「試用モード」をご参照ください。
  - **ブータブル メディアまたは ISO イメージの作成**

[ツール]メニューから**[ブータブル メディアの作成]**を選択して、ウィザードの指示に従います。第 11 章「ブータブル メディアの作成」をご参照ください。
-

---

## 第 5 章 バックアップ アーカイブの作成

失ったデータを復元、または特定の健全な状態にシステムを戻すことができるようにするためには、データまたはシステム全体のバックアップ ファイルを最初に作成する必要があります。

### 5.1 バックアップの対象

現在ユーザー作業中のプロジェクト データなど、特定のデータのみのバックアップを作成する場合や、オペレーティング システムやアプリケーションの設定などの復元を行わないときは、ファイル/フォルダのバックアップを選択します。これによりアーカイブのサイズが削減され、ハード ディスク領域の節約、およびリムーバブル メディアのコストの削減につながります。

システム ディスク全体のバックアップ(ディスク イメージの作成)には、ファイル/フォルダのバックアップに比べてより多くのハード ディスク領域が必要ですが、システムのクラッシュまたはハードウェア障害などが発生した場合にシステムを短時間に復元することができます。さらに、イメージの作成処理はファイル コピーに比べて非常に高速であるため、大きな容量のデータをバックアップする場合には、バックアップ速度が非常に速くなる可能性があります(詳細については、「3.1 ファイル アーカイブとディスクパーティション イメージの違い」をご参照ください)。

ここでは、バックアップの計画に関する推奨事項を示します。システム ドライブのイメージは Acronis セキュア ゾーン、またはプライマリ ハード ディスク(C ドライブ)以外のハード ディスクに保存しておくことをお勧めします。これにより、プライマリ ハード ディスクに障害が発生した場合にシステムを復元できる可能性がさらに高くなります。個人データは、オペレーティング システムおよびアプリケーションとは別の場所(D ドライブなど)に保持することをお勧めします。これにより、復元する必要がある情報の量が少なくなり、データ ドライブ(またはパーティション)のイメージの作成時間を短縮することができます。



ネットワーク上の共有フォルダは、バックアップ作成対象外となります。

Acronis True Image Home では次のカテゴリからバックアップを選択できます。

**[コンピュータのバックアップ]** – ハード ディスクとパーティションの任意の組み合わせをイメージ バックアップ

**[ファイルのバックアップ]** – ファイルやフォルダの任意の組み合わせ、またはカテゴリのファイル レベルでのバックアップ

**[アプリケーションの設定]** – Windows アプリケーションの設定のファイル レベルのバックアップ

**[電子メール]** – Microsoft Outlook、Microsoft Outlook Express および Windows メールメッセージとアドレス帳のファイル レベルでのバックアップ

## 5.2 バックアップの手順

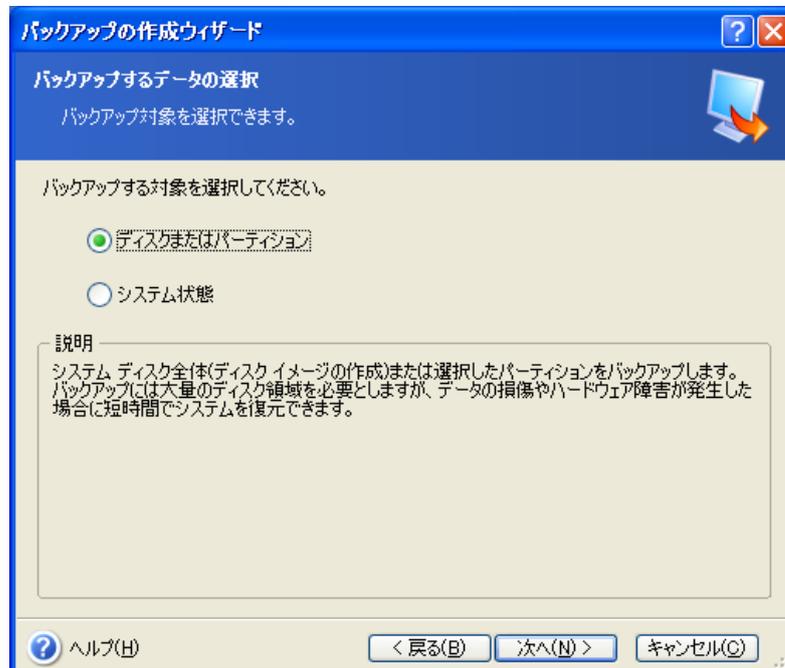
### 5.2.1 コンピュータのバックアップ

コンピュータのバックアップは、ハード ディスクやパーティションを任意で組み合わせることで、コンピュータのバックアップイメージを作成したり、システム状態のバックアップを作成します。

1. **[操作]**メニューから**[バックアップ]**を選択し、**[バックアップの作成ウィザード]**を起動して、**[コンピュータのバックアップ]**を選択します。

また、Windows エクスプローラのウィンドウから直接、**[バックアップの作成ウィザード]**を起動することもできます。これを行うには、ハード ディスクのアイコンを右クリックして、コンテキスト メニューの**[バックアップ]**を選択します。この場合、プログラムは自動的に**コンピュータのバックアップ**に設定されます。

2. バックアップするデータを次の画面で選択します。バックアップ対象は、**[ディスクまたはパーティション]**または**[システム状態]**から選択できます。**[システム状態]**を選択すると、ブート ファイル、レジストリ、保護された Windows ファイルおよび COM+ CLASS レジストリ データベースがバックアップされます。システム状態をバックアップすると、システム ファイル、ドライバなどを復元することはできませんが、自分の作業で使用するデータ ファイルやフォルダは復元できません。データ ファイルやフォルダを復元できるようにするには、**[ディスクまたはパーティション]**を選択し、バックアップするハード ディスクまたはパーティションを指定します。ハード ディスクやパーティションの任意の組み合わせを指定することができます。ハード ディスクまたはパーティションを任意に選択することができます。



システム状態のバックアップは、オペレーティングシステムのシステムファイルをバックアップしますが、システムの動作状態をバックアップするものではありません。したがって、システム状態を復元しても、オペレーティングシステムが正常に動作することを保証するものではありません。

デフォルトでは、データを含むハード ディスクのセクタのみがコピーされます。ただし、全セクタのバックアップを行うほうが便利な場合もあります。たとえば、誤って削除したファイルを復旧するために、前もってディスク イメージを作成して、復旧処理によるファイル システムの破損に備える場合があります。全セクタのバックアップを行うには、**[全セクタのイメージを作成する]**チェックボックスをオンにします。このモードでは、ハード ディスクの使用されているセクタも使用されていないセクタもコピーするため、処理時間が増加し、より大きなイメージ ファイルが作成されることとなります。



ハード ディスクにエラーがある場合は、全セクタのイメージを作成しても、すべてのデータを保障するものではありません。



全セクタのイメージを作成していても、復元時にディスク署名等が記録されている一部のセクタは変更されます。

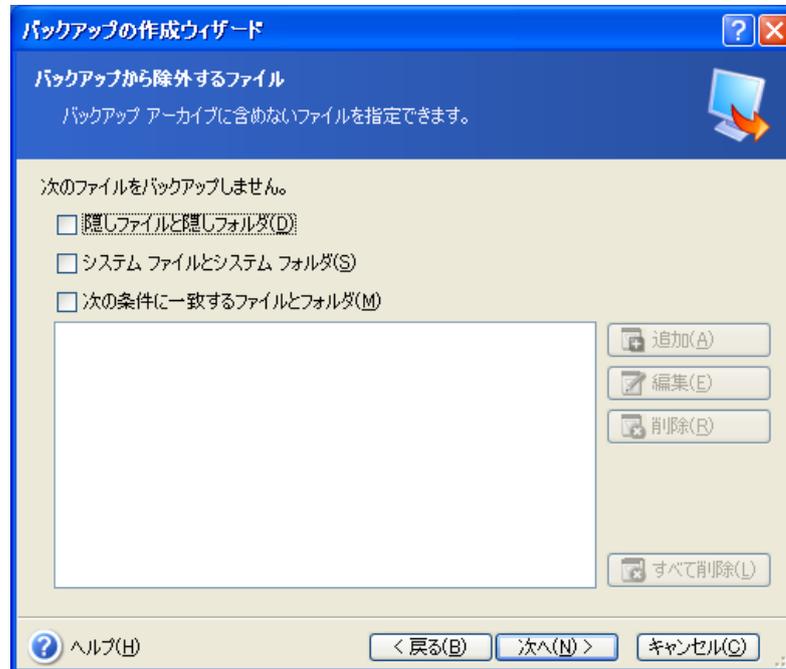


Windows Vista 上から、システムディスクのバックアップを作成して、そのイメージを復元した場合、初回起動時に**[Windows エラー回復処理]**が表示されます。この問題を回避するには、ブータブル メディアでコンピュータを起動し、バックアップを作成してください。**[Windows エラー回復処理]**で、Windows Vista のインストール ディスクを要求されることがあります。

- ハード ディスクまたはパーティションをバックアップする場合、次の画面でバックアップから除外するファイルがあれば選択します。隠しファイル/フォルダ、システム ファイル/フォルダ、または指定する条件に一致するファイルを除外できます。条件を指定する際には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、「.tmp」拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、「\*.tmp」を追加します。



コンピュータのバックアップを作成する場合、隠しファイル/フォルダ、システム ファイル/フォルダを除外すると、イメージ復元後、システムの実行に支障が出ます。



- 「5.2.5 バックアップアーカイブの保存先の選択」の手順に進んでください。

## 5.2.2 ファイルのバックアップ

ドキュメント、イメージ(画像)、ミュージック(音楽)、ビデオなどのカテゴリごとに、ファイルをバックアップします。デフォルトの各カテゴリは、コンピュータのハード ディスク上に存在する関連付けされたファイルのすべてを表します。

ファイルおよびフォルダを含むカスタムのカテゴリを任意に追加することができます。追加された新しいカテゴリは保存され、デフォルトのカテゴリとともに表示されます。

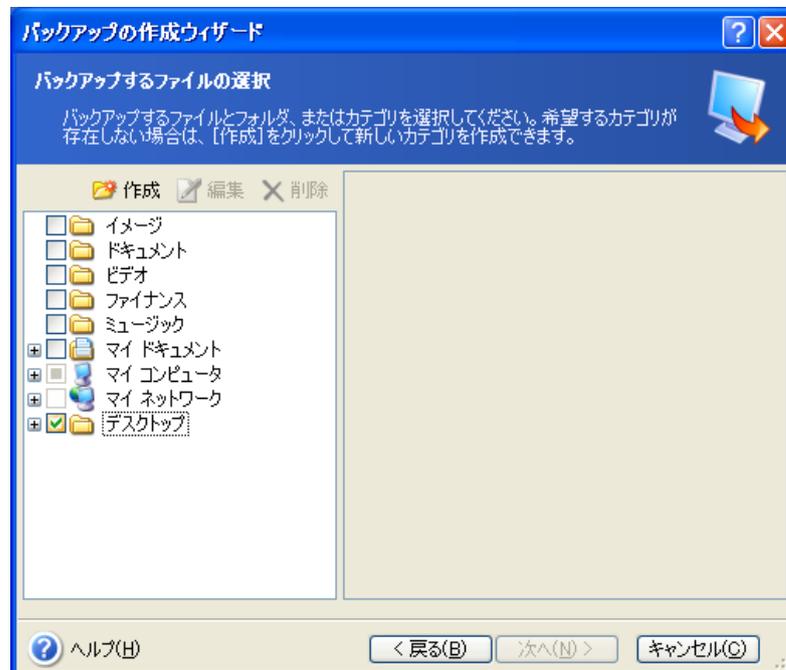
カスタムまたはデフォルトの任意のカテゴリに対する内容の変更(カテゴリの編集)、または削除を行うことができます。デフォルトのカテゴリは削除できません。

現在のバックアップのカスタム内容を保存しない場合は、カテゴリを作成せずにファイルおよびフォルダを選択します。

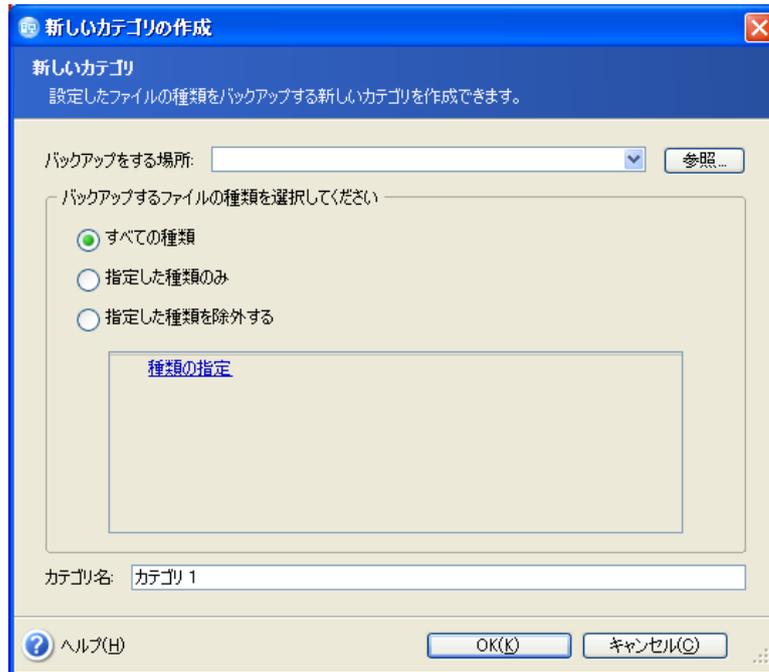
1. **[操作]**メニューから**[バックアップ]**を選択し、**[バックアップの作成ウィザード]**を起動して、**[ファイルのバックアップ]**を選択します。

また、Windows エクスプローラのウィンドウから直接、**[バックアップの作成ウィザード]**を起動することもできます。これを行うには、ファイルまたはフォルダのアイコンを右クリックして、コンテキスト メニューの**[バックアップ]**を選択します。この場合、プログラムは自動的に**ファイルのバックアップ**に設定され、選択したファイルまたはフォルダをバックアップ対象としてマークします。

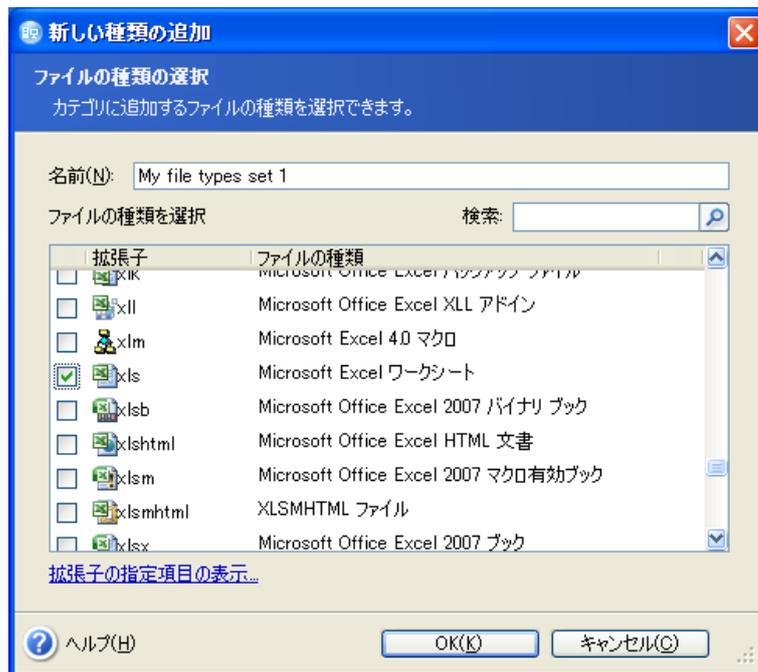
2. **[イメージ]**、**[ドキュメント]**、**[ビデオ]**、**[ファイナンス]**、**[ミュージック]**からバックアップするデータ カテゴリを選択します。各カテゴリは、コンピュータのハード ディスク上に存在する関連付けされたファイルのすべてを表します。



カスタムのデータ カテゴリを追加するには、**[作成]**をクリックし、フォルダ(データ ソース)を選択して、カテゴリ名を指定します。選択したフォルダのすべてのファイルをカテゴリに含めることも、フィルタを適用し、特定のファイルの種類をバックアップする、またはバックアップしないように選択することもできます。



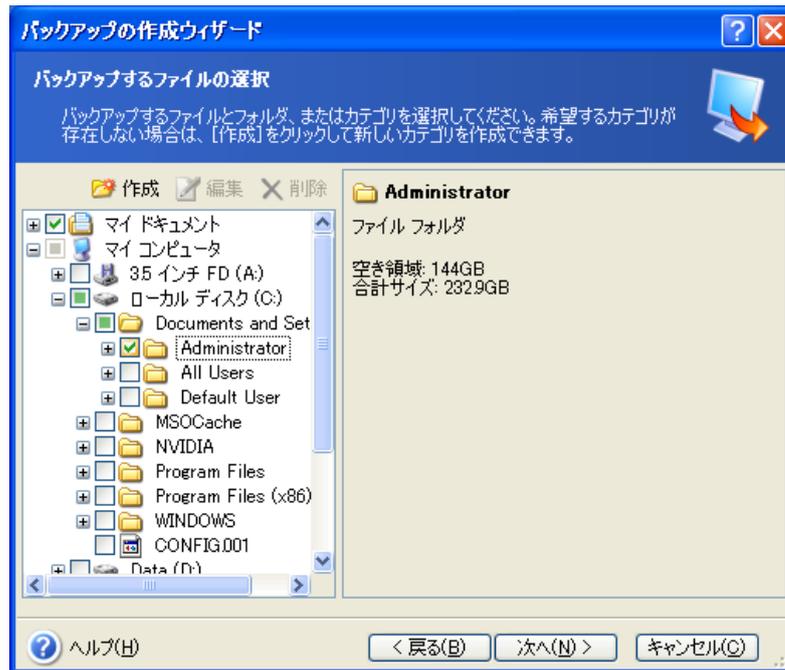
フィルタを設定するには、**[指定した種類のみ]**または**[指定した種類を除外する]**から 1 つを選択し、下に表示される**[種類の指定]**をクリックして、表示された画面でファイルの種類を選択します。



ファイルの種類を選択するには、次の方法があります。

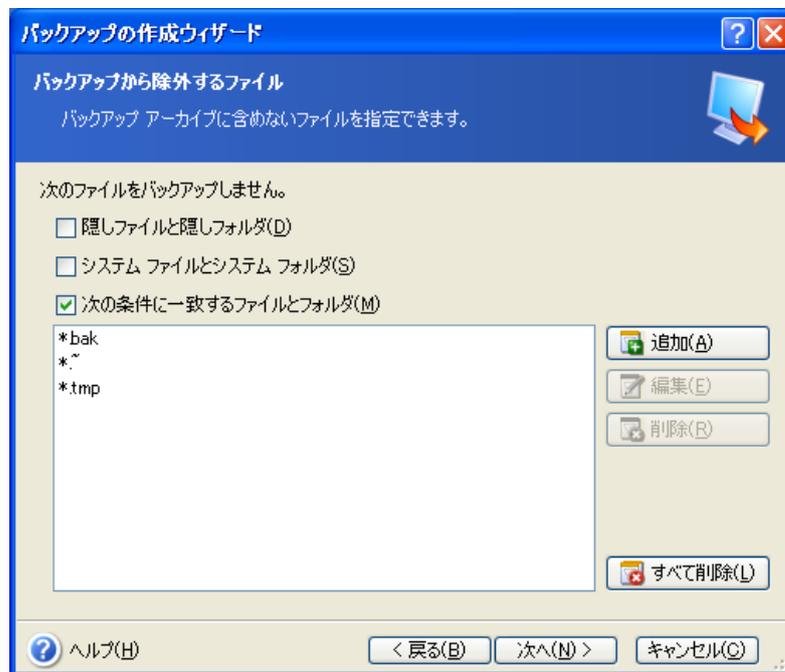
- **種類による方法** — 一覧のファイルの種類でチェックボックスをオンにします。ファイルの拡張子またはワイルドカードを検索フィールドに入力して、登録されているファイルの種類を検索することもできます。
- **拡張子による方法** — **[拡張子の指定項目の表示...]**をクリックし、**[拡張子を手動で指定する]**チェックボックスをオンにして、**[拡張子]**フィールドに拡張子をセミコロンで区切って入力します。

現在のバックアップのカスタム内容を保存しない場合、**[参照]**をクリックし、表示されるツリーからファイル/フォルダを選択します。このセットは現在のバックアップ タスクに対してのみ有効です。



手動で追加したフォルダにもファイル フィルタリングは適用できます。たとえば、システム ファイルやシステム フォルダ、および隠しファイルや隠しフォルダと同様に、「.~」、「.tmp」、および「.bak」などの拡張子のついたファイルをアーカイブに保存しないようにする必要があります。

Windows で一般的なワイルド カード文字を使用してユーザー定義フィルタを適用することができます。たとえば、「.bmp」拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、「\*.bmp」を追加します。



3. これらのフィルタの設定は、現在のタスクに対してのみ有効になります。ファイルのバックアップ タスクを作成する場合に毎回呼び出されるデフォルトのフィルタの設定方法については、「5.3.2 バックアップから除外するファイル」をご参照ください。

カスタムのカテゴリを作成しないでバックアップからいくつかの種類 of ファイルを除外する場合、次の画面でそれらを指定できます。隠しファイル/フォルダ、システム ファイル/フォルダ、または指定する条件に一致するファイルを除外できます。条件を指定する際には、一般的な Windows のワイルド カード文字を使用できます。たとえば、「.tmp」拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、「\*.tmp」を追加します。

4. 「5.2.5 バックアップアーカイブの保存先の選択」の手順に進んでください。

### 5.2.3 アプリケーションの設定のバックアップ

Windows アプリケーションのカスタム設定をバックアップします。これはファイル レベル バックアップのサブセットです。これは事前に定義されたフォルダをバックアップし、ユーザーが選択する必要がある項目の数は最小限になっています。コンピュータ上で検出されたサポート対象のアプリケーションの一覧がソートされて表示されます。その中からカテゴリとアプリケーションの任意の組み合わせを選択することができます。



バックアップされるのは、アプリケーションの実行ファイルではなく、アプリケーションの設定になります。アプリケーションが正しく動作していないように見える場合、アプリケーションの最新のアップデートを使用して再インストールしてから、保存してある設定をバックアップから復元してください。



アプリケーションの設定のバックアップは、Acronis 社独自の解析により実現しています。そのため、アプリケーションのバージョン(リビジョン)により、設定情報の保存方法が変更されていることがあり、機能が正しく動作しないことがあります。

コンピュータ上で検出されたサポート対象のアプリケーションのすべてをバックアップ対象として選択するには、**[インストールされているアプリケーション]** チェックボックスをオンにします。

インスタント メッセージャ アプリケーションについては、設定と履歴の両方がバックアップされます。

1. **[操作]**メニューから**[バックアップ]**を選択し、**[バックアップの作成ウィザード]**を起動して、**[アプリケーションの設定]**を選択します。

また、デスクトップから直接ウィザードを起動することもできます。これを行うには、アプリケーションのショートカットを右クリックして、コンテキスト メニューの**[バックアップ]**を選択します。この場合、プログラムは自動的にファイルのバックアップに設定され、選択したアプリケーションの実行ファイルをバックアップ対象としてマークします。アプリケーションの設定をバックアップするには、**[アプリケーションの設定]**を選択します。

2. バックアップするアプリケーションを選択します。カテゴリとアプリケーションの任意の組み合わせを選択することができます。



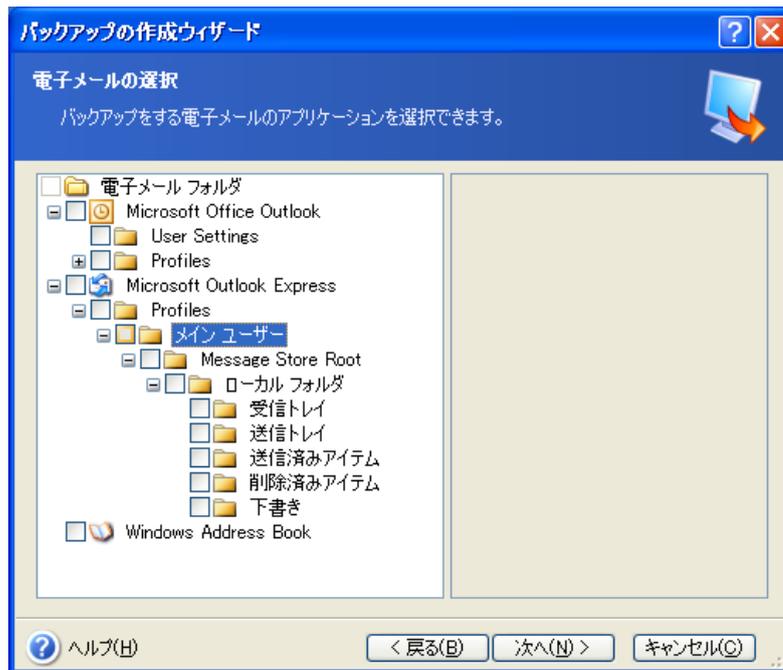
3. 「5.2.5 バックアップアーカイブの保存先の選択」の手順に進んでください。

## 5.2.4 電子メールのバックアップ

Acronis True Image Home では、Microsoft Outlook 2000、2002、2003、2007、Microsoft Outlook Express および Windows メール のメッセージやアドレス帳をバックアップする簡単な方法を提供します。

電子メール バックアップはファイル レベル バックアップのサブセットです。これは事前に定義されたフォルダをバックアップし、ユーザーが選択する必要がある項目の数は最小限になっています。ただし、必要であれば、Microsoft Outlook のコンポーネントとフォルダは個別に選択できます。

1. **[操作]**メニューから**[バックアップ]**を選択します。
2. **[電子メール]**を選択します。
3. バックアップするメール クライアントのコンポーネントとフォルダを選択します。



Microsoft Office Outlook 2000、2002、2003、2007 に対して、次の項目を選択できます。

- メール フォルダ
- 予定表
- 連絡先
- 仕事
- 履歴
- 署名
- ユーザー設定
- 電子メール アカウント

Microsoft Outlook Express に対して、次の項目を選択できます。

- メール フォルダ
- アドレス帳(Windows のアドレス帳を選択します)。

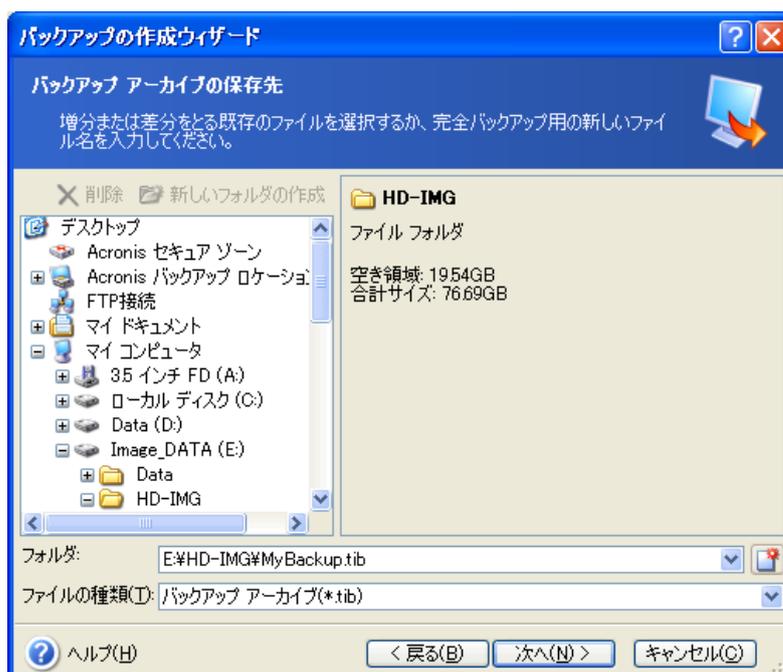
Acronis True Image Home では、Microsoft Outlook の IMAP(Internet Messages Access Protocol)メール フォルダをバックアップすることもできるため、メール サーバー上に保存されているフォルダのキャッシュのバックアップも可能です。Microsoft Outlook Express や Windows メール の場合は、ローカルの電子メール フォルダのバックアップのみが可能です。

## 5.2.5 バックアップアーカイブの保存先の選択

バックアップを保存する場所を選択します。Acronis セキュア ゾーン、またはバックアップ ロケーション以外の場所を選択する場合は、アーカイブ名を指定します。

新しいアーカイブ(完全バックアップの実行など)を作成する場合は、**[フォルダ]**行に新しいファイル名を入力するか、またはファイル名ジェネレータ(行の右にあるボタン)を使用します。既存の完全バックアップ ファイルを選択した場合は、確認を求めてからそのアーカイブに上書きされます。完全バックアップを上書きすることは、古いアーカイブ全体を破棄して新しいアーカイブを作成することを意味します。この場合、その古い完全バックアップに追加されたすべての増分ファイルおよび差分ファイルは使用不能になります。これらのファイルも削除しておくことをお勧めします。

既存のアーカイブに増分ファイルまたは差分ファイルを追加する場合、対象となるアーカイブ ファイルのいずれかを選択します。ファイルが同じフォルダに保存されている場合、単一のアーカイブとして認識されるため、どのファイルを選択しても問題ありません。複数のリムーバブル メディアに分けてファイルを保存している場合は、最後に作成したアーカイブ ファイルを選択しないと、復元する際に問題が発生する場合があります。



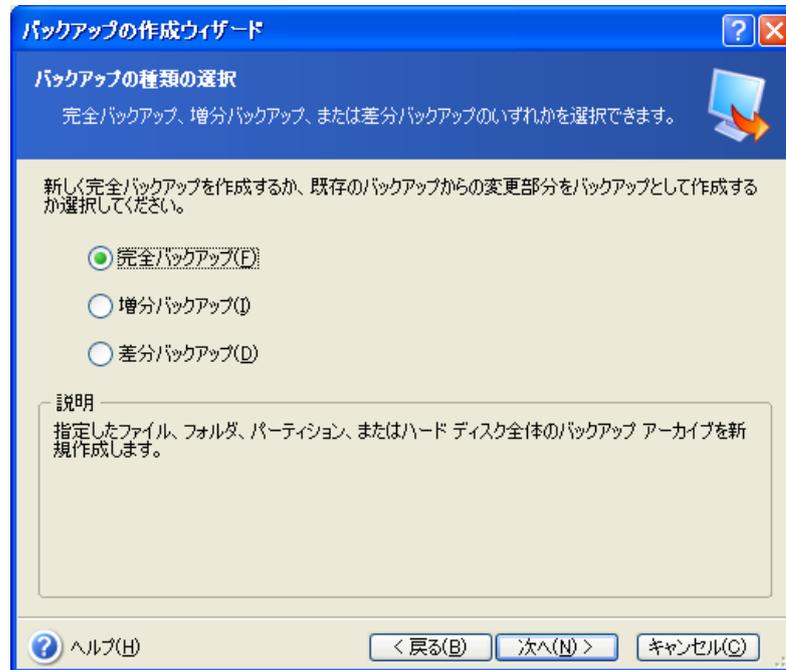
バックアップ アーカイブの保存先が元のフォルダから離れれば離れるほど、障害が発生した場合のバックアップ アーカイブの安全性はより高まります。たとえば、バックアップ アーカイブを物理的に別のハード ディスクに保存してあれば、バックアップ アーカイブの作成元のハード ディスクが損傷した場合にもデータは保護されます。ネットワーク上の共有フォルダ、FTP サーバー、またはリムーバブル メディアに保存されているデータは、ローカルのすべてのハード ディスクが損傷した場合でも、残存します。また、バックアップ アーカイブの保存先には、Acronis セキュア ゾーン(詳細については「3.3 Acronis セキュア ゾーン」をご参照ください)または Acronis バックアップ ロケーション(詳細については「3.5 Acronis バックアップ ロケーション」をご参照ください)も使用できます。その場合は、バックアップ ファイル名を指定する必要はありません。



「1.3.4 保存先としてサポートされるストレージ メディア」にある FTP サーバーのサポートについての注意および推奨事項をご参照ください。

## 5.2.6 バックアップの種類を選択

作成するバックアップを完全、増分または差分バックアップから選択します。選択したデータをまだバックアップしたことがないか、または完全アーカイブが非常に古い場合、新しく完全バックアップを作成する場合は、完全バックアップを選択します。それ以外の場合は、増分バックアップまたは差分バックアップ(「3.2 完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップ」をご参照ください)を作成することをお勧めします。



## 5.2.7 バックアップ オプションの選択

バックアップ オプション(パスワード保護、圧縮レベル、アーカイブの分割など)を選択します。デフォルトのオプションを使用するかまたはオプションを手動で設定することができます。オプションを手動で設定する場合は、これらの設定は現在のバックアップ タスクに対してのみ適用されます。また、デフォルトのオプションについても、現在の画面からデフォルトのオプションを編集することができます。編集した設定は、デフォルトとして保存されます。詳細については、「5.3 バックアップ オプションの設定」をご参照ください。

## 5.2.8 アーカイブのコメントの入力

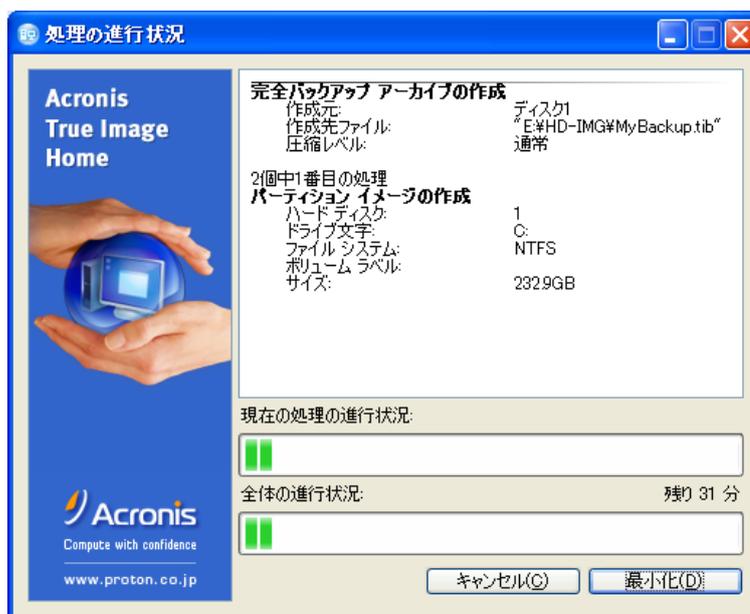
バックアップ アーカイブにコメントを追加できます。コメントがあると、バックアップを見つけるのが簡単となり、間違ったデータを復元するというような事態を避けることができます。もちろん何のコメントも記述しないという選択もできます。バックアップ ファイルの作成日およびサイズが自動的にコメント記述に追加されるので、これらの情報は入力する必要はありません。

## 5.2.9 処理の概要とバックアップの進行状況

ウィザードの最後に、バックアップ タスクのスクリーンが表示されます。この画面からユーザーは**[戻る]**をクリックして前の画面に戻り、作成したタスクに変更を加えることができます。**[実行]**をクリックすると、タスクの実行が開始されます。

タスクの実行が開始されると、別画面にタスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]**をクリックすると、処理は中断されます。

**[最小化]**をクリックして進行状況の画面を閉じることもできます。別の操作を開始したり、メイン プログラム ウィンドウを閉じていても、バックアップの作成は続行されます。メイン プログラム ウィンドウを閉じた場合、プログラムは引き続きバックグラウンドで実行されますが、バックアップ アーカイブが作成されると自動的に終了します。さらにいくつかのバックアップ操作を指示すると、これらの指示は待ち行列に入れられ、現在実行中のバックアップ操作が終わると実行されます。



バックアップ処理の優先度を変更するには、タスクトレイの処理アイコンを右クリックし、表示されるメニューの**[優先順位]**-**[低]**、**[通常]**、**[高]**から優先度を選択します。デフォルトの優先度を設定する方法については、「5.3.5 バックアップ」をご参照ください。



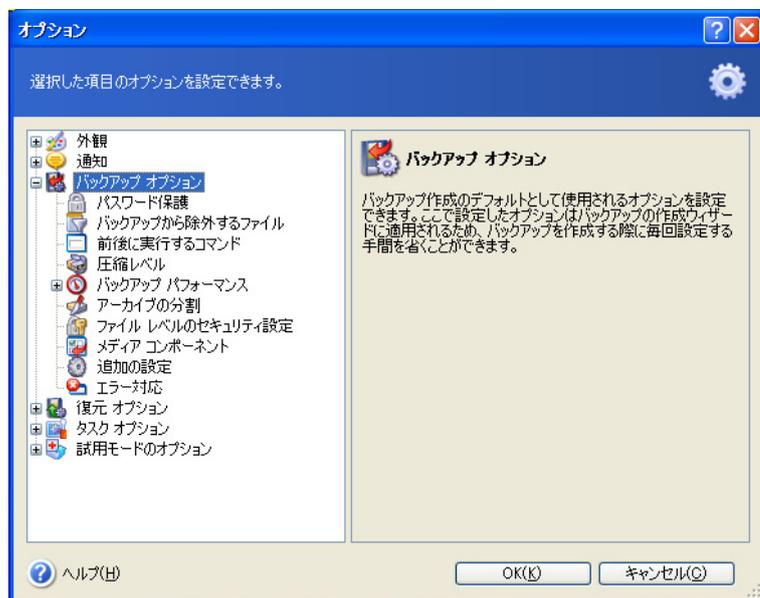
1つのアーカイブを複数のリムーバブルメディアに分割して書き込む場合は、復元の際にイメージを順番通りに挿入できるように、メディアに番号を記入しておいてください。

タスクの完了後に、ログの表示が必要になる場合があります。ログを表示するには、**[ツール]**メニューから**[ログの表示]**を選択します。

## 5.3 バックアップ オプションの設定

デフォルトのバックアップ オプションを表示または編集するには、**[ツール]**メニューから**[オプション]**を選択し、表示される**[オプション]**画面から**[バックアップ オプション]**を選択します。

バックアップ タスクの作成中に、デフォルト(または、一時的に設定された)オプションを編集することができます。



### 5.3.1 パスワード保護

デフォルトの設定 – **[パスワードなし]**

アーカイブはパスワードを使用して保護されます。不特定のユーザーによって復元されないようにアーカイブを保護するには、パスワードおよびパスワードの確認をテキスト フィールドに入力します。パスワードは、簡単に推測されないようにするために、8 文字以上の記号、文字(大文字と小文字を組み合わせることをお勧めします)、および数字で構成してください。

パスワードで保護されたアーカイブからデータを復元する場合、またはアーカイブに増分/差分バックアップを追加する場合、Acronis True Image Home では、特別な画面でパスワードの入力を求め、認証したユーザーのみにアクセスを許可します。



ブータブル メディアからアーカイブを復元する場合は、英語キーボード配列となります。そのため、パスワードには記号を使用しないことをお勧めします。

機密データのセキュリティを高めるために、業界標準の AES 暗号化アルゴリズムを使用してアーカイブを暗号化できます。暗号化には、なし、128 ビット、192 ビット、および 256 ビットの 4 種類の設定があります。128 ビット暗号化キーは、ほとんどのアプリケーションに十分な強度を備えています。キーが長ければ長いほど、データのセキュリティは確保されます。ただし、192 ビットおよび 256 ビット長のキーを使用すると、バックアップ処理の速度が大幅に低下します。これらの設定は、パスワード保護されたアーカイブに対してのみ有効です。

### 5.3.2 バックアップから除外するファイル

デフォルトの設定 – **[\*.bak]、[\*.\*]、[\*.\*tmp]ファイルを除外**

バックアップしない特定の種類のファイル用にフィルタを設定することができます。たとえば、システム ファイルやシステム フォルダ、および隠しファイルや隠しフォルダと同様に、「.\*」、「\*.tmp」、および「.bak」などの拡張子のついたファイルをアーカイブに格納しないようにする必要があります。

また、Windows で一般的なワイルド カードを使用してユーザー定義フィルタを適用することができます。たとえば、「.exe」拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、「\*.exe」を追加します。「My???.exe」とした場合は、5 文字で最初が「My」で始まる名前の「.exe」ファイルをすべて除外します。

このオプションは、ファイルのバックアップで実際に選択されたフォルダに対してのみ有効です。ファイル カテゴリのバックアップでは、カテゴリの作成時に設定したファイル フィルタが使用されます(「5.2.2 ファイルのバックアップ」をご参照ください)。**アプリケーションの設定**バックアップまたは**電子メール** バックアップには、固有の除外できないファイルの一覧が含まれています。

### 5.3.3 前後に実行するコマンド

バックアップ処理の前後に自動的に実行されるコマンドまたはバッチ ファイルを指定することができます。たとえば、バックアップ開始前に一時ファイルをハード ディスクから削除する場合、またはバックアップの開始前に毎回、サードパーティのアンチウイルス製品を実行するように構成する場合があります。**[編集]**をクリックして、**[コマンドの編集]**画面を開きます。ここでは、コマンド、コマンドの引数、および作業ディレクトリを入力したり、フォルダを参照してバッチ ファイルを検索することができます。

対話式的コマンド、すなわちユーザーの入力を要求するコマンド(たとえば、"pause")は実行しないでください。これらのコマンドはサポートされていません。

デフォルトでオンになっている**[コマンドの実行が完了するまで操作を行わない]**チェックボックスをオフにすると、コマンドの実行と平行してバックアップ処理を実行することを許可します。

コマンドが失敗した場合でもバックアップを実行するには、**[コマンドが失敗したら処理の実行を中止する]**チェックボックスをオフにします(デフォルトはオン)。

**[コマンドのテスト]**をクリックすると、作成したコマンドの実行をテストすることができます。



内部コマンドやバッチファイルをネスト(入れ子)すると、コマンドの終了を待たずに次のコマンドが実行されます。

### 5.3.4 圧縮レベル

デフォルトの設定 – **[通常]**

**[なし]**を選択した場合は、データは圧縮されないままコピーされるため、バックアップ ファイルのサイズが非常に大きくなります。**[最高]**の圧縮率を選択した場合は、バックアップ処理に長時間かかる場合があります。

最適なデータ圧縮レベルは、アーカイブに格納されるファイルの種類に応じて異なります。たとえば、アーカイブに本来圧縮されている、.jpg、.pdf あるいは.mp3 などの形式ファイルが含まれる場合は、最高の圧縮率を指定してもアーカイブのサイズはそれほど縮小されません。

一般的に、**[通常]**のままにしておくことをお勧めします。リムーバブル メディアにイメージを書き込む場合は、空のハード ディスクの必要枚数を削減するために**[最高]**の圧縮率を選択してください。

### 5.3.5 バックアップ パフォーマンス

次の 3 つのオプションは、バックアップ処理速度に顕著な影響を与える可能性があります。バックアップ処理速度はシステム構成全体およびデバイスの物理的特性に依存します。

#### 1. バックアップの優先度

デフォルトの設定 – **[低]**

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステムリソースの使用量を決定します。バックアップ処理の優先度を下げると、他の CPU タスクのためのリソースを増やすことができます。バックアップ処理の優先度を上げると、現在実行中の他のプロセスからリソースを取り上げることによって、処理が高速化されます。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

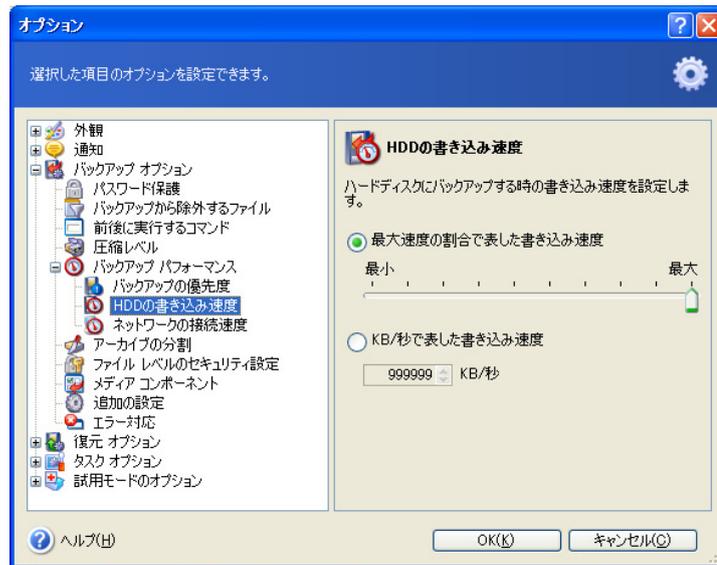
#### 2. HDD の書き込み速度

デフォルトの設定 – **[最大]**

バックグラウンドでローカル ハード ディスク(たとえば、Acronis セキュア ゾーン)にバックアップすると、ハード ディスクへのデータ転送量が大きいため、他のプログラムの速度を遅くする可能性があります。Acronis True Image Home によるハード ディスクの使用を特定のレベルに制限することができます。バックアップ データの HDD 書き込み速度を設定するには、スライダをドラッグするか、または速度を KB/秒の単位で入力します。

### 3. ネットワークの接続速度

デフォルトの設定 – [最大]



ネットワーク上の共有フォルダにデータを頻繁にバックアップする場合は、Acronis True Image Home によるネットワーク帯域幅に制限を設けることをお勧めします。データ転送速度を設定するには、スライダをドラッグするかまたは、バックアップ データの帯域幅制限値を KB/秒の単位で入力します。

#### 5.3.6 アーカイブの分割

バックアップが相当に大きくなる場合は、元のバックアップを複数のファイルに分割できます。バックアップ ファイルをリムーバブル メディアに焼くため、または、FTP サーバーに保存するために、分割することができます(直接 FTP サーバーからデータを復元するには、アーカイブのサイズは 2GB 以下に分割する必要があります)。バックアップ ロケーションまたは Acronis セキュア ゾーンに作成されたバックアップは分割できません。

デフォルトの設定 – [自動]

この設定では、Acronis True Image Home は、次のように動作します。

**ハード ディスクにバックアップする場合:** 選択したハード ディスクに十分な領域があり、推定されるファイル サイズをファイル システムが許容できる場合は、単一のイメージファイルが作成されます。

ストレージ ディスクに十分な領域があるが、推定されるファイル サイズをファイル システムが許容できない場合は、Acronis True Image Home は自動的にバックアップを複数のファイルに分割します。



FAT16 および FAT32 ファイル システムには、最大ファイル サイズにそれぞれ 2GB、4GB の制限があります。ボリューム サイズの最大容量はそれぞれ 4GB、2TB です。このため、ハード ディスク全体をバックアップする場合には、アーカイブ ファイルがすぐにこの制限を超える可能性があります。

**イメージを格納するだけの十分な領域がハード ディスクにない場合:** Acronis True Image は警告メッセージを表示して、この問題をどのように解決するかというユーザーからの指示を待ちます。ある程度の空き領域を追加してそのまま継続するか、または[戻る]をクリックして別のハード ディスクを選択してください。

CD-R/RW または DVD±R/RW などにバックアップする場合は、Acronis True Image Home は、ディスクの残り容量がなくなると、新しい空ディスクを挿入するようにメッセージを表示します。

また、[固定サイズ]を選択して必要なサイズを入力するか、ドロップ ダウン リストからサイズを選択することもできます。バックアップは、指定したサイズの複数のファイルに分割されます。これは、後でアーカイブを CD-R/RW、DVD±R/RW などに書き込むことを目的にして、ハード ディスクへバックアップする場合に役に立ちます。



CD-R/RW または DVD±R/RW に直接イメージを作成すると、ハード ディスクに作成する場合に比べかなり時間がかかることがあります。



分割したアーカイブを復元する場合は、「6.3.2 アーカイブの選択」をご参照ください。

### 5.3.7 ファイル レベルのセキュリティ設定

#### ファイルのセキュリティ設定をアーカイブに保存する

デフォルトで、ファイルやフォルダはオリジナルの Windows セキュリティ設定([プロパティ]→[セキュリティ])で設定する、各ユーザーまたはユーザー グループに対する、読み取り、書き込み、実行などのアクセス許可)とともにアーカイブに保存されます。セキュリティで保護されたファイル/フォルダをアクセス許可に指定されたユーザーが存在しないコンピュータに復元すると、そのファイルは読み取りも書き込みもできません。

このような問題をなくするために、アーカイブでのファイルのセキュリティ設定の保存を無効にできます。そうすると、復元されたファイル/フォルダは常に復元されたフォルダ(親フォルダまたはルートに復元された場合はハード ディスク)のアクセス許可を継承します。

あるいは、アーカイブにファイルのセキュリティ設定が保存されていても、復元時に無効にできます(「6.4.5 ファイル レベルでのセキュリティ設定」をご参照ください)。結果は同じになります。

#### 暗号化されたファイルを暗号化解除してアーカイブに保存する

デフォルトの設定 — **[無効]**

Windows XP および Windows Vista のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用しない場合は、このオプションは無視してください。(ファイル/フォルダの暗号化は、[プロパティ]→[全般]→[詳細設定]→[内容を暗号化してデータをセキュリティで保護する]で設定します)。

暗号化されたファイルがアーカイブに存在するが、復元後にはすべてのユーザーがアクセスできるようにするには、このオプションをオフにします。オンの場合、ファイル/フォルダを暗号化したユーザーのみが、それらを読み取ることができます。暗号化されたファイルを別のコンピュータに復元する場合は、暗号化解除が役立ちます。

これらのオプションは、ファイル/フォルダのバックアップにのみ関係します。

### 5.3.8 メディア コンポーネント

デフォルトの設定 — **[無効]**

リムーバブル メディアにバックアップする場合は、メディアを起動可能にできるため、別途ブータブル メディアを必要としません。

**Acronis One-Click Restore** をブータブル メディアに追加すると、そのリムーバブル メディアに格納されているイメージ アーカイブから 1 クリックでデータを復元することができます。これが意味しているのは、このメディアからの起動時に **[復元]** をクリックするだけで、イメージに格納されているすべてのデータが元の位置に自動的に復元される、ということです。パーティションのサイズ変更などのオプションの設定や選択はできません。

復元中に必要な機能が他にもある場合は、完全版の **Acronis True Image Home** をブータブル メディアに書き込んでください。こうすると、**[データの復元ウィザード]** を使用して復元タスクを構成することができます。

**[詳細]** タブでは、Acronis True Image Home(完全版)と Acronis Drive Cleanser ユーティリティを選択できます。Acronis Drive Cleanser ユーティリティを使用すれば、Acronis True Image Home がアンインストールされている場合でも、コンピュータのハード ディスクから機密データを簡単な操作で完全に抹消できます。Acronis Disk Director Suite などの Acronis 製品が、コンピュータにインストールされている場合には、それらのプログラムのブータブル版が **[詳細]** タブに表示されます。



バックアップ イメージとブータブル メディアをまとめたメディアを作成するには、メディアコンポーネントのオプションを有効化して、Windows 上からバックアップをリムーバブル メディアへ作成します。メディアが複数枚作成された場合は、1 枚目のメディアを使用してパソコンを起動するとブータブルメディアとして起動します。

## 5.3.9 追加の設定

### 1. 作成完了後に、作成されたバックアップ アーカイブをチェックする

デフォルトの設定 — **[無効]**

バックアップしたデータの整合性チェックを選択することができます。チェックは、アーカイブ作成の完了直後に行われます。重要なデータやハード ディスク/パーティションのバックアップを設定する際には、削除されたデータの復旧にもバックアップを使用できるようにオプションを有効にしておくことをお勧めします。



バックアップ アーカイブの整合性をチェックするには、そのバックアップ アーカイブのすべての増分バックアップ ファイルおよび差分バックアップ ファイルと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップにひとつでも抜けがあると、チェックはできません。

### 2. リムーバブル メディアにバックアップ アーカイブを作成する際、最初のメディアの挿入を求める

デフォルトの設定 — **[有効]**

リムーバブル メディアにバックアップする場合に、**[最初のメディアを挿入してください]**というメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、ユーザーがコンピュータに向かっていないとリムーバブル メディアへのバックアップを行うことはできません。これはメッセージのボックスの**[OK]**をユーザーがクリックするのをプログラムが待つからです。このため、リムーバブル メディアへのバックアップのスケジュールを作成する場合には、このメッセージを無効にする必要があります。メッセージを無効にしておくと、(たとえば、CD-R/RW などがドライブに挿入されていて)リムーバブル メディアが使用可能な場合は、バックアップ処理のタスクは無人で実行することができます。

## 5.3.10 エラー対応

### 1. 不良セクタを無視する

デフォルトの設定 — **[無効]**

このオプションでは、ハード ディスク上に不良セクタがあった場合でもバックアップを実行します。ほとんどのハード ディスクには不良セクタはありませんが、ハード ディスクの使用期間に比例して不良セクタの発生する可能性も増加します。このオプションは、手動操作ができない無人バックアップの際にも役立ちます。このオプションを有効にすると、不良セクタで読み取りエラーまたは書き込みエラーが発生した場合でもバックアップが実行されます。

### 2. 処理中にメッセージを表示しない(サイレント モード)

デフォルトの設定 — **[無効]**

この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーは無視されます。また、この機能は主に、手動操作できない無人バックアップ用に設計されました。このモードでは、バックアップ中にエラーが発生した場合に通知は表示されませんが、代わりに、タスクの完了後に**[ツール]**メニューから**[ログの表示]**を選択して、すべての処理についての詳細なログを参照することができます。



ハード ディスクの状態によっては、不良セクタを無視できない場合があります。



不良セクタのあるハード ディスク イメージを復元した場合は、不良セクタ部分のデータは保障されません。



サイレントモードで CD-R/RW、DVD±R/RW に直接保存を行うと、メディアの入れ替えができなくなり、メディア不良と認識されて、バックアップが中断します。

## 第 6 章 バックアップしたデータの復元

### 6.1 Windows 環境からの復元、またはブータブル メディアから起動しての復元

前述「2.3 Acronis True Image Home の実行」をご参照ください)のように、Acronis True Image Home は何通りかの方法で実行することができます。Windows から実行したほうが使用できる機能が多いため、まず Windows で Acronis True Image Home を実行してデータの復元を行うことをお勧めします。Windows が起動しない場合は、ブータブル メディアから起動するかまたはリカバリ マネージャ(「3.4 Acronis リカバリ マネージャ」をご参照ください)を使用してください。

プログラムを起動するためのブータブル メディアは、バックアップ アーカイブを保存している他のディスクの使用を妨げません。Acronis True Image Home は、メモリに読み込まれるため、ブータブル メディアを取り出して、バックアップ アーカイブが保存されているディスクを挿入することができます。



Acronis True Image Home のブータブル メディアからコンピュータを起動した場合は、ディスクのドライブ文字が Windows で認識しているドライブ文字と異なることがあります。たとえば、Windows で E: と認識されていたドライブが、ブータブル メディアから起動した Acronis True Image Home では D: と認識されるかもしれません。これはソフトウェアのエラーではありません。



バックアップ イメージがブータブル メディアにある場合は、Acronis One-Click Restore を使用することもできます。Acronis One-Click Restore では、ハード ディスク全体が復元されるため、ハード ディスクが複数のパーティションに分割されている場合は、すべてのパーティションがイメージに含まれている必要があります。イメージに含まれていないパーティションは失われます。ハード ディスクにあるすべてのパーティションがイメージに含まれていることを確認してください。Acronis One-Click Restore の詳細については、「5.3.8 メディア コンポーネント」をご参照ください。



コンピュータの状態によっては、ブータブル メディアからコンピュータを起動できないことがあります。プロトンのホームページをご参照いただき、最新のビルドが公開されている場合は、新しいビルドのブータブル メディアにてコンピュータが起動できるかをご確認ください。



ブータブル メディアからコンピュータを起動できない場合は、次の機能をご利用できません。

- Acronis スナップ リストア
- Acronis リカバリ マネージャ
- システム ディスクの復元

#### 6.1.1 ブータブルメディアのネットワークの設定

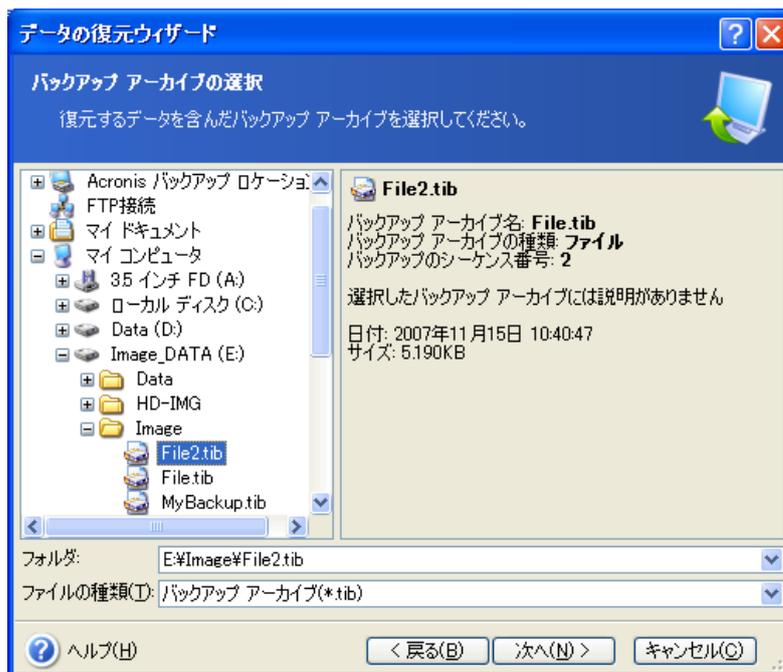
ブータブル メディア、またはリカバリ マネージャから起動した場合に、Acronis True Image Home がネットワークを検出しない場合があります。ネットワーク上に DHCP サーバーがないか、コンピュータの IP アドレスが自動認識されない場合はネットワークが検出されません。

ネットワークに接続するには、[ツール]メニューから[オプション]をクリックして、表示される[オプション]画面から[ネットワークアダプタ]で表示される画面で、手動でネットワークの設定を指定します。

## 6.2 ファイル アーカイブからのファイルやフォルダの復元

ここでは、ファイル バックアップ アーカイブからファイルやフォルダを復元する方法について説明します。ディスクパーティション イメージから、必要なファイルやフォルダを復元することもできます。これを行うには、イメージを仮想ディスクとしてマウント(第 13 章「アーカイブの参照とイメージのマウント」をご参照ください)するか、またはイメージの復元を開始し、**[指定したファイルおよびフォルダの復元]**(「6.3 イメージからのディスクパーティション、またはファイルの復元」をご参照ください)を選択します。

1. **[操作]**メニューから**[復元]**を選択して**[データの復元ウィザード]**を起動します。
2. アーカイブを選択します。アーカイブが Acronis セキュア ゾーンまたは Acronis バックアップ ロケーションにある場合は、左側のフォルダ ツリーから Acronis セキュア ゾーンまたは Acronis バックアップ ロケーションを選択してからアーカイブを選択します。



複数枚の CD-R/RW などリムーバブル メディアにアーカイブがある場合は、まず最後に作成した CD-R/RW を挿入し、以降は**[データの復元ウィザード]**のメッセージが表示されたら、メッセージに従ってディスクを挿入してください。



直接 FTP サーバーからデータを復元するには、アーカイブのサイズが 2GB 以下である必要があります。ファイル サイズが 2GB を超える可能性がある場合は、最初に、アーカイブ全体(最初の完全バックアップとともに)をローカル ハード ディスクまたはネットワーク上の共有フォルダにコピーしてください。FTP サーバーをサポートする場合の注意事項と推奨事項については、「1.3.4 保存先としてサポートされるストレージ メディア」をご参照ください。



新しいコンピュータに Microsoft Outlook をインストールし、**電子メールのバックアップ**から Microsoft Outlook のメール メッセージ、アカウント、連絡先、設定などを復元する場合、復元する前に、Outlook を 1 回以上起動しておく必要があります。Microsoft Outlook を 1 回も起動しないで電子メール情報を復元すると、誤動作する場合があります。

アーカイブにコメントを付加した場合は、コメントがドライブ ツリーの右側に表示されます。アーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home ではパスワードの入力が求められます。正しいパスワードが入力されるまで、コメントと**[次へ]**ボタンは有効になりません。

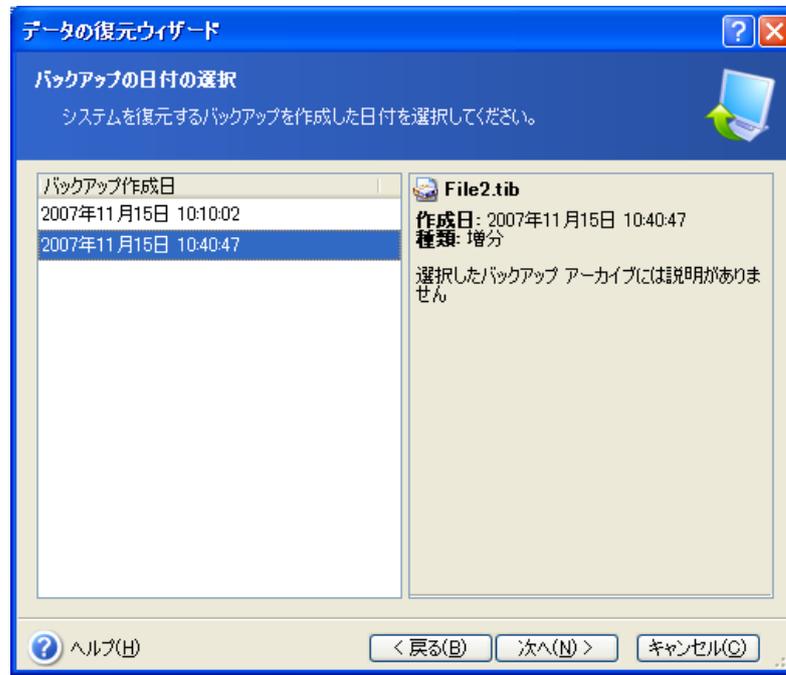


システム状態のバックアップ ファイルは、ブータブル メディアから復元することができません。

- 増分バックアップを含むアーカイブから復元する場合には、作成された日付と時刻を参考に、復元する増分アーカイブの 1 つを選択します。選択した増分バックアップが作成された時点のファイル/フォルダの状態に復元することができます。



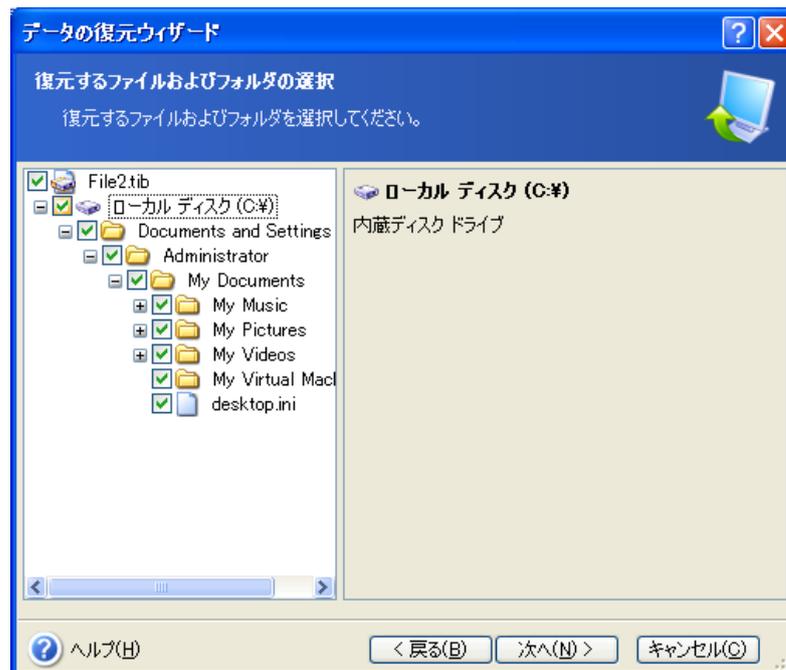
増分バックアップからデータを復元するには、以前に作成したすべての増分バックアップ ファイルおよび最初の完全バックアップが必要です。いずれかひとつでも後続バックアップが存在しない場合は、復元はできません。差分バックアップからデータを復元するには、最初の完全バックアップと差分バックアップの 2 つのファイルが必要です。



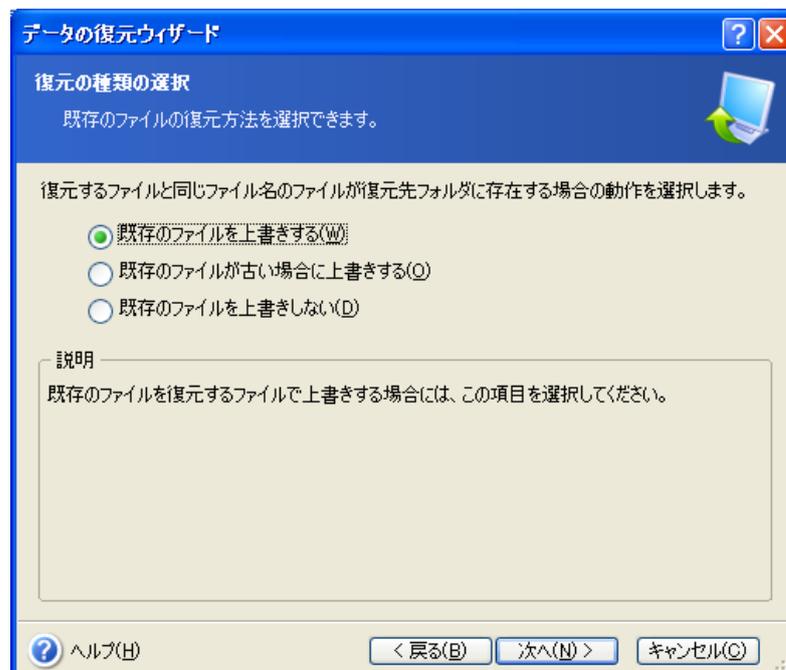
- 選択したファイル/フォルダの復元先のフォルダを選択します。データを元の場所に復元することも、必要なら別のフォルダに復元することもできます。

新しい場所を選択した場合、選択した項目の復元では、デフォルトでオリジナルの絶対パスは復元されません。フォルダ階層全体を復元する場合には、**【復元元のフォルダ構造も復元する】**を選択します。

5. 復元するファイルおよびフォルダを選択します。すべてのデータを復元することも、またはアーカイブの内容を参照して必要なフォルダまたはファイルを選択することもできます。



6. 復元処理のオプション(復元処理の優先度、ファイル レベルでのセキュリティ設定など)を選択します。**デフォルトのオプションを使用するかまたはオプションを手動で設定**ことができます。後者の場合は、これらの設定は現在の復元タスクに対してのみ適用されます。また、現在の画面からデフォルトのオプションを編集することもできます。次に編集した設定は、デフォルトとして保存されます。詳細については、「6.4 復元オプションの設定」をご参照ください。
7. **[復元の種類の選択]**画面では、復元するファイルと同じファイル名のフォルダが復元先フォルダに存在する場合の動作を選択できます。復元先フォルダにアーカイブにあるファイルと同じファイル名が見つかった場合の処理を選択します。



- [既存のファイルを上書きする]** — アーカイブにあるファイルをハード ディスク上のファイルより無条件に優先させます。
- [既存のファイルが古い場合上書きする]** — 最新のファイル修正をアーカイブ、ディスクにかかわらず、優先させます。
- [既存のファイルを上書きしない]** — ハード ディスク上のファイルをアーカイブにあるファイルより無条件に優先させます。

8. 手順の最後に、復元処理の概要画面が表示されます。この手順までの間、ユーザーは[戻る]をクリックして復元処理の設定を変更することができます。[実行]をクリックすると、復元が開始されます。
9. 復元の進行状況が表示されます。[キャンセル]をクリックすると、処理は中断されます。処理が完全に中断されるまでに復元先のフォルダにファイルやフォルダが復元される可能性があります。

## 6.3 イメージからのディスク/パーティション、またはファイルの復元

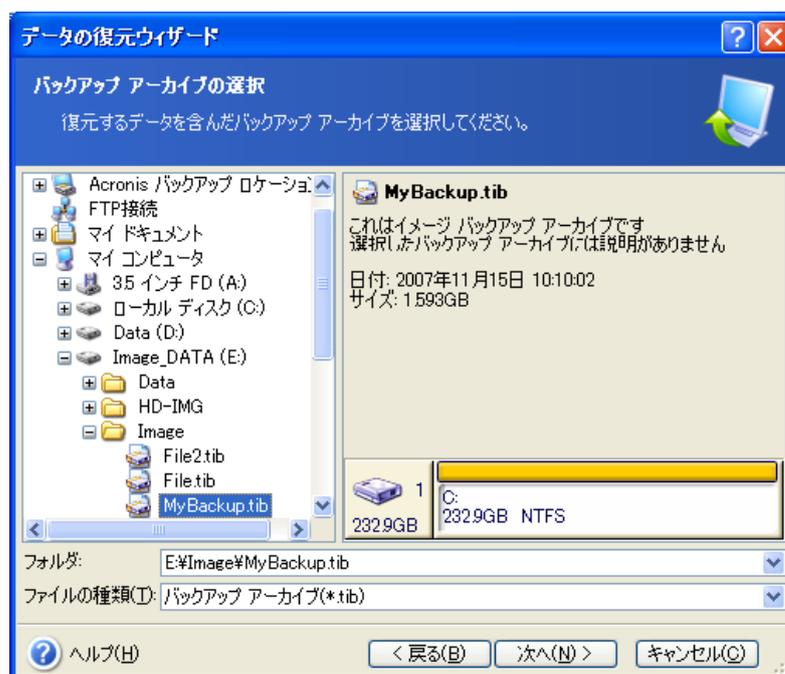
イメージからパーティション(ディスク)を復元するには、復元先のパーティション(ディスク)に対する Acronis True Image Home の排他的アクセスを可能にする必要があります。つまり、このプログラムを実行している間、ほかのアプリケーションが復元先のパーティションにアクセスできなくなります。パーティション(ディスク)をブロックできないことを示すメッセージが表示される場合は、そのパーティション(ディスク)を使用しているアプリケーションを終了してから再開してください。そのパーティション(ディスク)を使用しているアプリケーションが何か分からない場合は、すべてのアプリケーションを終了してください。

### 6.3.1 データの復元ウィザードの開始

[操作]メニューから[復元]を選択して[データの復元ウィザード]を起動します。

### 6.3.2 アーカイブの選択

1. アーカイブを選択します。アーカイブが Acronis セキュア ゾーンまたはバックアップ ロケーションにある場合は、左側のフォルダ ツリーから Acronis セキュア ゾーンまたはバックアップ ロケーションを選択してからアーカイブを選択します。



複数枚の CD-R/RW などリムーバブル メディアにアーカイブがある場合は、まず最後に作成した CD-R/RW を挿入し、以降は[データの復元ウィザード]のメッセージが表示されたら、メッセージに従ってディスクを挿入してください。



直接 FTP サーバーからデータを復元するには、アーカイブのサイズを 2GB 以下に分割してください。ファイル サイズが 2GB を超える可能性がある場合は、最初に、アーカイブ全体(最初の完全バックアップとともに)をローカル ハード ディスクまたはネットワーク上の共有フォルダにコピーしてください。FTP サーバーをサポートする場合の注意事項と推奨事項については、「1.3.4 保存先としてサポートされるストレージ メディア」をご参照ください。



全てのバックアップ アーカイブが 1つのフォルダに保存されている場合は、任意のバックアップ アーカイブを選択してください。自動的に関連するファイルから必要な情報を取り出します。

アーカイブにコメントを追加した場合は、コメントがドライブ ツリーの右側に表示されます。アーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home ではパスワードの入力が求められます。正しいパスワードが入力されるまで、パーティション レイアウト、コメントおよび[次へ]ボタンは有効になりません。

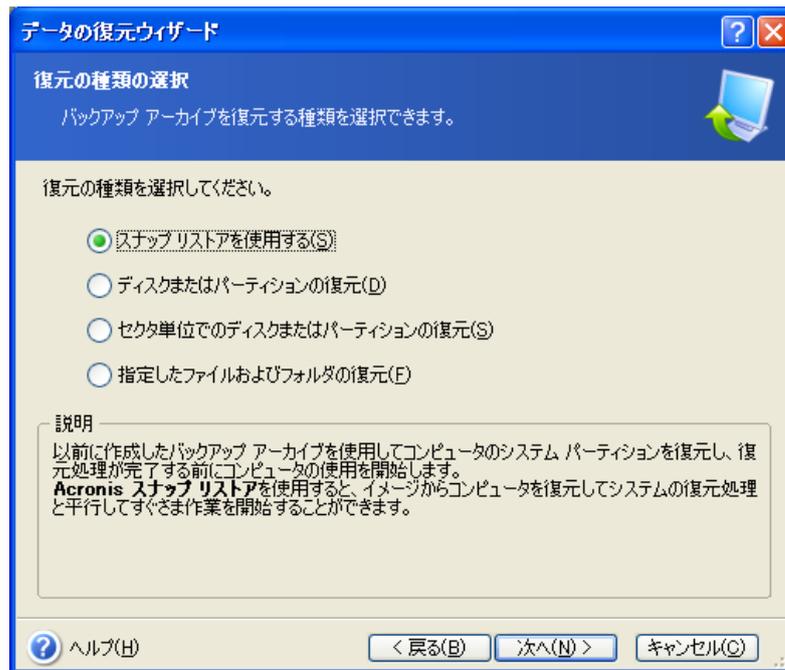
- 増分バックアップを含むアーカイブからデータを復元する場合には、バックアップの作成された日付と時刻を参考に、連続している増分アーカイブの 1 つを選択します。このようにして、ディスク/パーティションの状態を特定の時点に戻すことができます。



増分バックアップからデータを復元するには、以前に作成したすべての増分バックアップ ファイルおよび最初の完全バックアップが必要です。いずれかひとつでも後続バックアップが存在しない場合は、復元はできません。差分バックアップからデータを復元するには、最初の完全バックアップと差分バックアップの 2 つのファイルが必要です。

### 6.3.3 復元の種類の選択

復元するアーカイブを選択します。



#### スナップ リストアを使用する

Acronis セキュアゾーンからシステム ディスク/パーティションのイメージ(Windows Vista のイメージを除く)を復元する場合は、**Acronis スナップ リストア**を使用することもできます。このオプションを選択し、**[次へ]**をクリックすると、手順の最後に表示される概要画面(「6.3.12 復元の概要、および復元の実行」をご参照ください)が表示されます。**[実行]**をクリックすると、数秒以内にコンピュータがシステムの復元のために再起動します。ログインして作業を開始してください。Acronis スナップ リストアの詳細については、「3.6 Acronis スナップ リストア」をご参照ください。



Acronis スナップ リストアを実行すると、現在のバージョンの Acronis True Image Home は常にシステム ディスク全体を復元します。このため、システム ディスクが複数のパーティションで構成されており、Acronis スナップ リストアを使用する場合には、すべてのパーティションをイメージに含める必要があります。イメージに含まれていないパーティションは、Acronis スナップ リストア実行後に、すべて失われます。

他の方法でイメージを復元すると、Acronis スナップ リストアを使用した場合には不可能な、復元ポイントの変更を行うことができます。

#### ディスクまたはパーティションの復元

ハード ディスクまたはパーティションの復元を選択すると、次に説明するすべての設定を行う必要があります。

#### セクタ単位でのディスクまたはパーティションの復元

ハード ディスクまたはパーティションの使用されているセクタおよび使用されていないセクタが復元されます。



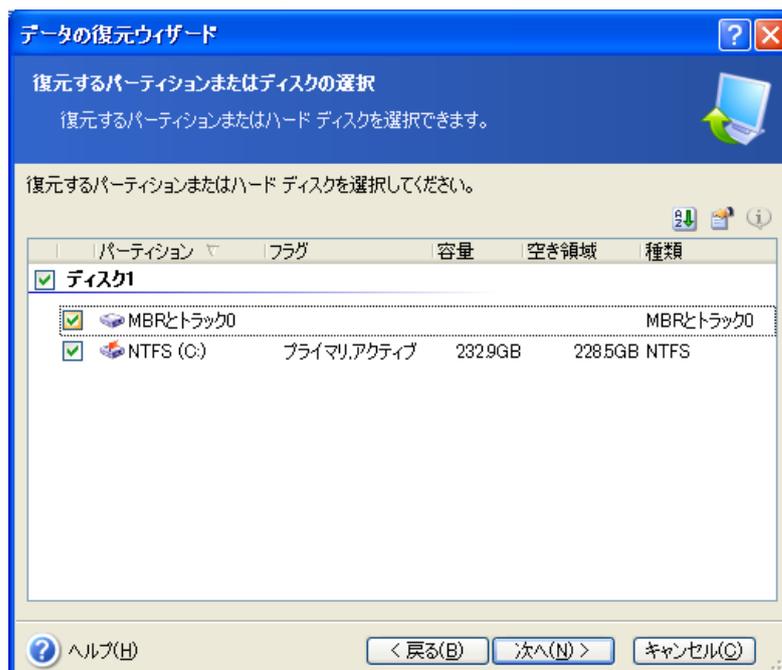
ディスクの署名などが記録された一部のセクタは、復元時に変更されます。そのためセクタ単位でディスクの比較を行った場合、一致しないセクタがあります。

## 指定したファイルおよびフォルダの復元

システムを復元するのではなく、損傷したファイルを修復するだけの場合には、**[指定したファイルおよびフォルダの復元]**を選択します。これを選択すると、さらに選択したファイル/フォルダの復元先(元の場所または新しい場所)を選択し、復元するファイル/フォルダを選択するように求められます。これらの手順は、ファイル アーカイブの復元の手順と似ています。ただし、選択には注意が必要です。ディスク/パーティションではなくファイルを復元する場合には、不必要なフォルダを選択対象から外します。これを行わないと、多数の余計なファイルを復元することになります。次に復元の概要画面が表示されます(「6.3.12 復元の概要、および復元の実行」をご参照ください)。

### 6.3.4 復元するディスクまたはパーティションの選択

選択されたアーカイブ ファイルには、複数のパーティション、または複数のハード ディスクが含まれている可能性があります。復元するディスク/パーティションを選択します。



ハード ディスクおよびパーティション イメージには、トラック 0(MBR を含む)のコピーが含まれていて、この画面にも表示されています。MBR(マスタ ブート レコード)を復元するためには、チェックボックスをオンにします。システムの起動に問題が発生した場合は、MBR を復元してください。

### 6.3.5 復元先のディスクまたはパーティションの選択

1. 選択したイメージを復元する復元先のハード ディスクまたはパーティションを選択します。データを元の場所、別のハード ディスク/パーティション、または未割り当ての領域に復元することができます。復元先のパーティションには、少なくとも復元されたイメージ データと同じサイズが必要です。



復元先のパーティションに格納されているすべてのデータは、イメージ データで置き換えられるため、復元先に存在する必要なデータがバックアップされていることを確認してください。

2. ディスク全体を復元する場合、復元先ディスクのディスク構造を分析し、ディスクが空きであることを確認します。



復元先のハード ディスクに複数のパーティションが存在する場合、**[復元先のハード ディスクが空ではありません]**画面が表示され、復元先ディスクにはパーティションが存在し、データも存在する可能性があることが示されます。次の 2 つから処理を選択できます。

- **[復元先のハード ディスクのパーティションをすべて削除してから復元します]** — 既存のすべてのパーティションは削除され、そこにあるデータはすべて失われます。
- **[パーティションを削除しません]** — どの既存のパーティションも削除されず、復元処理は中断されます。処理をキャンセルするか、前の手順に戻り別のディスクを選択してください。



この時点では、実際の変更もデータの削除も行われません。この時点では、手順が計画されているだけです。すべての変更は、ウィザードの最後の画面で**[実行]**がクリックされたときに、実際に実行されます。

続行するには、最初のオプションを選択して、**[次へ]**をクリックします。「6.3.10 別のパーティションまたはハード ディスクの復元」に移動します。

### 6.3.6 復元するパーティションの種類の変更

ほとんどの場合は必要ありませんが、パーティションを復元する際に、パーティションの種類を変更することができます。

この操作が必要になる理由を理解するために、損傷したハード ディスクの同じプライマリ パーティションにオペレーティング システムとデータの両方が格納されている場合を想定してみます。

システム パーティションを新しい(または、同じ)ハード ディスクに復元し、そこからオペレーティング システムを読み込む必要がある場合は、**[アクティブ]**を選択します。

Acronis True Image Home では、元のパーティション(またはディスク)とは異なる場所に復元された場合でも起動可能にするために、システム パーティションの復元中、ブート情報が自動的に修正されます。

システム パーティションを別のハード ディスクに、そのハード ディスクのパーティションとオペレーティング システムに影響を与えないで復元しようとする場合、ほとんどはデータのみにする必要があります。この場合は、パーティションを**論理**パーティションとして復元することで、データのみアクセスします。

デフォルトでは、元のパーティションの種類が選択されます。



オペレーティング システムがインストールされていないパーティションに対して**[アクティブ]**を選択すると、コンピュータを起動できなくなります。

### 6.3.7 復元するパーティションのファイル システムの変更

必要とする頻度はあまりありませんが、復元中にパーティション ファイル システムを変更できます。Acronis True Image Home は次のようなファイル システム変換を行うことができます。**FAT 16 ⇄ FAT 32、Ext2 ⇄ Ext3**。その他の形式をベースにしたファイル システムを使用するパーティションに対しては、このオプションは使用できません。

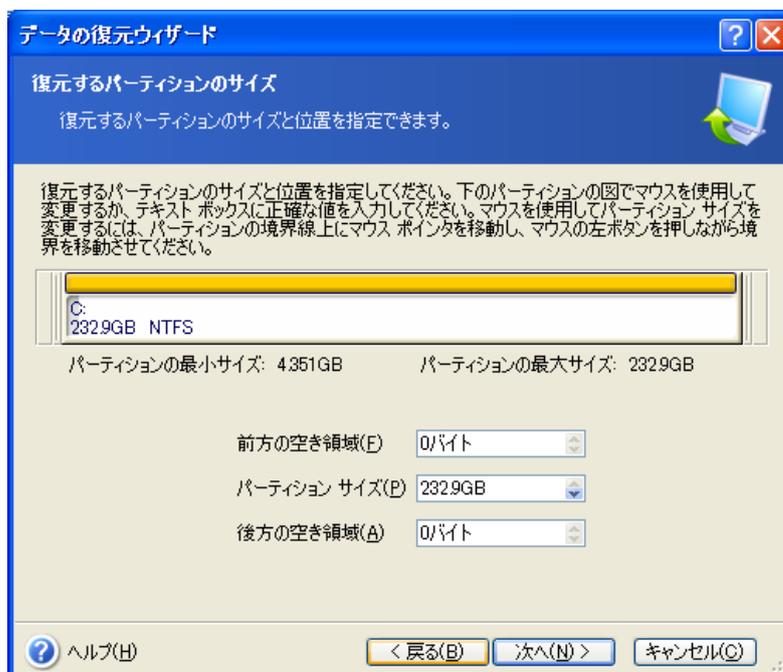


古い小容量の FAT16 ディスクから新しいディスクにパーティションを復元する場合を想定してみます。FAT16 は効率が悪く、大容量のハード ディスクでは設定できない場合もあります。これは、FAT16 がサポートするパーティションが最大でも 4GB までのため、ファイル システムを変えなければ、この制限を超える容量のパーティションに 4GB の FAT16 パーティションを復元できないからです。このような場合は、FAT16 から FAT32 にファイル システムを変更することができます。ただし、FAT32 をサポートしていないオペレーティング システムがあります。MS-DOS、Windows 95、および Windows NT 3.x、4.x は FAT32 をサポートしていないため、パーティションを復元してファイル システムを FAT32 に変更すると動作不能になります。通常、このような場合は、FAT16 パーティションのみに復元されます。

### 6.3.8 復元するパーティションのサイズおよび位置の変更

水平のバーで表示されたパーティションまたはパーティションの境界をマウスでドラッグするか、該当するフィールドに対応する値を入力すると、パーティションのサイズおよび位置を変更できます。

この機能を使用すると、復元されたパーティション間でハード ディスク領域を再配分することができます。この場合、縮小するパーティションを最初に復元してください。



このような変更方法は、ハード ディスクのイメージを作成し、そのイメージをより大きなパーティションを持つ新しいディスクに復元することで、ハード ディスクを新しい大容量のハード ディスクにコピーする場合に役立ちます。このようなクローン作成方法は、2 台目のハード ディスクをコンピュータに接続できない場合に使用されます。



オペレーティング システムの位置または順番を変更すると、コンピュータが起動できなくなる場合があります。

---

### 6.3.9 復元するパーティションに割り当てる論理ドライブ文字

Acronis True Image Home は、未使用のドライブ文字を復元パーティションに割り当てます。ドロップダウンリストからドライブ文字を選択します。リストから**[論理ドライブ文字の割り当ては行いません]**を選択した場合は、復元するパーティションにドライブ文字が割り当てられないため、オペレーティング システム上からパーティションが見えなくなります。

FAT および NTFS 以外の、Windows がアクセスできないパーティションにはドライブ文字を割り当てないでください。

### 6.3.10 別のパーティションまたはハード ディスクの復元

1 回の操作で別のパーティションまたはハード ディスクを復元できます。復元するパーティションまたはハード ディスクごとにこの操作を繰り返すことで、複数のパーティションまたはハード ディスクを順に復元できます。

さらにパーティションまたはハード ディスクを復元する場合は、**[別のパーティションまたはハード ディスクを復元します]**を選択します。その後、パーティション選択画面に戻り(「6.3.4 復元するディスクまたはパーティションの選択」をご参照ください)、上記の手順を繰り返します。

### 6.3.11 復元オプションの設定

復元処理のオプション(復元処理の優先度など)を選択します。**[デフォルトのオプションを使用する]**または**[オプションを手動で設定する]**を選択できます。後者の場合、これらの設定は現在の復元タスクに対してのみ適用されます。また、現在の画面からデフォルトのオプションを編集することもできます。その場合、編集した設定はデフォルトとして保存されます。詳細については、「6.4 復元オプションの設定」をご参照ください。

### 6.3.12 復元の概要、および復元の実行

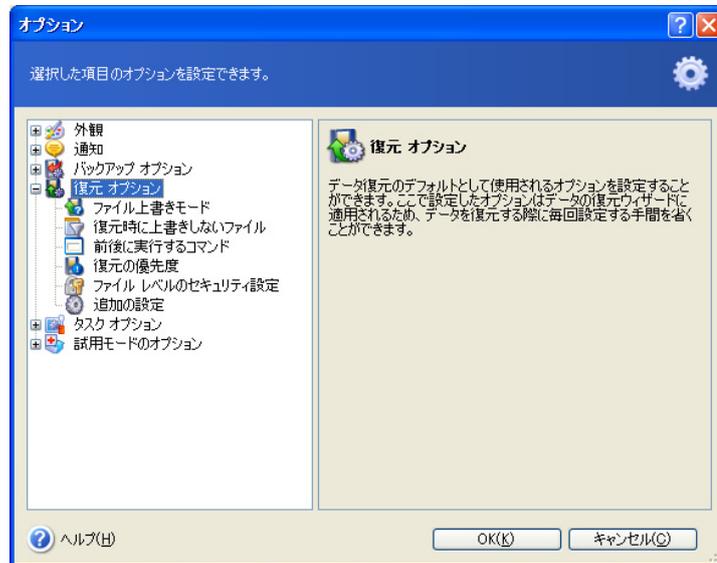
手順の最後で、復元処理の概要画面が表示されます。この手順までの間、ユーザーは**[戻る]**をクリックして作成したタスクに変更を加えることができます。**[キャンセル]**をクリックすると、復元は行われません。**[実行]**をクリックすると、タスクの実行が開始されます。

別の画面に、タスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]**をクリックすると、処理は中断されます。ただし、復元先のパーティションは削除されてその領域が未割り当てとなります。復元が失敗した場合にも、同様の結果になります。「削除された」パーティションを復元するには、再度パーティションをイメージから復元してください。

## 6.4 復元オプションの設定

デフォルトの復元オプションを表示または編集するには、**[ツール]**メニューから**[オプション]**を選択し、表示される**[オプション]**画面から**[復元 オプション]**を選択します。

復元タスクを作成中に、デフォルト(または、一時的に設定された)復元オプションを編集することができます。



### 6.4.1 ファイル上書きモード

このオプションを使用すると、復元されるバックアップ以降に発生したデータの変更を保持できます。復元先フォルダにアーカイブにあるファイルと同じファイル名が見つかった場合の処理を選択します。

**[既存のファイルを上書きする]** — アーカイブにあるファイルをハード ディスク上のファイルより無条件に優先させます。

**[既存のファイルが古い場合に上書きする]** — 最新のファイル修正をアーカイブ、ディスクにかかわらず優先させます。

**[既存のファイルを上書きしない]** — ハード ディスク上のファイルをアーカイブにあるファイルより無条件に優先させます。

### 6.4.2 復元時に上書きしないファイル

このオプションは、イメージからディスクおよびパーティションを復元する場合にのみ有効です。

デフォルトの設定 — **すべてのファイルを復元する**

アーカイブの復元時に上書きしないファイルのフィルタを設定して、特定のファイルを保持することができます。たとえば、システム ファイルやシステム フォルダ、および隠しファイルや隠しフォルダと同様に、選択した条件に一致するファイルがアーカイブ ファイルで上書きされないようにできます。

条件を指定する際には、一般的な Windows のワイルド カード文字を使用できます。たとえば、「.exe」拡張子の付いたすべてのファイルを保持するには、「\*.exe」を追加します。「My???.exe」とした場合は、5 文字で最初が「My」で始まる名前の「.exe」ファイルをすべて保持します。

### 6.4.3 前後に実行するコマンド

復元処理の開始前および終了後に自動的に実行されるコマンド、またはバッチ ファイルを指定することができます。**[編集]**をクリックして、**[コマンドの編集]**画面を開きます。ここでは、コマンド、コマンドの引数、および作業ディレクトリを入力したり、フォルダを参照してバッチ ファイルを検索することができます。

ユーザーの入力を要求する対話式的コマンドはサポートされていません。

デフォルトでオンになっている**[コマンドの実行が完了するまで操作を行わない]**チェックボックスをオフにすると、コマンドの実行と平行した復元処理の実行が許可されます。

コマンドが失敗した場合でも復元を実行するには、**[コマンドが失敗したら処理の実行を中止する]**チェックボックスをオフにします(デフォルトはオン)。

---

[コマンドのテスト]をクリックすると、作成したコマンドの実行をテストすることができます。



内部コマンドやバッチファイルをネスト(入れ子)すると、コマンドの終了を待たずに次のコマンドが実行されます。

#### 6.4.4 復元の優先度

デフォルトの設定 — **[低]**

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステムリソースの使用量を決定します。復元処理の優先度を下げると、他の CPU タスクのためのリソースを増やすことができます。復元処理の優先度を上げると、現在実行中の他のプロセスからリソースを取り上げることによって、処理が高速化されます。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

#### 6.4.5 ファイル レベルでのセキュリティ設定

デフォルトの設定 — **[保存されたセキュリティ設定でファイルを復元する]**

ファイルのセキュリティ設定がバックアップに保存されている場合(「5.3.7 ファイル レベルのセキュリティ設定」をご参照ください)、ファイルのセキュリティ設定を復元するか、それとも復元先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。

このオプションは、ファイル/フォルダ アーカイブからファイルを復元する場合のみ有効です。

#### 6.4.6 追加の設定

1. ファイルの日付/時刻をアーカイブから復元するか、それとも現在の日付/時刻を割り当てるかを選択できます。デフォルトでは、現在の日付/時刻が割り当てられます。
2. データをアーカイブから復元する前に、Acronis True Image Home ではその整合性をチェックすることができます。バックアップ アーカイブが破損している疑いがある場合は、**[復元前にバックアップ アーカイブをベリファイする]**を選択します。



バックアップ アーカイブの整合性をチェックするには、そのバックアップ アーカイブのすべての増分バックアップ ファイルおよび差分バックアップ ファイルと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップにひとつでも抜けがあると、チェックはできません。

3. イメージからディスクパーティションを復元する場合に、Acronis True Image Home はそのファイル システムの整合性をチェックすることができます。これを行うには、**[復元後にファイル システムをチェックする]**を選択します。



ファイル システムのチェックは、FAT16/32 および NTFS ファイル システムに対してディスクパーティションの復元を行う場合のみ実行可能です。

## 第 7 章 試用モード

試用モード機能を使用すれば、特別な仮想化ソフトウェアをインストールすることなく、コンピュータ上に管理された一時的ワークスペースを作成できます。オペレーティング システムやプログラム、データに対する影響を心配せずに、さまざまな処理を行うことができます。

仮想環境で変更を行った後、オリジナルのシステムにすべての変更を適用することができます。またすべての変更を破棄することも選択できます。個別の変更に対して保存するものと破棄するものを選択することはできません。そのような場合には、まず保存する必要がある変更を行った後で、変更をハード ディスクに適用し、試用モードを終了します。次に、試用モード機能を再度起動して、別の処理を試行します。試用モード機能を活用する例としては、知らない差出人から送られたメールの添付ファイルを開くこと、新しいソフトウェアをインストールして実行すること、潜在的に危険な内容を含んでいる可能性のある Web サイトを参照することなどがあります。

たとえば、Web サイトを参照したり、電子メールの添付ファイルを開いて、システムの一時的複製にウイルスが感染した場合でも、その複製は簡単に削除できるので、被害を受けることはありません。ウイルスはコンピュータ上には現れません。



試用モードで、たとえば、POP メール サーバーから電子メールをダウンロードしたり、新しくファイルを作成した後で、変更を破棄した場合、それらのファイルや電子メールはなくなります。POP 電子メールを使用する場合、試用モードを有効化する前に、メールをサーバー上に残すように電子メールの設定を変更してください。そうすれば、いつでも電子メールを再取得できます。

### 7.1 試用モードの使用

試用モードを開始する手順は、次のとおりです。

1. **【操作】**メニューから**【試用モード】**を選択するか、メイン プログラム ウィンドウの**【試用モード】**を選択します。
2. ハード ディスク上に Acronis セキュア ゾーンがない場合、Acronis セキュア ゾーンを作成するよう求められ、その後でウィザードが再度実行されます(第 10 章「Acronis セキュア ゾーンの管理」をご参照ください)。試用モード機能を使用するには、Acronis セキュア ゾーンを作成を承認する必要があります。試用モード機能は Acronis セキュア ゾーンなしでは使用できません。Acronis セキュア ゾーン上の空き領域が非常に少ない場合、空き領域の不足により試用モードを開始できないことが通知されます。

これを解決するには、Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大してから再度、試用モードを実行してください。



試用モードでは、Acronis セキュア ゾーンの空き領域が使用されます。このため、Acronis セキュア ゾーンをシステム ディスクの使用済み領域の 20% 以上のサイズで作成するか、この推奨事項を考慮して Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大することをお勧めします。



Acronis セキュア ゾーンにイメージが保存されていても、そのイメージは試用モードを起動しても影響または損傷を受けません。試用モードで変更を破棄した場合でも、保存されているイメージは影響を受けません。



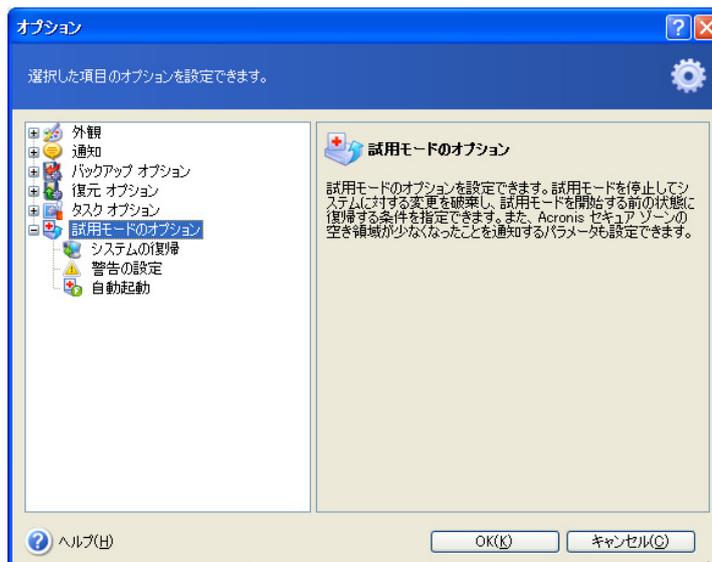
USB ドライブなどの外部メディア上に Acronis セキュア ゾーンを作成した場合、試用モード機能が利用できなくなるため、外部メディアに Acronis セキュア ゾーンを作成することをお勧めしません。



試用モードの制限事項は、次のとおりです。

- 試用モード使用中は、Acronis セキュア ゾーンを再設定できません。
- コンピュータが再起動すると、試用モードはすべての変更を自動的に破棄します。
- 試用モード使用中はバックアップを作成できません。
- 試用モードはパーティションの変化を追跡しません。
- Acronis セキュア ゾーンを外部ハード ディスクに作成しているときは、試用モードをご利用になれません。

3. 次の試用モードオプションを設定します。



- **【システムの復帰】** — 変更を破棄してシステムを以前の状態に戻すときのプログラムの動作を設定することができます。システムをシャットダウンする前に変更を適用するかどうかを選択する場合、**【システムのシャットダウン時にダイアログを表示する】**チェックボックスをオンにします。チェックボックスをオフにすると、変更はシステムのシャットダウンまたは再起動時に、自動的に破棄されます。この場合、破棄されることの警告は表示されません。試用モードの実行時間を制限するには、**【試用モードを開始してから X 時間後】**チェックボックスをオンにして、試用モードの実行時間を指定します。
- **【警告の設定】** — Acronis セキュア ゾーンの空き領域が不足している場合に、仮想モードで変更内容を追跡できないことを警告するメッセージを表示する時期を選択できます。警告値の設定は、Acronis セキュア ゾーンの残り空き領域のパーセントで指定するか、Acronis セキュア ゾーンの空き領域の減少割合から計算した空き領域がゼロになるまでの時間(分)で指定できます。
- **【自動起動】** — コンピュータが起動するたびに試用モードを自動的に実行するかどうかを選択できます。自動実行モードは、**【オン】**または**【オフ】**を設定できます。

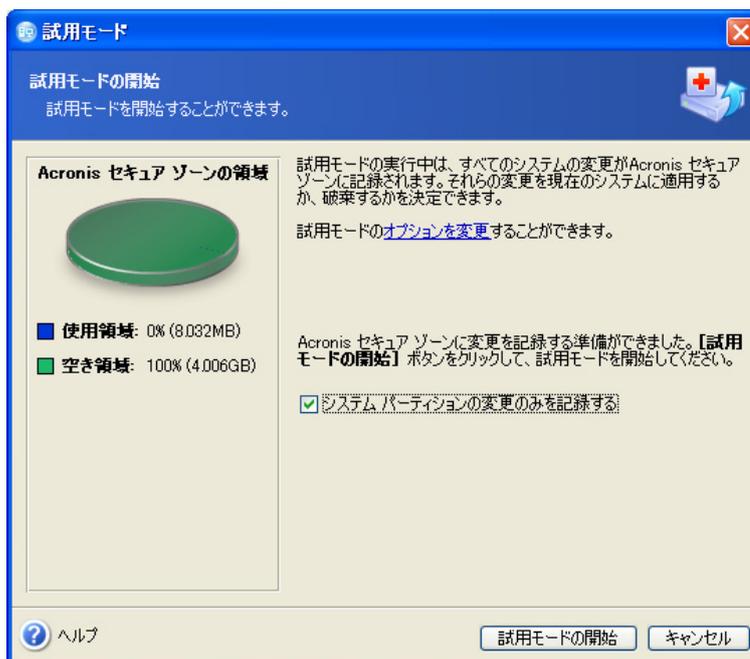


**【自動起動】**が**【オン】**に設定されて試用モードに入っている場合、**【自動起動】**を**【オフ】**に設定するには、(試用モードが無効になっている場合には)試用モードを有効にし、**【自動起動】**を**【オフ】**に設定して、**【変更を適用する】**を選択します。これは、オプションの設定の変更内容を適用しない場合、**【変更を破棄する】**が選択されるかコンピュータが再起動されると、この変更も他の変更と一緒に破棄されてしまうからです。

システム上のすべてのディスクとパーティションの変更を追跡するには、**【システム パーティションの変更のみを記録する】**チェックボックスをオフにします。

4. **試用モード**を開始するには**【試用モードの開始】**をクリックします。オペレーティング システムやファイルに対して行われたすべての変更内容の追跡が Acronis True Image Home によって開始され、変更内容は Acronis セキュア ゾーンに作成された仮想ディスクにすべて保存されます。

5. 必要な変更を行った後に、再度**[試用モード ウィザード]**を起動して、変更内容を保持するか破棄するかを決定します。**[試用モード ウィザード]**は、システムトレイのアイコンをクリックするか、Acronis True Image Home のメイン画面から起動できます。



- 結果が問題ない場合、**[変更を適用する]**を選択し、**[決定]**ボタンをクリックして変更内容を実機に適用することができます。システムトレイの Acronis True Image Home のアイコンを右クリックし、コンテキストメニューから**[決定]**→**[変更を適用する]**を選択して、変更を適用することもできます。
- 変更内容を適用しない場合は、**[変更を破棄する]**を選択し、**[決定]**ボタンをクリックします。システムトレイにある Acronis True Image Home のアイコンを右クリックし、コンテキストメニューから**[決定]**→**[変更を破棄する]**を選択して、変更を破棄することもできます。システムが再起動され、試用モードを開始する前の状態に復元されます。
- さらに他の変更を試用する場合は、**[試用モードを続ける]**チェックボックスをオン(デフォルト)のままにして、**[キャンセル]**ボタンをクリックします。



**[試用モード]**では、コンピュータが再起動されるとすべての変更内容が自動的に破棄されます。このため、実機に変更内容を適用する場合は再起動しないでください。



Acronis True Image Home は、Acronis セキュア ゾーンの空き領域がなくなるまで変更を追跡します。その後、これ以上変更を追跡できないことが警告され、これまでの変更内容を適用するか、破棄するよう求められます。警告メッセージを表示しないことを選択した場合、Acronis セキュア ゾーンの空き領域がなくなるとシステムは自動的に再起動され、変更内容は破棄されます。



**[システムの復帰]**オプションで試用モードに実行時間の制限を割り当てた場合、割り当てた時間が経過する直前まで Acronis True Image Home によって変更の追跡が行われます。次に、「コンピュータは 5 分で再起動します!」というメッセージ表示されます。この間に、今までの変更を適用するか破棄するかを決めることができます。警告メッセージを表示しないことが選択されている場合、割り当て時間が経過するとプログラムによりシステムは自動的に再起動され、その過程で変更内容は破棄されます。この時点で、すべての変更内容は失われます。



試用モードの実行中は、システムのパフォーマンスが低下する場合があります。さらに、変更内容の適用処理にはかなりの時間がかかることがあります。



試用モードユーティリティはディスクパーティションの変更を追跡できないため、パーティションのサイズ変更やレイアウト変更などに試用モードを使用することはできません。



試用モード実行中は、試用モード機能が Acronis セキュア ゾーンをロックするため、Acronis セキュア ゾーンを使用するバックアップとデータの復元は、スケジュールタスクも含め、実行できません。

---

## 7.2 試用モードの使用例

試用モード機能は、次のようなさまざまな状況で役立ちます。

アンチウイルス ソフトウェアをインストールすると別のアプリケーションの機能が動作しなくなったり、起動できなくなったりする場合があります。試用モード ユーティリティを使用すると、このような問題を回避できます。次に例を示します。

1. アンチウイルス ソフトウェアの試用版を製造元の Web サイトからダウンロードします。
2. 試用モードを有効にします。
3. アンチウイルス ソフトウェアをインストールします。
4. コンピュータで、通常実行しているアプリケーションを使用してみます。
5. 何の問題もなくすべてが正常に動作している場合、互換性に関する問題はなく、このアンチウイルス ソフトウェアを購入できることが確認できます。
6. 何らかの問題が発生した場合、システム上の変更内容を破棄して、別の製造元のアンチウイルス ソフトウェアを試すことができます。今度は成功するかもしれません。

次のような場合もあります。誤ってファイルを削除し、さらにごみ箱を空にしてしまったとします。ここで、削除したファイルには重要なデータが含まれていることを思い出し、ファイル復旧ソフトウェアを使用してファイルを復旧しようとします。ただし、削除したファイルを復旧する際に何か誤った操作をしてしまい、復旧前よりも悪い状況になってしまいます。この場合の復旧手順は、次のとおりです。

1. 試用モードを有効にします。
2. ファイルの復旧ユーティリティを起動します。
3. このユーティリティはハード ディスクをスキャンして削除されたファイルやフォルダのエントリを検索した後で、(もしあれば)削除されたエントリを表示し、復旧可能であれば保存する機会を提供します。間違ったファイルを選択したり、ファイルの復旧中に復旧しようとしているファイルがユーティリティによって上書きされてしまうといった可能性は常に存在します。試用モード機能を使用していない場合、これらのエラーは致命的となり、このファイルを復旧できる可能性は完全に失われます。
4. ただし、試用モードで行われた変更を破棄して、再度試用モードを有効にした後にファイルの復旧を試みるすることができます。目的のファイルを復旧できたと確信できるまでこの操作を繰り返すことができます。

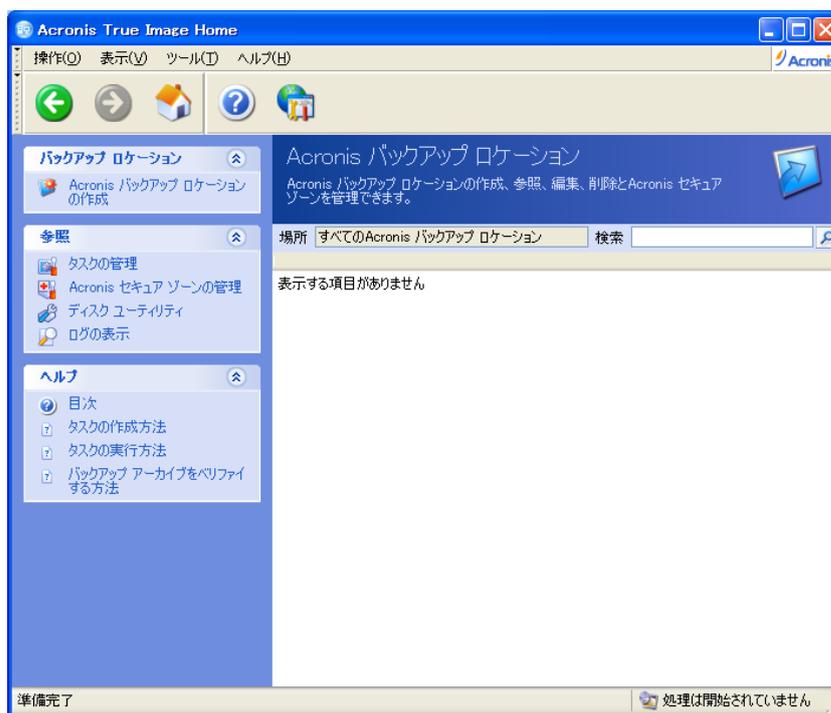
## 第 8 章 Acronis バックアップ ロケーションの管理

この章では、Acronis バックアップ ロケーションの作成、バックアップ ロケーションのルールの設定、バックアップ ロケーションの削除およびバックアップ ロケーションに含まれるアーカイブの表示について解説します。

Acronis バックアップ ロケーションの管理を始める前に、目的と基本的な仕組みについて説明している「3.5 Acronis バックアップ ロケーション」を確認してください。

### 8.1 Acronis バックアップ ロケーションの作成

[Acronis バックアップ ロケーションの作成ウィザード]を起動するには、メイン プログラム ウィンドウの[管理ツール]カテゴリを選択して、[メイン]グループにある[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]をクリックするか、[ツール]メニューから[管理]→[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]を選択します。次に表示された[Acronis バックアップ ロケーション]画面で[Acronis バックアップ ロケーションの作成]を選択します。



Acronis バックアップ ロケーションの作成手順は、次のとおりです。

#### 8.1.1 Acronis バックアップ ロケーションのパス設定

Acronis バックアップ ロケーションは次の場所に設定することができます。

- ローカル(内蔵)ハードドライブ上
- 外付型ドライブ上(USB など)
- BIOS によってリムーバブル ディスクではなくハード ディスクとして認識される書換可能メディア上(フラッシュ カード など)
- ネットワーク上の共有フォルダ
- FTP サーバー上

Acronis バックアップ ロケーションとなるフォルダへのフルパス(ネットワーク上の共有フォルダまたは FTP サーバーへのアクセスの場合は、ユーザー名とパスワードも)、バックアップ ロケーション名を入力します。

オペレーティング システムやユーザー データのあるディスクと同じディスクに Acronis バックアップ ロケーションを設定することは避けてください。ディスクが 1 つしかなく、バックアップ アーカイブをコンピュータの外部に保存することもできない場合には、Acronis バックアップ ロケーションを設定するのではなく、Acronis セキュア ゾーンを使用してください。

リムーバブル メディア、ネットワーク上の共有フォルダ、または FTP サーバーを使用する場合、ストレージ デバイスの空き領域とデータ復元を行う際にそのストレージが使用できるかを考慮してください。

## 8.1.2 バックアップ ルール の設定

ルールには次の項目があります。

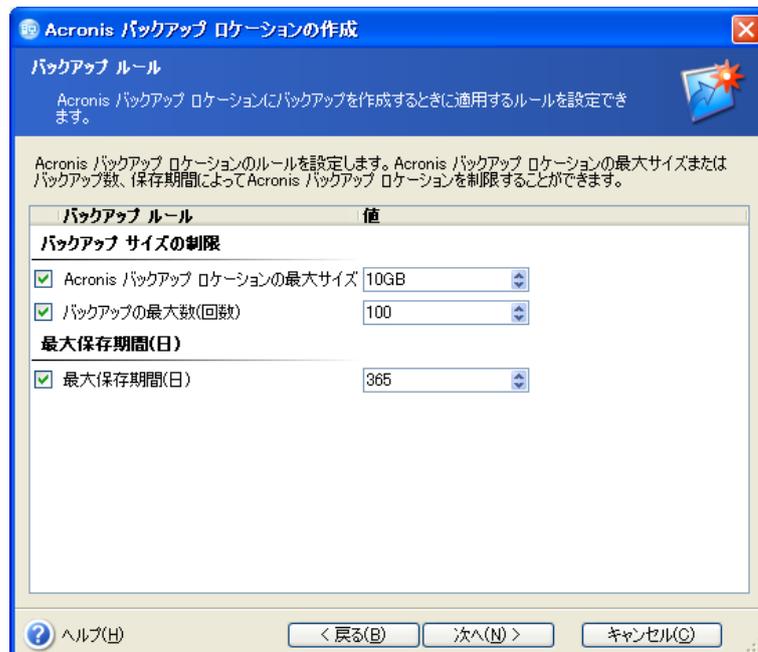
### 1) Acronis バックアップ ロケーションの最大サイズ

これは Acronis バックアップ ロケーションに割り当てる領域の最大サイズです。

領域のサイズを見積もるには、**[バックアップの作成ウィザード]**を開始し、Acronis バックアップ ロケーションにバックアップする予定のすべてのデータを選択します。**[バックアップ オプションの選択]**画面で、**[オプションを手動で設定する]**を選択し、次に圧縮レベルを設定します。すると、完全バックアップの推定サイズ(ディスク/パーティション バックアップの場合)、または完全バックアップの推定サイズを計算できる推定圧縮レベル(ファイル レベル バックアップの場合)が表示されます。これを約 1.5 倍すると、増分バックアップ、または差分バックアップを 1 つ作成した場合のバックアップの最低概算サイズになります。この概算サイズは、完全バックアップと増分バックアップまたは差分バックアップの 1 対分に相当します。複数の完全バックアップを作成する場合には次のルールを考慮してください。



Acronis バックアップ ロケーションのルール設定によっては、作業スペースが必要となることがあります。したがって、ハード ディスクの空き容量を 100% Acronis バックアップ ロケーションに割り当てることはお勧めしません。必要となる作業スペースの大きさは完全バックアップファイルのファイル サイズや、統合するファイル数に依存します。Acronis バックアップ ロケーションにバックアップを取っていて、設定したルールが守られないときや、ログに「ディスクが一杯です」の警告や情報が残るときは、Acronis バックアップ ロケーション設定を見直して、割り当てサイズを小さくする(作業スペースを大きくすることになります)、または、バックアップの最大数(回数)の値を制限するなどの調整を行ってください。



### 2) バックアップの最大数(回数)

Acronis バックアップ ロケーションに許容されるバックアップの総回数です。

### 3) 保存期間の制限(日)

バックアップ ロケーションにバックアップが作成されると、プログラムによってそのロケーションの保存期間がチェックされ、制限を超えている場合は最も古いバックアップが削除または統合されます。



バックアップ ポリシーを設定する場合、**[タスクのスケジュール ウィザード]**を起動して、**[バックアップ アーカイブの保存先]**画面のバックアップ アーカイブの保存先を左側のフォルダ ツリーの上部にある**[Acronis バックアップ ロケーション]**一覧から選択してください。バックアップ ロケーションを**[Acronis バックアップ ロケーション]**一覧から選択せずに、通常のフォルダから選択すると、ルールは有効になりません。

## 8.2 Acronis バックアップ ロケーションの編集

[Acronis バックアップ ロケーションの編集ウィザード]を起動するには、メイン プログラム ウィンドウの[管理ツール]カテゴリを選択し、[メイン]グループの[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]をクリックするか、[ツール]メニューから[管理]→[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]を選択して、[Acronis バックアップ ロケーション]画面に移動します。次に、[Acronis バックアップ ロケーションの編集]を選択します。

ウィザード画面が表示されたら、[Acronis バックアップ ロケーションの選択]画面で、バックアップ ロケーションを選択し、バックアップ ルールに新しい値を入力します。新しいルールは選択したバックアップ ロケーションに適用されます。このバックアップ ロケーションへの次のバックアップからは、バックアップ ロケーションの内容すべてが、設定された新しいルールに従って処理されます。

## 8.3 Acronis バックアップ ロケーションの削除

[Acronis バックアップ ロケーションの削除ウィザード]を起動するには、メイン プログラム ウィンドウの[管理ツール]カテゴリを選択し、[メイン]グループの[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]をクリックするか、[ツール]メニューから[管理]→[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]を選択して、[Acronis バックアップ ロケーション]画面に移動します。次に、[Acronis バックアップ ロケーションの削除]を選択します。

ウィザード画面が表示されたら、[Acronis バックアップ ロケーションの選択]画面で、バックアップ ロケーションを選択します。フォルダ ツリーを展開すると、ロケーションの内容が表示されます。この場所に保存されているすべてのアーカイブを削除するには、[アーカイブの内容の削除]チェックボックスをオンにします。チェックボックスをオンにしない場合は、アーカイブは削除されず、この場所は通常のフォルダになり、任意のファイル マネージャでアーカイブにアクセスできます。

[次へ]を選択すると、削除する場所の内容がウィザードによって表示されます。[次へ]を選択し、表示される概要画面を読み[実行]をクリックします。処理は、削除の確認メッセージを表示することなく実行されます。

## 8.4 Acronis バックアップ ロケーションの選択

バックアップ ロケーションを参照するには、メイン プログラム ウィンドウの[管理ツール]カテゴリを選択し、[メイン]グループの[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]をクリックするか、[ツール]メニューから[管理]→[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]を選択して、[Acronis バックアップ ロケーション]画面に移動します。

画面に既存のバックアップ ロケーションの一覧が表示されます。次に、参照するロケーションを選択し、画面の左にあるサイドバーの[Acronis バックアップ ロケーションの参照]をクリックします。バックアップ ロケーションのアーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home ではパスワードの入力が求められます。次に、バックアップ ロケーションの内容の一覧がアーカイブの種類でグループ化されて表示されます。参照するアーカイブを選択して、サイドバーの[バックアップの内容の表示]をクリックします。画面にアーカイブの内容が表示されます。復元する場合には、復元するフォルダまたはファイルを選択して、サイドバーの[バックアップ内容の選択]グループの[選択した項目の復元]をクリックします。[データの復元ウィザード]が起動され、選択した項目の復元処理の手順が表示されます。



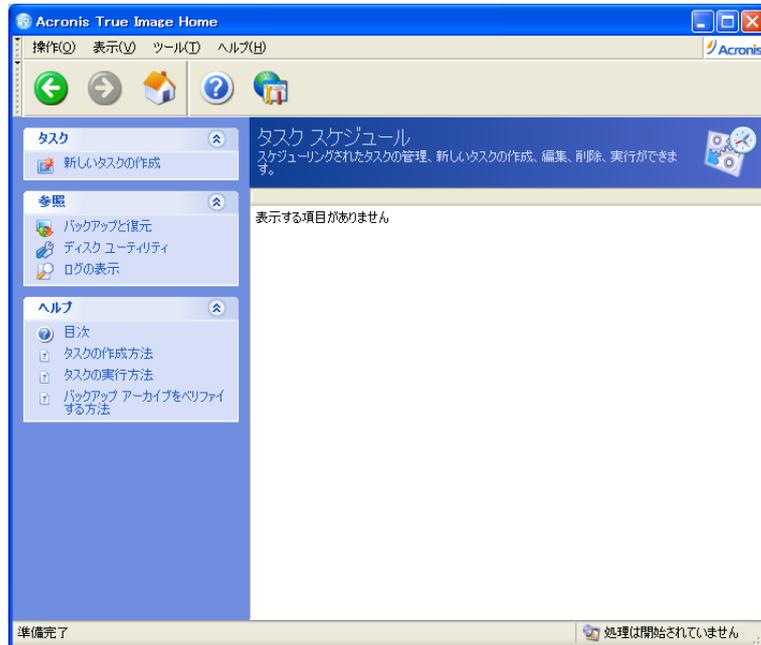
別のパスワードのバックアップがロケーションに含まれている場合、ユーザーが入力したパスワードで保護されたバックアップのみが表示されます。他のパスワードで保護されているバックアップは表示されません。それらを表示するには、再度バックアップ ロケーションを選択し、[Acronis バックアップ ロケーションの参照]をクリックして、それらのバックアップのパスワードを入力します。

## 第 9 章 タスクのスケジュール

Acronis True Image Home を使用すると、定期的なバックアップとベリファイのタスクのスケジュールを作成することができます。

また、複数のタスクを個別にスケジュール設定できます。たとえば、作業中のプロジェクトを毎日バックアップし、アプリケーション ディスクを週に 1 回バックアップするタスクを作成できます。

**【タスク スケジュール】**画面に、スケジュール作成されたすべてのタスクが表示されます。スケジュール作成されたタスクの作成、編集、削除、および名前の変更を行い、タスクを開始および停止することができます。



**【タスク スケジュール】**画面に移動するには、メイン プログラム ウィンドウの**【管理ツール】**をクリックして**【メイン】**グループの**【タスクの管理】**を選択するか、**【ツール】**メニューから**【管理】**→**【タスクの管理】**を選択します。サイドバーに**【タスクの管理】**が表示されている場合は、サイドバーから選択することもできます。

### 9.1 タスクのスケジュールの作成

1. **【タスクのスケジュールウィザード】**を起動するには、**【操作】**メニューから**【新しいタスクの作成】**を選択します。または、メイン プログラム ウィンドウから**【管理ツール】**カテゴリをクリックし、**【メイン】**グループの**【タスクの管理】**を選択して、**【タスク スケジュール】**画面に移動します。次に、サイドバーの**【新しいタスクの作成】**をクリックします。
2. スケジュールを設定するタスクの種類(**【バックアップ】**)または(**【ベリファイ】**)を選択します。**【ベリファイ】**を選択した場合、**【バックアップ アーカイブの選択】**画面でベリファイするバックアップ アーカイブを選択して、手順 7 に進んでください。



ベリファイするアーカイブがパスワードで保護されている場合は、パスワードの入力が求められます。



バックアップ ロケーションまたは Acronis セキュア ゾーンを選択すると、そこに保存されているすべてのバックアップがベリファイされます。

バックアップ ロケーションのいずれかのバックアップがパスワードで保護されている場合、パスワードの入力が求められます。

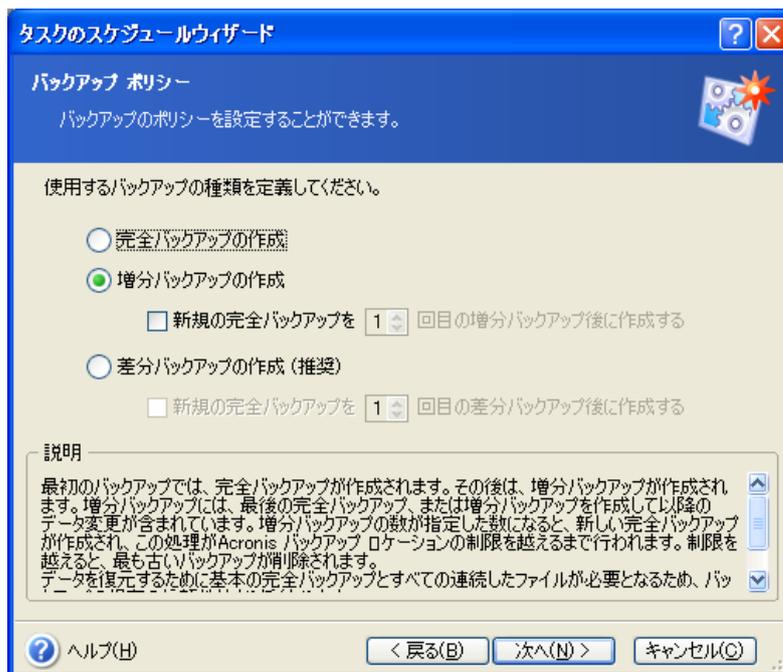
3. **【バックアップ】**を選択した場合、バックアップするデータを選択します(5.2.1～5.2.4 をご参照ください)。
4. スケジュールに従って作成されるバックアップの作成場所を選択します。ネットワーク上の共有フォルダにバックアップ アーカイブを作成する場合は、ネットワーク上の共有フォルダにアクセスするためのユーザー名およびパスワードの入力が必要になります。

5. アーカイブの保存先がバックアップ ロケーション以外の場合、バックアップの種類(完全、増分、差分)を選択します。詳細については、「5.2.6 バックアップの種類を選択」をご参照ください。完全、増分および差分バックアップの定義および基本的情報については、「3.2 完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップ」をご参照ください。

バックアップ ロケーションにバックアップを保存することを選択した場合、バックアップ タスクに関するバックアップ ポリシーを設定します。

Acronis True Image Home では、次の 3 種類のバックアップ ポリシーが提供されます。

- 1)完全バックアップのみを作成する
- 2)完全バックアップと指定した回数分の増分バックアップを作成する
- 3)完全バックアップと指定した回数分の差分バックアップを作成する



スケジュールの初回のバックアップでは、完全バックアップが作成されます。2)または 3)が選択された場合、次のバックアップは増分または差分となり、指定した回数分の増分または差分バックアップが繰り返されます。増分(差分)バックアップが最大数作成された後、新しく完全バックアップと、これに続く一連の増分(差分)バックアップが作成されます。ポリシーが変更されるまでこのプロセスが継続します。

保存先の容量が制限される場合、増分バックアップを使用すると保存するバックアップ数を最大にすることができます。ただし、多くの増分バックアップを持つバックアップ セットは信頼性に欠けます。バックアップ セットの中のどれかのバックアップに損傷があると、それ以降のバックアップからデータを復元することができなくなります。

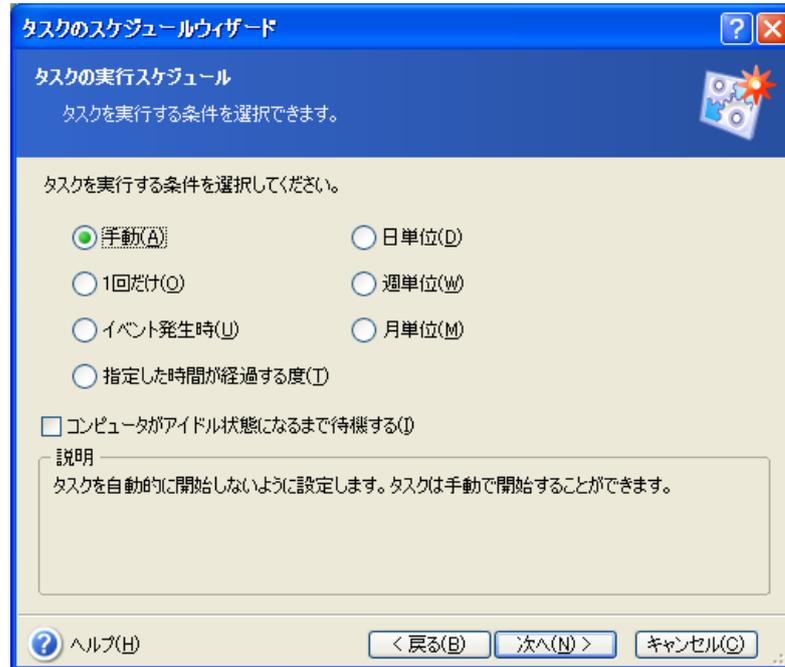
完全バックアップのみを保存することが最も信頼性が高くなりますが、最も領域をとる方法でもあります。

差分バックアップは、他の差分バックアップには依存せず最初の完全バックアップにのみ依存するので、完全バックアップと同じくらい信頼性があります。差分バックアップを多数回作成しても、それらからデータを復元する際に必要なのはベースになった完全バックアップだけです。



ベリファイを行う場合は、差分バックアップの場合でも増分バックアップの時と同様に、それまでに作成されたすべての差分バックアップが必要となります。差分バックアップを削除している場合は、復元は可能ですがベリファイを実行することはできません。

6. 通常の方法でバックアップ タスクを構成します(「5.2.7 バックアップ オプションの選択」および「5.2.8 アーカイブのコメントの入力」をご参照ください)。
7. タスクを実行するスケジュールを設定します。



- **[手動]** — タスクは保存されますが、自動的に開始されません。**[タスク スケジュール]**画面の**[タスクの開始]**アイコンをクリックすることで、このタスクを起動することができます。
- **[1 回だけ]** — 指定した日時に 1 回だけ、タスクが実行されます。
- **[イベント発生時]** — **[イベントによるタスクの実行]**画面で選択する次のイベントが発生した場合にタスクが実行されます。
  - **[コンピュータの起動時]** — オペレーティング システムの起動時にタスクが実行されます。
  - **[コンピュータのシャットダウン時]** — シャットダウンまたは再起動の前に毎回タスクが実行されます。
  - **[ログオン時]** — 現在のユーザーのオペレーティング システムへのログイン時に、毎回タスクが実行されます。
  - **[ログオフ時]** — 現在のユーザーのオペレーティング システムからのログオフ時に、毎回タスクが実行されます。
  - **[ディスクの空き容量が変化したとき]** — 下のフィールドで指定した値のサイズ分空きハード ディスク領域が減るまたは増えるごとにタスクが実行されます。



当日の初回のイベント発生時にのみタスクを実行する場合は、**[1 日に 1 回だけタスクを実行する]**チェックボックスをオンにします。



**[ディスクの空き容量が変化したとき]**は**[1 日に 1 回だけタスクを実行する]**チェックボックスを設定しても利用できません。また、**[コンピュータのシャットダウン時]**は**[ログオフ時]**を含みます。



**[コンピュータのシャットダウン時]**は**[ログオフ時]**を含みます。**[ようこそ]**(ログイン)画面からシャットダウンを行った場合、タスクは実行されません。



Windows Vista では、**[コンピュータのシャットダウン時]**と**[ログオフ時]**が選択できません。

- **[指定した時間が経過する度]** — **[タスクの実行間隔]**画面で指定した時間間隔で定期的にタスクが実行されます。この画面では、**タスクを実行する時間間隔を指定します**。
- **[日単位]** — 1日に1回、または何日かに1回タスクが実行されます。
- **[週単位]** — 週に1回、または何週かに1回指定した曜日にタスクが実行されます。
- **[月単位]** — 月に1回指定した日にタスクが実行されます。
- コンピュータがアイドル状態になるまでタスクの実行を延期するには、**[コンピュータがアイドル状態になるまで待機します]**チェックボックスをオンにします。スクリーンセーバーの**[待ち時間]**設定で指定された時間(分)の間アイドル状態が続くか、ユーザーがログオフするとタスクが自動的に開始されます。タスクはいったん開始されると、完了するまでユーザーが実行に介入することはできません。ただし、タスクの実行中にユーザーはコンピュータで作業を行うことができます。



オペレーティングシステムによっては、一部のオプションが使用できない場合があります。

8. タスクの開始時刻と他のスケジュールパラメータを選択した実行間隔に応じて指定します(9.1.1~9.1.4をご参照ください)。
9. 次に、実行するタスクを作成したユーザーの名前を指定する必要があります。名前を指定しないと、スケジュール管理されたタスクを実行できません。

一番上のフィールドにユーザー名を入力します。パスワードを設定している場合は、下の2つのボックスに同じパスワードを入力します。



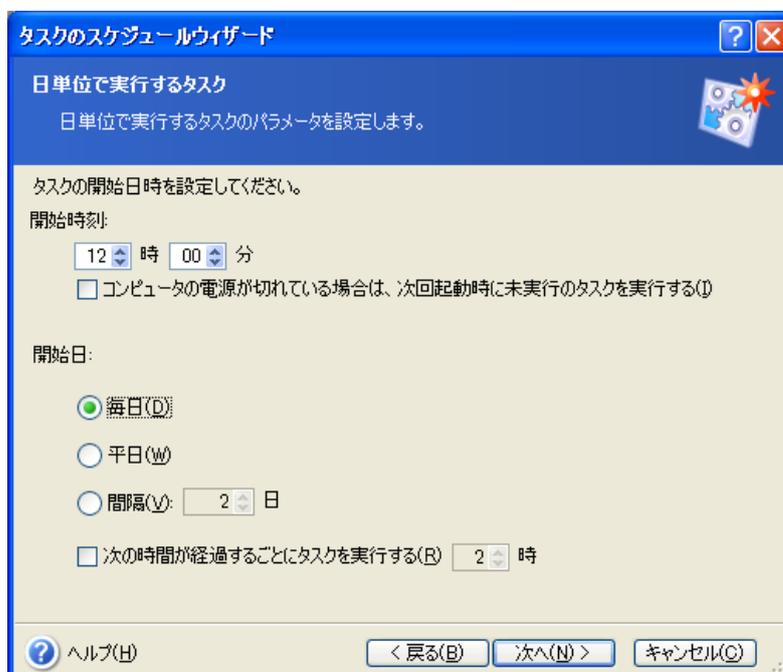
コンピュータにログインするためのパスワードを設定していない場合は、パスワードの入力は不要です。

10. 手順の最後で、タスク構成の概要画面が表示されます。この手順までの間、ユーザーは**[戻る]**をクリックして作成したタスクに変更を加えることができます。**[キャンセル]**をクリックすると、全ての設定内容は破棄されます。**[実行]**をクリックすると、タスクが保存されます。
11. メインプログラムウィンドウのアクティブなタスクペインに、タスクのスケジュールおよびデフォルトの名前が表示されます。タスクの名前をそこで変更することもできます。

## 9.1.1 日単位での実行の設定

日単位での実行を選択する場合、タスクの開始時刻と実行日を設定します。

- **[毎日]**
- **[平日]**
- **[間隔 x 日]** – 数日に 1 回タスクを実行する場合に設定します(間隔を指定します)。
- 一日に複数回タスクを繰り返して実行する場合は、**[次の時間が経過するごとにタスクを実行する]**チェックボックスをオンにして間隔を時間単位で指定します。



実行予定時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、タスクは実行されません。ただし、**[コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する]**チェックボックスをオンにすると、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に実行できます。



スケジュールを作成した日時が起点となります。コンピュータのカレンダーや時計を戻しても作成日時より以前のタスクは実行されません。



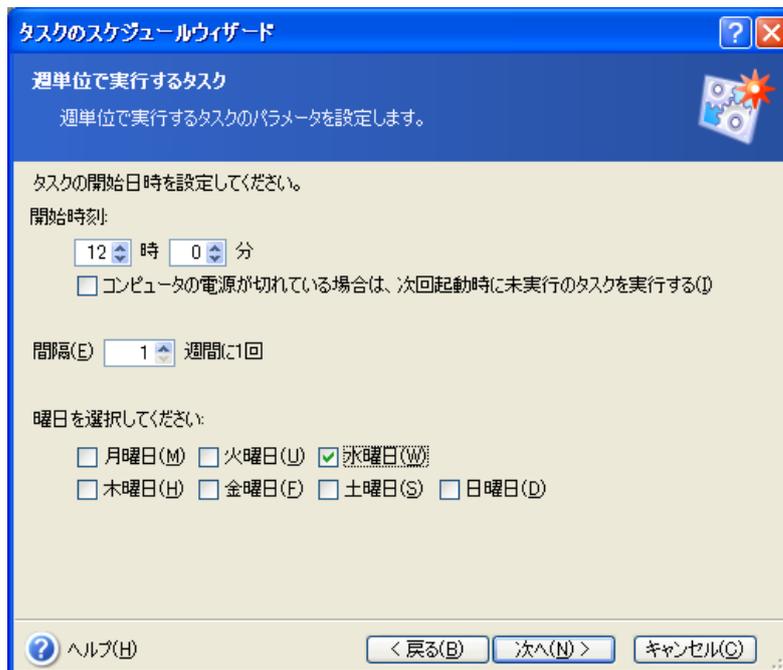
タスクスケジュールの時間設定表記は、Windows の時間表記に依存します。

- Windows が 12 時間表記の場合 → 12 時間制
- 1時0分～12時59分 (AM/PM) となります。
- Windows が 24 時間表記の場合 → 24 時間制
- 0時0分～23時59分となります。
- 12AM (深夜) は 0 時、12PM (正午) は 12 時です。

12 時間制の時に、数字の 0 を直接編集ボックスへ入力する事ができますが、タスク保存時に、Windows の仕様により 1 時 AM に補正されますのでご注意ください。

## 9.1.2 週単位での実行の設定

週単位の実行を選択する場合、**【開始時刻】**を設定し、**【x週間に1回】**ボックス(1週間に1回、2週間に1回など)でタスクの実行周期を指定して、タスクを実行する日のチェックボックスをオンにします。



The screenshot shows the 'Task Scheduler Wizard' dialog box with the following settings:

- Title: タスクのスケジュールウィザード
- Section: 週単位で実行するタスク
- Instruction: 週単位で実行するタスクのパラメータを設定します。
- Task start time: 12 時 0 分
- Checkbox:  コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する(D)
- Interval: 1 週間に1回
- Days:  月曜日(M)  火曜日(Tu)  水曜日(W)  木曜日(Th)  金曜日(F)  土曜日(Sa)  日曜日(D)
- Buttons: ヘルプ(H), < 戻る(B), 次へ(N) >, キャンセル(C)

実行予定時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、タスクは実行されません。ただし、**【コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する】**チェックボックスをオンにすると、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に実行できます。



スケジュールを作成した週の日曜日が起点となります。コンピュータのカレンダーや時計を戻しても作成日時より以前のタスクは実行されません。



タスクスケジュールの時間設定表記は、Windows の時間表記に依存します。

- Windows が 12 時間表記の場合 → 12 時間制
- 1時0分～12時59分 (AM/PM) となります。
- Windows が 24 時間表記の場合 → 24 時間制
- 0時0分～23時59分となります。
- 12AM (深夜) は 0 時、12PM (正午) は 12 時です。

12時間制の時に、数字の0を直接編集ボックスへ入力する事ができますが、タスク保存時に、Windows の仕様により 1時 AM に補正されますのでご注意ください。

### 9.1.3 月単位での実行の設定

月単位での実行を選択する場合、タスクの【開始時刻】と実行日を設定します。

- 【指定日】 — 指定した日にタスクが実行されます。
- 【毎月 <指定日>】 — 指定した曜日にタスクが実行されます(第 2 火曜日、第 4 金曜日など)。曜日はドロップダウンリストから選択します。

The screenshot shows the 'Task Scheduler Wizard' dialog box with the title 'タスクのスケジュールウィザード'. The main heading is '月単位で実行するタスク' (Monthly task execution) and the subtitle is '月単位で実行するタスクのパラメータを設定します。' (Set parameters for monthly task execution). The instruction text says 'タスクの開始日時を設定してください。' (Set the start date and time for the task). Under '開始時刻' (Start time), the time is set to 12:00. A checkbox labeled 'コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する(D)' (If the computer is powered off, execute the task that did not run at the next start-up) is checked. Under '開始日' (Start date), the '指定日(D)' (Specify date) radio button is selected, with '1' in the dropdown and '毎月' (Monthly) selected. The '毎月(H)' (Monthly) radio button is unselected, and its dropdowns are set to '第1' (1st) and '日曜日' (Sunday). The bottom of the dialog has a 'ヘルプ(H)' (Help) button and navigation buttons: '< 戻る(B)' (Back), '次へ(N) >' (Next), and 'キャンセル(C)' (Cancel).

実行予定時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、タスクは実行されません。ただし、【コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する】チェックボックスをオンにすると、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に実行できます。

### 9.1.4 1 回だけの実行の設定

1 回だけの実行を選択する場合、タスクの【開始時刻】と実行日を設定します。

The screenshot shows the 'Task Scheduler Wizard' dialog box with the title 'タスクのスケジュールウィザード'. The main heading is '1回だけ実行するタスク' (Execute task once) and the subtitle is '1回だけ実行するタスクのパラメータを設定します。' (Set parameters for one-time task execution). The instruction text says 'タスクの開始日時を設定してください。' (Set the start date and time for the task). Under '開始時刻' (Start time), the time is set to 12:00. A checkbox labeled 'コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する(D)' (If the computer is powered off, execute the task that did not run at the next start-up) is unselected. Under '開始日(S)' (Start date), the date is set to 2007年 11月 15日 (November 15, 2007). The bottom of the dialog has a 'ヘルプ(H)' (Help) button and navigation buttons: '< 戻る(B)' (Back), '次へ(N) >' (Next), and 'キャンセル(C)' (Cancel).

実行予定時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、タスクは実行されません。ただし、【コンピュータの電源が切れている場合は、次回起動時に未実行のタスクを実行する】チェックボックスをオンにすると、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に実行できます。

---

## 9.2 スケジュールを設定されたタスクの管理

[**タスク スケジュール**]画面に移動するには、メイン プログラム ウィンドウから[**管理ツール**]をクリックし、[**メイン**]グループの[**タスクの管理**]を選択します。また、[**ツール**]メニューから[**管理**]→[**タスクの管理**]を選択するか、サイドバーに[**タスクの管理**]が表示されている場合は、サイドバーからクリックすることもできます。[**タスク スケジュール**]画面には、スケジュールされたすべてのタスクの[**名前**]、[**状態**]、[**スケジュール**]、[**最後の実行日時**]、[**最後の実行結果**]、および[**所有者**]が表示されます。他のタスクの詳細を表示するには、タスクの名前を右クリックします。

デフォルトでは、自分のタスクのみが表示されますが、他のユーザーのタスクを表示したり管理することもできます。これを行うには、[**ツール**]メニューから[**オプション**]を選択して、表示される[**オプション**]画面から[**タスク オプション**]を選択します。次に、[**フィルタ**]を選択し、[**現在のユーザーによって作成されたタスクのみを表示する**]チェックボックスをオフにします。

タスクのパラメータを変更する方法は 2 つあります。[**タスクの編集**]を選択すると、タスクの任意のパラメータを変更できます。これは、作成の場合と同じ方法で実行されますが、以前に選択されたオプションが設定されているので、ユーザーは変更箇所を入力するだけです。タスクを編集するには、対象のタスクを選択してサイドバーの[**タスクの編集**]をクリックします。

開始時刻のみを変更する場合は、**サイドバー**の[**スケジュールの変更**]をクリックします。その後、その他のタスクの設定は同じままで、スケジュール作成手順のみを実行する必要があります。

確認画面付きでタスクを削除するには、タスクを選択し、サイドバーの[**タスクの削除**]をクリックします。

タスクの名前を変更するには、タスクを選択し、サイドバーの[**名前の変更**]をクリックし、新しいタスクの名前を入力します。

## 第 10 章 Acronis セキュア ゾーンの管理

Acronis セキュアゾーンは、アーカイブを作成した同じコンピュータ システム上にバックアップ アーカイブを保存するための特別な隠しパーティションです。Acronis セキュアゾーンは Acronis リカバリマネージャーまたは試用モードを使用するには必要な領域です。これらの機能については、「3.3 Acronis セキュア ゾーン」、「3.4 Acronis リカバリマネージャー」および「3.8 試用モード」をご参照ください。

**[ツール]**メニューから**[管理]**→**[Acronis セキュア ゾーンの管理]**を選択すると、すべてのローカルのハード ディスクドライブ上で Acronis セキュア ゾーンの検索が行われます。Acronis セキュア ゾーンが見つかったら、Acronis セキュア ゾーンを管理(サイズの変更、パスワードの変更)または削除をするためのウィザード画面が表示されます。また、Acronis セキュア ゾーンがない場合は、Acronis セキュア ゾーンの作成が求められます。

Acronis セキュア ゾーンがパスワードで保護されている場合は、操作を行う前に適切なパスワードを入力する必要があります。

### 10.1 Acronis セキュア ゾーン の作成

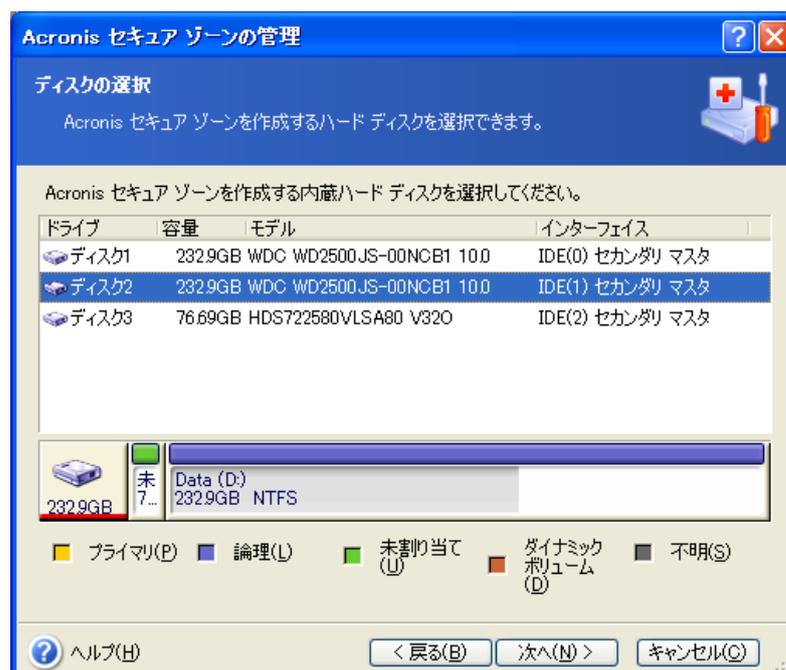
Acronis セキュア ゾーンは内蔵ハード ディスクに配置できます。Acronis セキュア ゾーンは、(利用可能な)未割り当ての領域またはパーティションの空き領域を使用して作成されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要な場合があります。



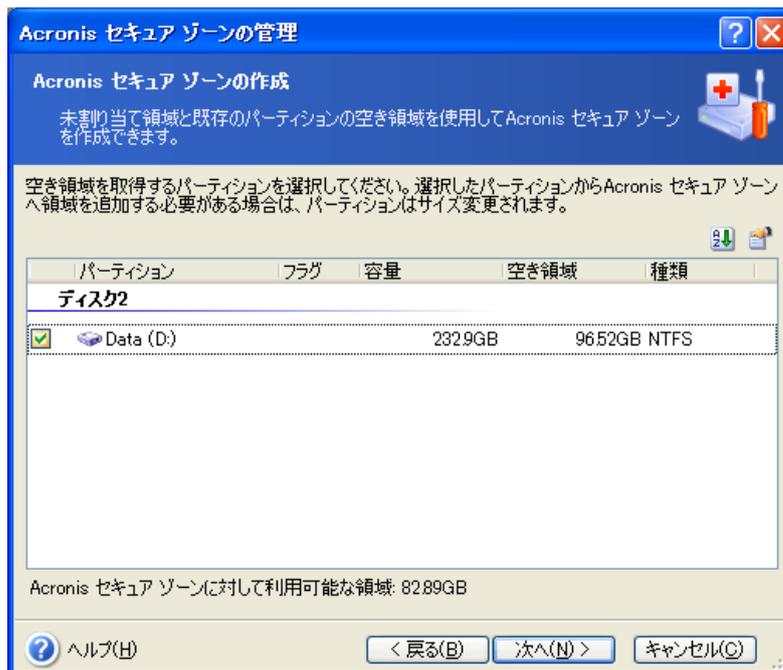
Acronis セキュア ゾーンを USB ドライブなどの外部メディア上に作成した場合、コンピュータの起動時にその外部ストレージが接続されていないと問題が発生する原因となるため、Acronis セキュア ゾーンを外部メディア上に作成することはお勧めしません。さらにその場合、試用モード機能も利用できなくなります。

1 台のコンピュータに配置できる Acronis セキュア ゾーンは 1 つのみです。別のハード ディスク上に Acronis セキュア ゾーンを作成するためには、既存の Acronis セキュア ゾーンを削除する必要があります。

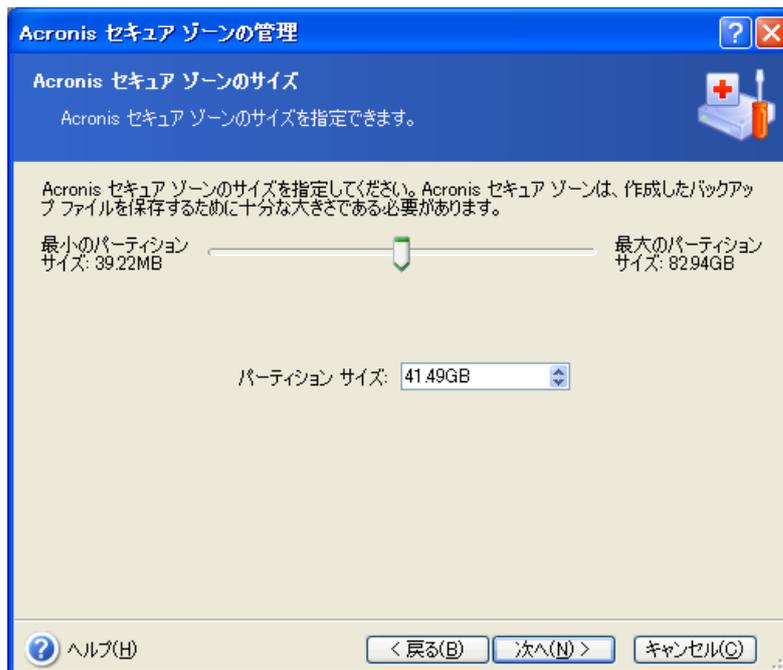
1. Acronis セキュア ゾーンを作成するにあたって、そのサイズを見積もる必要があります。サイズを見積もるには、バックアップを開始し、Acronis セキュア ゾーンにバックアップを作成するすべてのデータを選択します。**[バックアップ オプションの選択]**画面で、**[オプションを手動で設定する]**を選択して、圧縮レベルを指定します。すると、完全バックアップの推定のサイズ(ディスク/パーティション バックアップの場合)、または完全バックアップの推定のサイズを計算できるおおよその圧縮率(ファイル レベルでのバックアップの場合)が表示されます。これを約 1.5 倍すると、増分バックアップ、または差分バックアップを 1 つ作成した場合のアーカイブの最低概算サイズになります。この概算サイズは、完全バックアップと増分バックアップまたは差分バックアップの 1 対分に相当します平均の圧縮率は 2:1 となっています。この数値も Acronis セキュア ゾーンを作成する際の参考にしてください。プログラムとデータの容量が 10GB のハード ディスクがあるとします。通常、これは約 5GB に圧縮されます。結果として、この場合、セキュア ゾーンのサイズは最低 7.5GB 必要になります。
2. 複数のディスクが設置されている場合は、Acronis セキュア ゾーンを作成するハード ディスクを選択します。



3. Acronis セキュア ゾーンの作成に使用するパーティションを選択します。



4. 次の画面では、Acronis セキュア ゾーンのサイズを入力するか、スライダをドラッグして最大値と最小値の間でサイズを選択します。



ハード ディスクにもよりますが、最小サイズは約 35MB です。最大サイズは、前のステップで選択したすべてのパーティションの未割り当て領域と、すべての空き領域の合計に等しくなります。

Acronis セキュア ゾーンを作成する場合は、まず最初に未割り当て領域が使用されます。十分な未割り当て領域がない場合は、選択したパーティションが縮小されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要な場合があります。



システムのパーティションを最小サイズまで縮小すると、オペレーティング システムが起動しなくなる可能性があります。

5. パスワードを設定して、Acronis セキュア ゾーンへのアクセスを制限することができます。このパスワードは、Acronis セキュア ゾーンへのデータのバックアップおよび復元、イメージのマウントまたはアーカイブのベリファイ、**F11** キーによる起動、Acronis セキュア ゾーンのサイズ変更および削除など、セキュア ゾーンに関連するすべての操作に対して要求されます。



ブータブル メディアで起動した場合、パスワードを入力するときに英語配列キーボードとなるため、記号文字の位置がパスワード設定時と異なります。そのため英数字以外の文字をパスワードに使用しないでください。



Acronis True Image Home の修復またはアップデートにより、パスワードが影響を受けることはありません。ただし、ハード ディスク上に Acronis セキュア ゾーンを残したままプログラムが削除され再度インストールされた場合は、その Acronis セキュア ゾーンのパスワードはリセットされます。

6. その後、Acronis リカバリ マネージャを有効化するよう求められます。有効化するとコンピュータの起動時に **F11** キーを押して Acronis True Image Home を起動できるようになります。メイン プログラム ウィンドウから後でこの機能を有効化することもできます。
7. 次に、パーティション(ディスク)で実行される処理の一覧が表示されます。

**[実行]**をクリックすると、Acronis True Image Home によってセキュア ゾーンの作成が開始されます。別のウィンドウに進行状況が示されます。必要な場合は、**[キャンセル]**をクリックすると、Acronis セキュア ゾーンの作成を中止できます。ただし、実行中の操作が終了した後で処理はキャンセルされます。

Acronis セキュア ゾーンの作成には数分以上かかる場合があります。すべての処理が完了するまでお待ちください。

## 10.2 Acronis セキュア ゾーンのサイズ変更

1. ウィザードにメッセージが表示されたら、**[Acronis セキュア ゾーンの管理]**を選択します。
2. Acronis セキュア ゾーンの拡大または縮小を選択します。より大きな領域をアーカイブの作成用に確保するには、Acronis セキュア ゾーンの領域を拡大する必要があります。パーティションに十分な空き領域がない場合は、逆に Acronis セキュア ゾーンを縮小してください。
3. Acronis セキュア ゾーンの拡大に使用する空き領域を含むパーティション、または Acronis セキュア ゾーンを縮小した後に空き領域を追加するパーティションを選択します。
4. Acronis セキュア ゾーンのサイズを入力するか、スライダをドラッグして最大値と最小値の間でサイズを選択します。

Acronis セキュア ゾーンを拡大する場合は必ず未割り当て領域が使用されます。十分な未割り当て領域がない場合は、選択したパーティションは縮小されます。パーティションのサイズを変更すると、再起動が必要な場合があります。

5. 次に、パーティション(ディスク)で実行される処理を簡単に説明した一覧が表示されます。

**[実行]**をクリックすると、Acronis True Image Home によってセキュア ゾーンのサイズ変更が開始されます。別の画面に進行状況が示されます。必要な場合は、**[キャンセル]**をクリックすると、処理を中止できます。ただし、実行中の操作が終了した後で処理はキャンセルされます。

Acronis セキュア ゾーンのサイズ変更は数分以上かかる場合があります。すべての処理が完了するまでお待ちください。

## 10.3 Acronis セキュア ゾーンのパスワードの変更

1. [Acronis セキュア ゾーンの管理ウィザード]の[操作の選択]で、[Acronis セキュア ゾーンの管理]を選択します。
2. [パスワードの変更]を選択します。

3. [パスワード保護を使用する]を選択して、新しいパスワードの入力およびパスワードの確認入力を行うか、または [パスワード保護を使用しない]を選択します。なお、パスワードを忘れた場合に使用できる、本人確認用の秘密の質問を設定することもできます。
4. パスワードの変更処理を実行するには、ウィザードの最後の画面で[実行]をクリックします。



ブータブルメディアで起動した場合、文字を入力するときに英語配列キーボードとなるため、文字の配列がパスワード設定時と異なります。そのため英数字以外の文字を秘密の質問の答えに使用しないでください。

## 10.4 Acronis セキュア ゾーンの削除

1. ウィザードにメッセージが表示されたら、[Acronis セキュア ゾーンの削除]を選択します。
2. Acronis セキュア ゾーンから解放された領域を追加するパーティションを選択します。複数のパーティションが選択された場合、領域は各パーティションのサイズに比例して分配されます。
3. 次に、パーティション(ディスク)で実行される処理を簡単に説明した一覧が表示されます。

[実行]をクリックすると、Acronis True Image Home によって Acronis セキュア ゾーンの削除が開始されます。別画面に進行状況が示されます。必要な場合は、[キャンセル]をクリックすると、処理を中止できます。ただし、実行中の操作が終了した後で処理はキャンセルされます。

Acronis セキュア ゾーンの削除には数分以上かかる場合があります。すべての処理が完了するまでお待ちください。



Acronis セキュア ゾーンを削除すると、自動的に、Acronis セキュア ゾーンに保存されているすべてのバックアップが抹消され、Acronis リカバリ マネージャは無効になります。

## 第 11 章 ブータブル メディアの作成

オペレーティング システムを起動できない新規のコンピュータまたはクラッシュしたコンピュータ上でブータブル メディアから Acronis True Image Home を実行することができます。すべてのデータをセクタ単位でバックアップ アーカイブにコピーして、Windows 以外のコンピュータのハード ディスクをバックアップすることもできます。これを行うためには、Acronis True Image Home コンポーネントを配置したブータブル メディアが必要です。

製品のインストール メディアには、インストール プログラムとともにあらかじめ Acronis True Image Home コンポーネントが含まれています。

別途ブータブル メディアを作成する場合は、ブータブル メディア ビルダを使用してブータブル メディアを作成できます。ブータブル メディアを作成するには、空の CD-R/RW、DVD(R/RW)(ウィザードが枚数を指定します)が必要となります。

Acronis True Image Home は、ハード ディスク上にブータブル メディアの ISO イメージを作成する機能も持っています。

他の Acronis 製品が、コンピュータにインストールされている場合には、それらのコンポーネントを同じブータブル メディアに配置することができます。

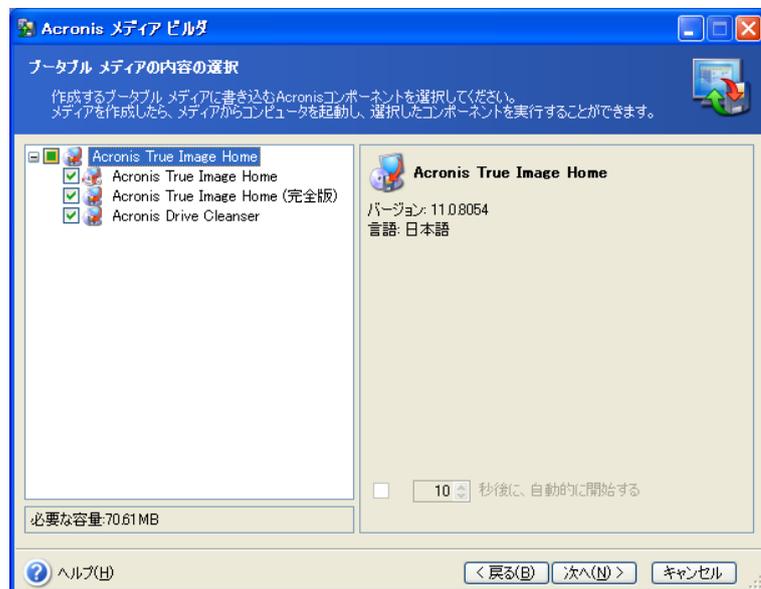


Acronis True Image Home のインストール時にブータブル メディア ビルダをインストールしないことを選択した場合は、この機能は使用できません。



コンピュータの状態によっては、ブータブル メディアからコンピュータを起動できないことがあります。プロトンのホームページをご参照いただき、最新のビルドが公開されている場合は、新しいビルドのブータブル メディアにてコンピュータが起動できるかをご確認ください。

1. サイドバーの[ブータブル メディアの作成]をクリックするか、[ツール]メニューから[ブータブル メディアの作成]を選択します。Windows の[スタート]メニューから[プログラム]→[Acronis]→[Acronis True Image Home]→[ブータブル メディア ビルダ]を選択することで、Acronis True Image Home を起動することなく、ブータブル メディア ビルダを実行できます。
2. ブータブル メディアに配置する Acronis プログラムのコンポーネントを選択します。



Acronis True Image Home には次のようなコンポーネントがあります。

- **Acronis True Image Home (完全版)**

完全版では、USB、PC カード(PCMCIIは旧名称)、SCSI インターフェイスおよびそれらに接続されたストレージ デバイスがサポートされています。

- **Acronis True Image Home**

このコンポーネントは「セーフ版」といい、USB、PC カード、SCSI のドライバは含まれていません。

## • Acronis Drive Cleanser

Acronis Drive Cleanser ユーティリティのコンポーネントです。Acronis True Image Home をアンインストールした場合でも、お使いのコンピュータ上の機密データを簡単に、かつ完全に抹消することができます。

次の画面で、[ブータブル メディアの起動パラメータ]を設定してブータブル メディアのオプションを構成し、異なるハードウェアとの互換性を高めることができます。複数のオプションが使用できます(nousb、nomouse、noapic など)。

指定できる起動パラメータについては付録 D「起動パラメータ」をご参照ください。なお、これらのオプションは上級ユーザー用となります。



インストール後、[ツール]メニューから[オプション]を選択して、表示される[オプション]画面の[バックアップオプション]→[メディア コンポーネント]にて、[Acronis True Image Home(完全版)を追加する]チェックボックスをオンにすると、バックアップをメディアに保存する場合、バックアップ イメージとともにコンポーネントをメディアに配置することができます。

3. 作成するブータブル メディアの種類(CD-R/RW または DVD±R/RW)を選択します。BIOS が機能を持っていれば、リムーバブル USB フラッシュなどのブータブル メディアを作成できます。また、ブータブル メディアの ISO イメージの作成を選択できます。

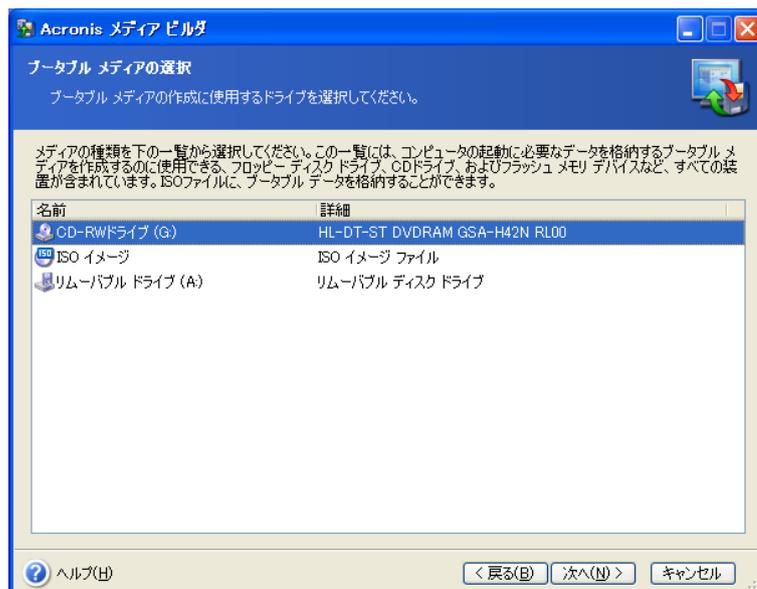


セキュリティ機能を持つ USB フラッシュ メモリでは、USB からコンピュータを起動できません。

USB フラッシュ メモリをブータブル メディアとして使用する場合は、その USB フラッシュ メモリがコンピュータ起動に対応している必要があります。



3.5 インチ フロッピー ディスクを使用する場合、一度にディスク(1 枚またはディスクのセット)に書き込めるのは(たとえば、Acronis True Image Home などの)1 つのコンポーネントのみです。別のコンポーネントを書き込むには、もう一度ブータブル メディア ビルダを実行してください。



4. CD、DVD または他のリムーバブル メディアに作成する場合、空のディスクを挿入すれば、プログラムにより容量が測定されます。ブータブル メディアの ISO イメージの作成を選択した場合、ISO ファイルの名前と保存するフォルダを指定します。
5. 次に、(ISO や、メディアを選択しなかった場合は)必要なディスクの枚数が見積もられ、交換するタイミングで通知されます。終了したら、[実行]をクリックします。

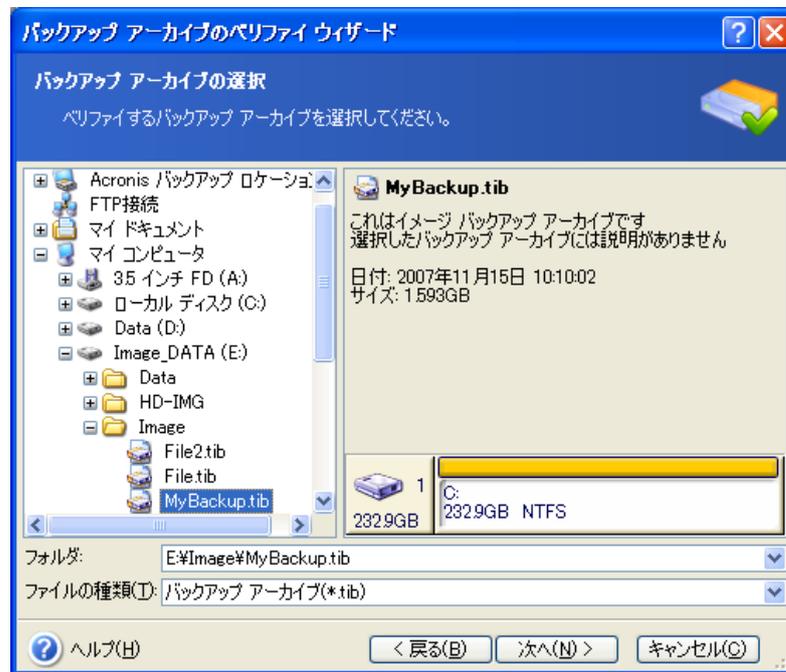
ブータブル メディアを作成したら、識別できるようにラベルを書き、安全な場所に保管してください。

## 第 12 章 そのほかの処理

### 12.1 バックアップ アーカイブのベリファイ

アーカイブが損傷していないことを確認するには、アーカイブの整合性をチェックしてください。チェック作業はスケジュール(第 9 章「タスクのスケジュール」をご参照ください)に従って、または**[バックアップ アーカイブのベリファイ ウィザード]**を起動して実行することができます。

1. **[バックアップ アーカイブのベリファイ ウィザード]**を起動するには、**[操作]**メニューから**[バックアップ アーカイブのベリファイ]**を選択します。
2. チェックするアーカイブを選択します。Acronis セキュア ゾーンとバックアップ ロケーションは、その内容すべてが 1 つのアーカイブとみなされるため、全体としてのみ選択することができます。バックアップ ロケーションの個別のアーカイブは Windows エクスプローラを使用してチェックすることができます。これを行うには、通常のフォルダとしてバックアップ ロケーションを開き、チェックするアーカイブを選択します。次に、アーカイブを右クリックして、コンテキスト メニューから**[バックアップ アーカイブのベリファイ]**を選択します。選択したアーカイブに対して**[バックアップ アーカイブのベリファイ ウィザード]**が起動されます。**[次へ]**をクリックして、操作を続行します。



3. 概要画面で**[実行]**をクリックすると、ベリファイが開始されます。チェックが完了すると、結果のメッセージが表示されます。**[キャンセル]**をクリックするとベリファイを中止できます。



バックアップ アーカイブの整合性をチェックするには、そのバックアップ アーカイブのすべての増分バックアップ ファイルおよび差分バックアップ ファイルと最初の完全バックアップが同じフォルダに存在する必要があります。連続するバックアップにひとつでも抜けがあると、チェックはできません。



複数枚のリムーバブル メディアに保存されたアーカイブをベリファイする場合は、最後のメディアをリムーバブル ドライブにセットし、そのメディアに保存されたアーカイブを選択してください。



ベリファイは、アーカイブから正しくデータを取り出せるのかの確認は行っていません。ベリファイでは、アーカイブ作成時に付加したチェックサムとベリファイ時に再計算したチェックサムが一致するかをチェックしています。



ベリファイを行う場合は、差分バックアップの場合でも増分バックアップの時と同様に、それまでに作成されたすべての差分バックアップが必要となります。差分バックアップを削除している場合は、復元は可能ですがベリファイを実行することはできません。

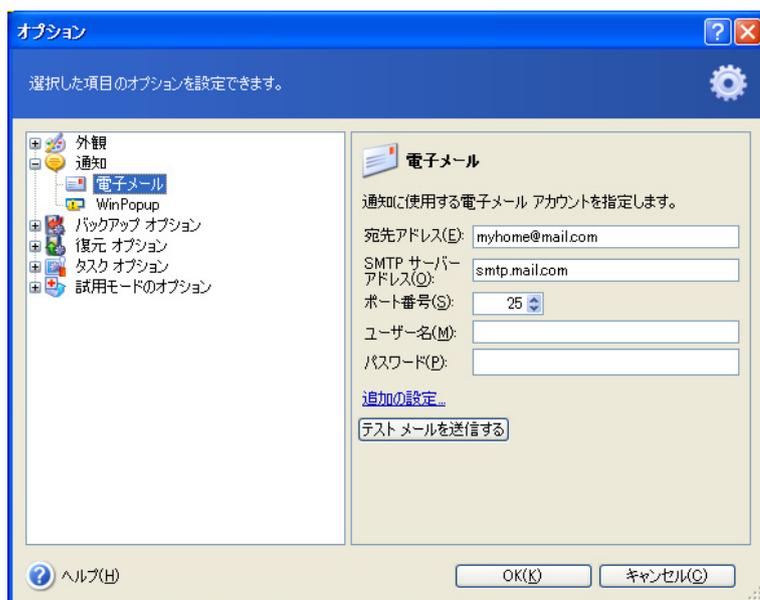
## 12.2 処理結果の通知

バックアップまたは復元の処理に長時間かかることがあります。Acronis True Image Home は処理の終了を WinPopup サービスまたは電子メールにより通知することができます。また、処理中に発行されたメッセージを送信先に通知することや、処理終了後にすべての処理のログを送信することもできます。

デフォルトではすべての通知は無効に設定されています。

### 12.2.1 電子メールによる通知

電子メールによる通知を設定するには、**[ツール]**→**[オプション]**を選択して、表示される**[オプション]**画面から**[通知]**→**[電子メール]**を選択します。



通知の送信先の電子メール アドレスと送信 SMTP サーバー名およびポートを指定します。また、SMTP サーバーで認証が必要な場合は、ユーザー名とパスワードも必要になる可能性があります。



テストメッセージの送信は、**[OK]**をクリックして確定した設定内容で送信します。**[OK]**をクリックする前に送信すると、以前の設定内容でテストメッセージが送信されます。

電子メール通知機能で使用できる SMTP 認証方式は、AUTH-LOGIN と AUTH PLAIN です。

追加の電子メール パラメータを設定するには、**[追加の設定...]**をクリックします。



メッセージを送信する前に、送信 SMTP サーバーが受信メール サーバーにログインする必要がある場合には、受信メール サーバーへのログインに必要な情報を入力してください。

この画面下部で、次のような場合に通知を受信するかどうかを選択することができます。

- － 処理が正常に完了したとき(すべての処理ログをメッセージに追加するには、**[通知にすべてのログを追加する]** チェックボックスをオンにします)。
- － 処理が失敗したとき(すべての処理ログをメッセージに追加するには、**[通知にすべてのログを追加する]** チェックボックスをオンにします)。
- － 処理中にユーザーの対応が必要になったとき。

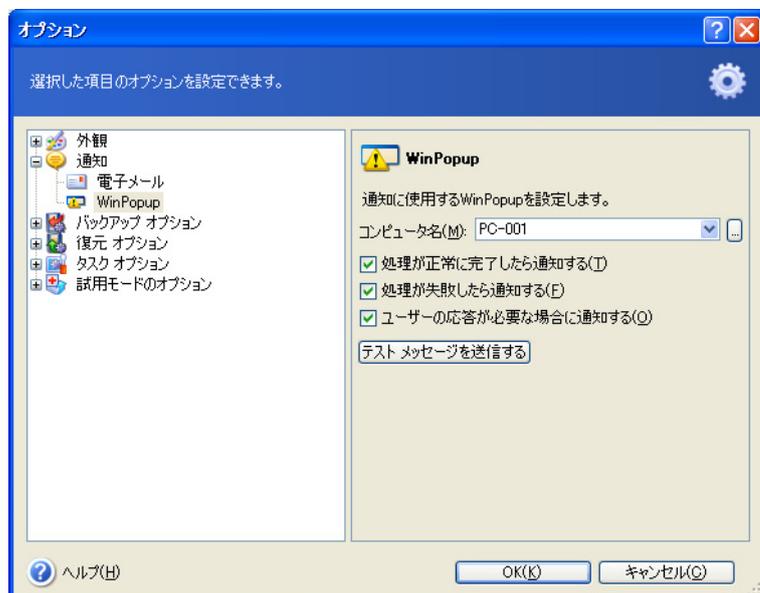
電子メールによる通知を設定した後、テスト メール メッセージを送信することができます。

## 12.2.2 ポップアップウィンドウによる通知

WinPopup による通知を設定するには、**[ツール]**メニューから**[オプション]**を選択して、表示される**[オプション]**画面から**[通知]**→**[WinPopup]**を選択します。



Windows の設定でメッセンジャ サービスが無効になっていると、Win Popup 機能は使用できません。また、Windows Vista では、Win Popup 機能は使用できません。



通知の送信先のコンピュータ名を指定します。

この画面下部で、次のような場合に通知を受信するかどうかを選択することができます。

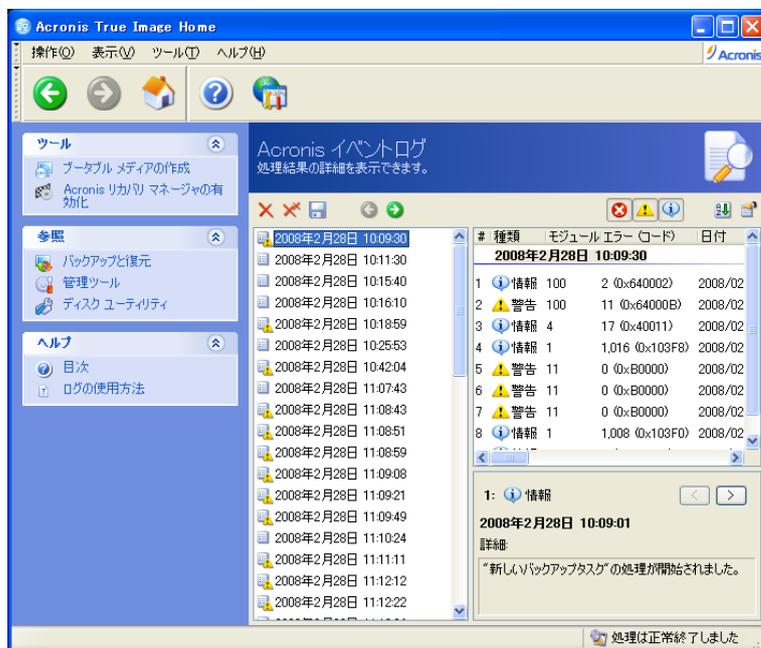
- － 処理が正常に完了したとき。
- － 処理が失敗したとき。
- － 処理中にユーザーの対応が必要になったとき。

## 12.3 ログの表示

Acronis True Image Home では、処理結果を表示できます。この画面には、障害の原因などをはじめ、スケジュールされたバックアップ タスクの結果に関する情報が表示されます。

ログ画面を表示するには、[ツール]メニューから[ログの表示]を選択するか、サイドバーの[ログの表示]をクリックします。

この画面は 2 つのペインで構成されています。左側にログの一覧、右側に選択したログの内容が表示されます。



左側のペインには、最大 50 件のログが表示されます。50 件を超える場合は、[←] ボタンおよび [→] ボタンをクリックすると一覧を参照できます。

ログを 1 件削除するには、削除するログを選択して [選択したログを削除します] アイコンをクリックします。すべてのログを削除するには、[すべてのログを削除します] アイコンをクリックします。ログを保存するアイコンもあります。

エラーが発生して処理が中断された場合は、白抜き X が示された赤い丸印が該当するログに表示されます。

右側の画面には、選択したログに記録されている各処理の一覧が表示されます。右側に表示される 3 つのボタンで、メッセージ フィルタを制御できます。白抜き X が示された赤い丸印をクリックすると、エラー メッセージのみが表示されます。感嘆符が示された黄色の三角印をクリックすると、警告メッセージのみが表示されます。白抜き「i」が示された青い丸印を選択すると、通知メッセージのみが表示されます。

表示する項目 (処理のパラメータ) を選択するには、ヘッダーを右クリックするか、[表示項目の選択] をクリックします。次に、目的のパラメータをチェックします。

特定のパラメータを基準にメッセージを並べ替えるには、その項目のヘッダーをクリックするか (再度クリックすると逆の順序に並べ替えられます)、[アイコンの整理] (右から 2 番目) をクリックして目的のパラメータを選択します。

項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更することもできます。



50 件以下の場合、[←] ボタンおよび [→] ボタンは表示されません。



**【警告】** ログはエラーではありません。たとえばデフォルトのタスク優先度は「低」です。したがってタスクが実行されるとすぐに優先度は「低」に下げられ、**【警告】** ログが記録されます。

また、増分バックアップ作成時に完全バックアップが見つからない場合も、**【警告】** ログが記録されます。

## 第 13 章 アーカイブの参照とイメージのマウント

Acronis True Image Home では、イメージのマウントおよびイメージとファイル レベル アーカイブの参照の 2 つの方法でアーカイブの内容を管理することができます。

**イメージとファイル レベル アーカイブの参照**では、内容の表示、および選択したファイルのハード ディスクへのコピーを行うことができます。

**イメージを仮想ドライブとしてマウント**すると、ディスク/パーティション イメージにドライブ文字を割り当てて、物理ドライブのようにファイルにアクセスできます。これにより、次のことが行えます。

- 固有のドライブ文字が割り当てられた新しいハード ディスクがドライブ一覧に表示される。
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャを使用して、物理ディスクやパーティション上にある場合と同じようにイメージの内容を表示できる。
- 仮想ディスクを次のような物理ディスクと同じ方法で使用することができる。ファイルまたはフォルダの、オープン(開く)、保存、コピー、移動、作成、削除。必要な場合は、イメージを読み取り専用モードでマウントすることができる。

ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージのどちらにも、".tib"拡張子が付いていますが、マウントできるのはディスク/パーティション イメージのみです。ファイル アーカイブの内容を参照するには、参照処理が必要です。**[イメージのマウントウィザード]**がメイン メニューから起動されている場合、バックアップ ロケーションに保存されているイメージはマウントできません。ただし、このようなイメージは、Windows エクスプローラからイメージ アーカイブを右クリックし、表示されたコンテキスト メニューで**[マウント]**を選択してマウントすることができます。参照とマウントの概要は次のとおりです。

	アーカイブの参照	イメージのマウント
アーカイブの種類	ファイル レベル、ディスク イメージ またはパーティション イメージ	ディスク イメージまたは パーティション イメージ
ドライブ文字の割り当て	不可	可
アーカイブの変更	不可	可(書き込み可能モード)
ファイルの取り出し	可	可
バックアップ ロケーションの サポート	可	不可



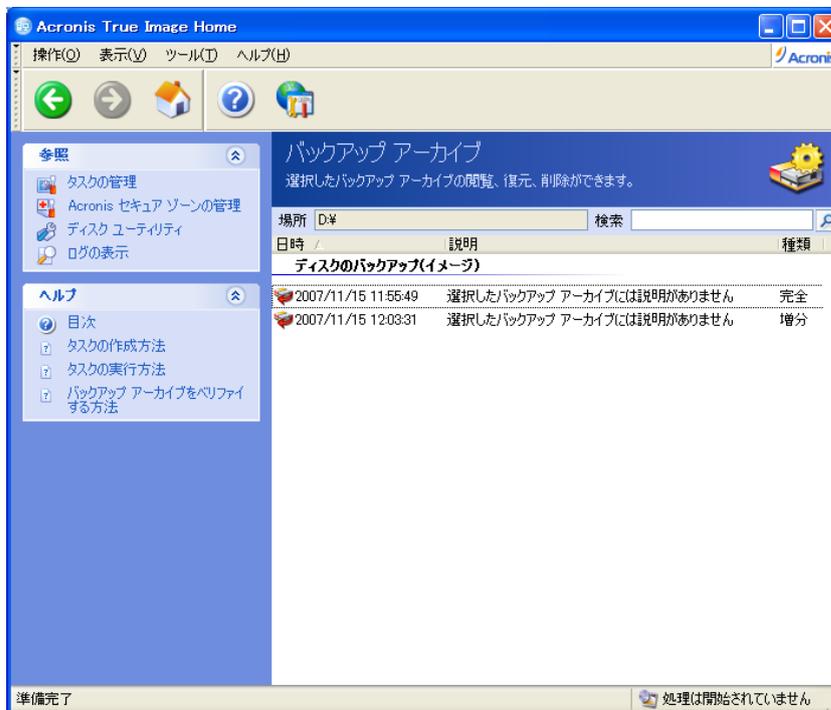
Acronis True Image Home では、同一のディレクトリ内にイメージ アーカイブの全てのボリュームが置かれている場合にのみイメージ アーカイブをマウントまたは参照することができます。アーカイブが何枚かの、CD-R/RW ディスクに分割されている場合は、全てのボリュームをハード ディスクドライブ、またはネットワーク上の共有フォルダ(の同一ディレクトリ)にコピーする必要があります。



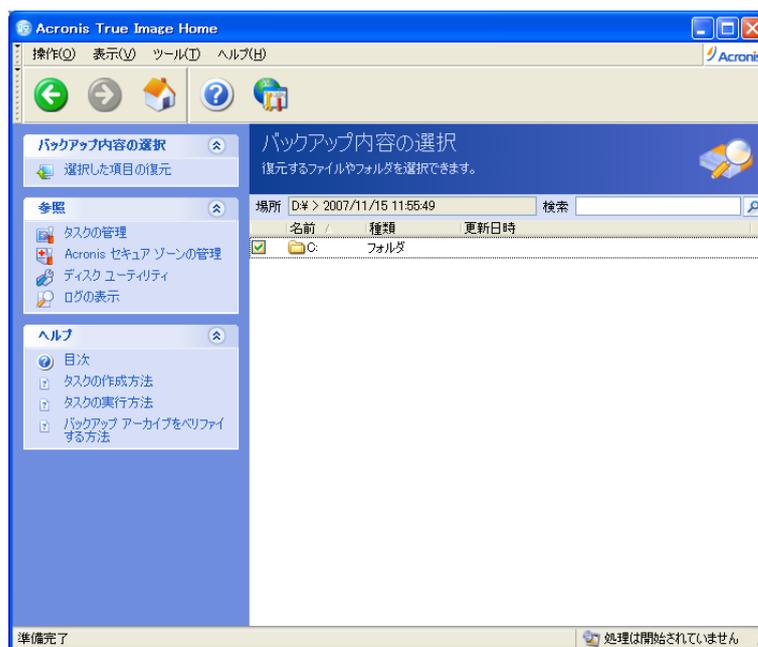
Windows Vista では、デフォルトでユーザー アカウント制御(UAC)機能が有効になっています。そのため、異なるユーザーの作成したアーカイブを参照することはできません。

## 13.1 アーカイブ内のファイルの検索

1. [ツール]メニューから[管理]→[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]を選択して、[Acronis バックアップ ロケーション]画面に移動します。または、メイン プログラム ウィンドウの[管理ツール]カテゴリを選択して、[メイン]グループの[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]をクリックします。
2. [Acronis バックアップ ロケーション]画面でバックアップ ロケーションを選択して、サイドバーの[Acronis バックアップ ロケーションの参照]をクリックするか、選択したバックアップ ロケーションをダブルクリックします。



3. バックアップ ロケーションの内容を表示する[バックアップ アーカイブ]画面が表示されます。バックアップ アーカイブは、バックアップの種類ごとにグループ分けされています。サイドバーの[バックアップの内容の表示]をクリックするか、選択したアーカイブをダブルクリックすると、選択したアーカイブの内容を表示できます。



4. 選択したアーカイブの内容が表示されます。参照したアーカイブからファイルやフォルダをいくつでも選択して復元できます。



増分バックアップからデータを復元するには、以前に作成したすべての増分バックアップと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップのいずれか 1 つでも存在しない場合、復元はできません。差分バックアップからデータを復元するには、最初の完全バックアップも必要です。

次の方法でも、復元する個別のファイルを検索することができます。

1. **[ツール]**メニューから**[管理]**→**[Acronis バックアップ ロケーションとアーカイブの管理]**を選択して、**[Acronis バックアップ ロケーション]**画面を開きます。
2. すべてのバックアップ ロケーション(FTP サーバーおよびネットワーク共有ディスク上に作成されたものを含む)からファイルを検索する場合、**[検索]**でファイル名を入力して**[検索]**ボタン(拡大鏡アイコン)をクリックします。  
ファイル名の一部を入力することもできます。たとえば、「report」と入力した場合、「report」という文字列を含む名前のファイルがすべて検索されます。  
検索が開始されると、検索エリアに X 印のアイコンが新しく表示されます。このアイコンをクリックすれば、検索はいつでも停止できます。見つかったファイルは順次、**[検索結果]**画面に表示されます。



検索結果の項目は同時に複数選択することはできません。項目の上にマウス カーソルを重ねると、ファイルが保存されているロケーションへのフルパスが表示されます。

次に、選択したファイルを復元できます。復元するには、サイドバーの**[バックアップに含まれているファイルを開く]**をクリックするか、選択したファイルをダブルクリックします。**[バックアップ内容の選択]**画面が開き、このファイルが含まれるバックアップの内容が表示されます。このファイルはマーク付で表示されます。ファイルを復元するには、**[バックアップ内容の選択]**グループの**[選択した項目の復元]**をクリックします。

必要に応じて、別の方法でファイルを復元することができます。Windows エクスプローラでファイルを右クリックして、コンテキスト メニューの**[バックアップ アーカイブの検索]**を選択します。Acronis True Image Home によって、バックアップ ロケーションからそのファイルの保存されているバージョンが検索され、結果が**[検索結果]**画面に表示されます。必要なバージョンのファイルを日付で選択し、サイドバーの**[バックアップの内容の表示]**と**[選択した項目の復元]**を順にクリックしてファイルを復元することができます。

## 13.2 イメージのマウント

1. **[操作]**メニューから**[イメージのマウント]**を選択するか、Windows エクスプローラでイメージ アーカイブを右クリックし、コンテキストメニューの**[マウント]**を選択して、**[イメージのマウント ウィザード]**を起動します。
2. ドライブ ツリーからアーカイブを選択します。アーカイブが Acronis セキュア ゾーンにある場合は、そのセキュアゾーンを選択し、次の手順でアーカイブを選択します。

Acronis バックアップ ロケーションはマウント操作をサポートしていないため、**[Acronis バックアップ ロケーション]**画面で表示されません。ただし、イメージがバックアップ ロケーションに保存されている場合、ツリーから通常のフォルダとしてこのロケーションを選択して、マウントするイメージを選択できます。



アーカイブにコメントを追加した場合は、コメントがドライブ ツリーの右側に表示されます。アーカイブがパスワードで保護されている場合は、Acronis True Image Home ではパスワードの入力が求められます。正しいパスワードが入力されるまで、パーティション レイアウトおよび**[次へ]**ボタンは有効になりません。

3. 増分イメージを含むアーカイブが選択された場合には、そのアーカイブの作成された日付と時刻を参考に、連続している増分イメージの 1 つ(「スライス」とも呼ばれます)を選択します。このようにして、データの状態を特定の時点に戻すことができます。

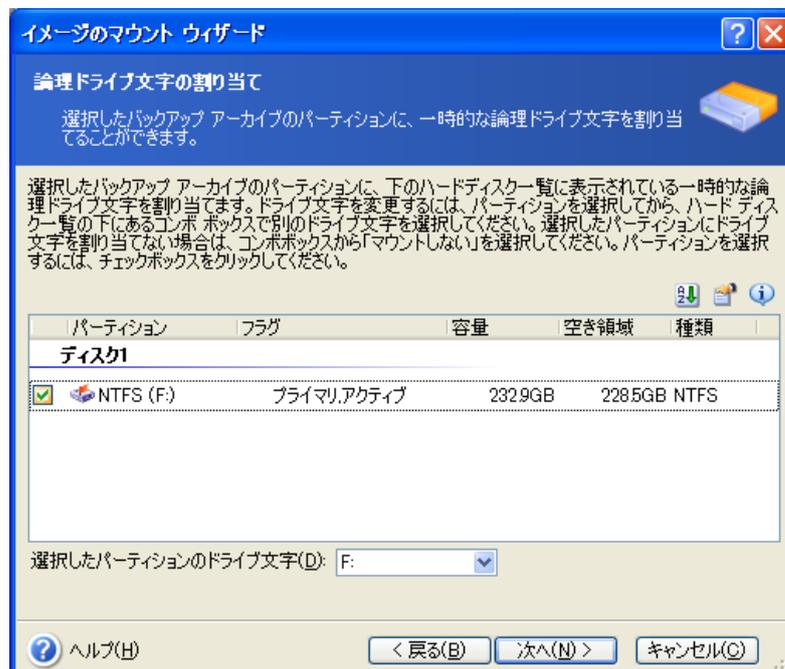


増分イメージをマウントするには、以前に作成したすべての増分イメージと最初の完全イメージが必要です。いずれかの連続イメージが 1 つでも存在しない場合、マウントはできません。

差分イメージをマウントするには、同じフォルダに最初の完全イメージが存在することも必要です。

4. 仮想ディスクとしてマウントするパーティションを選択します。(ディスクが 1 つのパーティションとして構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません。)

仮想ディスクに割り当てる文字は、**[選択したパーティションのドライブ文字]**ドロップダウン リストから選択することができます。仮想ドライブにドライブ文字を割り当てない場合は、リストから**[マウントしない]**を選択します。



5. イメージを**読み取り専用**モードでマウントするか、**書き込み可能**モードでマウントするかを選択します。
6. **[書き込み可能モードでマウントする]**を選択した場合、プログラムは接続しているイメージが変更されるものと仮定して、変更を取り込むために増分アーカイブ ファイルを作成します。このファイルのコメントに変更予定を入力するよう強くお勧めします。
7. 単一の操作だけを含む概要画面が表示されます。**[実行]**をクリックすると、選択したパーティション イメージが仮想ディスクとして接続されます。
8. イメージが接続されると、Windows エクスプローラで、仮想ディスクの内容が表示されます。これで、ファイルまたはフォルダが実際のディスク上にあるかのように作業することができます。

複数のパーティション イメージをマウントすることができます。別のパーティション イメージをマウントする場合は、手順を繰り返してください。

### 13.3 イメージのマウント解除

必要な操作を終了したら、仮想ディスクをマウント解除してください。仮想ディスクを維持するためにシステムのリソースを大量に消費するからです。そうしない場合は、コンピュータの電源を切った後(再起動すると)、仮想ディスクは表示されなくなります。

仮想ディスクを切断するには、**[イメージのマウント解除]**を選択し、マウント解除するディスクを選択します。Windows エクスプローラでディスクを右クリックし、**[マウント解除]**を選択しても、仮想ディスクを切断することができます。

## 第 14 章 新しいディスクへのシステムの転送(ディスクのクローン作成)

### 14.1 概要

多くの場合、コンピュータの使用に従ってハード ディスクの容量が不足してきます。データ用の領域がなくなった場合は、次の章で説明するように、データ ストレージ専用で別のディスクを追加することができます。

一方で、ハード ディスク上に割り当てられたオペレーティング システムとインストール済みアプリケーション用の領域が不足すると、ソフトウェアを更新することもインストールすることもできなくなります。この場合は、システムを大容量のハード ディスクに移行する必要があります。

システムを転送するには、まずコンピュータにディスクを設置する必要があります(詳細については、付録 B「ハード ディスクおよび BIOS セットアップ」をご参照ください)。コンピュータに別のハード ディスク用のベイがない場合は、一時的に CD ドライブを取り外してディスクを設置するか、または USB 2.0 を使用して外部ディスクに接続することができます。この方法が使用できない場合は、ハード ディスクのイメージを作成し、新しいハード ディスクにそのイメージをより大きなパーティションで復元することでハード ディスクのクローンを作成してください。



イメージを作成したハード ディスクとサイズが異なるハード ディスクへ復元する場合は、パーティション単位で復元を実行してください。ディスク全体で復元を実行すると、未割り当て領域が作成されます。

自動モードおよび手動モードの 2 つのクローン方法を使用できます。

自動モードでは、いくつかの簡単な操作を行うだけで、パーティション、フォルダ、およびファイルを含むすべてのデータを新しいディスクに転送することができます。元のディスクが起動用ディスクだった場合は、新しいディスクが起動用ディスクになります。

2 つのディスクの違いは、新しいディスクのパーティションの方が大きい、という点のみです。インストールされたオペレーティング システム、データ、ディスク ラベル、設定、およびソフトウェアをはじめとするディスク上のすべてが同じとなります。



自動モードでは、データの転送のみが実行されます。つまり、このプログラムでは、新しいディスクへの元のディスクレイアウトの複製しか行われません。このほかの作業を行うには、クローン作成パラメータに関する追加の設定を必要があります。

手動モードで実行すると、さまざまなデータ転送に対応できます。

#### 1. パーティションおよびデータの転送方法を次の中から選択

- 現状のまま
- 新しいディスク領域を移行先のサイズにあわせて配分する
- 新しいディスク領域を手動で配分する

#### 2. 元のディスクに対して実行する操作を次の中から選択

- 元のディスクにパーティション(およびデータ)を残す
- 元のディスクからすべての情報を削除する
- 元のディスクに(古い情報はすべて削除して)新しいパーティションを作成する



プログラムの画面では、損傷したパーティションには、左上隅に白抜きの X が示された赤い丸印が表示されます。クローン作成を開始する前に、適切なオペレーティング システムのツールを使用して、ディスクのエラーの有無をチェックしてください。

## 14.2 安全のために

転送の実行中電源が切れたり、誤ってリセットボタンを押したりすると処理が完了しません。この場合には、再度パーティションを作成してフォーマットするか、ハード ディスクのクローンを再び実行する必要があります。

転送元のディスクは、転送が完了するまでデータの読み取りのみ(パーティションの変更やサイズ変更は行われません)が行われているので、データが失われることはありません。

新しいディスクにデータが正しく転送され、新しいディスクからコンピュータを起動してすべてのアプリケーションが動作することを確認するまでは、転送元のディスクからデータを削除しないことをお勧めします。



異なるインターフェイスに接続されたディスクへシステム パーティションを含むディスクのクローンを行うことは出来ません。クローン完了後、クローンされたハード ディスクはクローン元と同じインターフェイスに接続してシステムの起動を行う必要があります。データのみのクローンの場合は、異なるインターフェイスでも可能です。

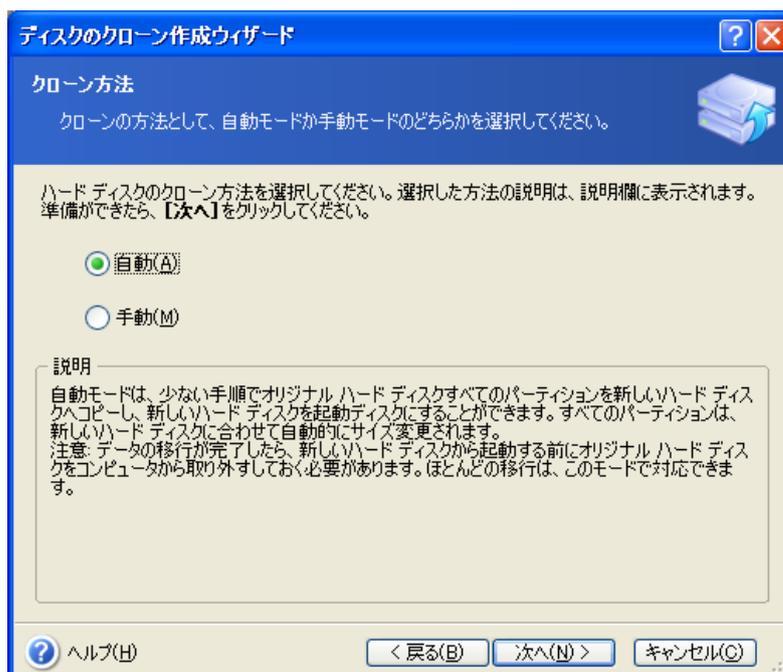
## 14.3 ディスクのクローン作成の実行

### 14.3.1 クローン方法の選択



[**ディスクのクローン作成ウィザード**]を起動するには、メイン プログラム ウィンドウの[**ディスク ユーティリティ**]カテゴリを選択して、[**ハード ディスク ユーティリティ**]グループにある[**ディスクのクローン作成**]をクリックするか、[**ツール**]メニューから[**ディスクのクローン作成**]を選択すると、[**ディスクのクローン作成ウィザード**]が表示されます。

最初の画面に続いて、クローン方法を選択する画面が表示されます。

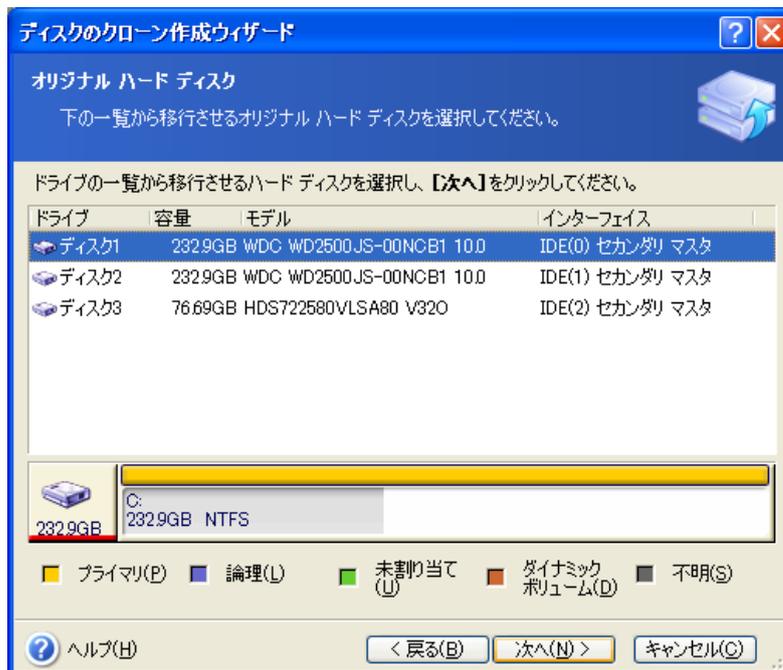


自動モードを使用することをお勧めします。手動モードは、ディスク パーティションのレイアウトの変更を必要とする場合に役立ちます。

パーティションが作成されているディスクと作成されていないディスクの 2 つのディスクを検出すると、プログラムは、パーティションが作成されているディスクを移行元ディスク、作成されていないディスクを移行先ディスクとして自動的に認識するため、次の 2 つの手順が省略されます。

### 14.3.2 オリジナル ハード ディスクの選択

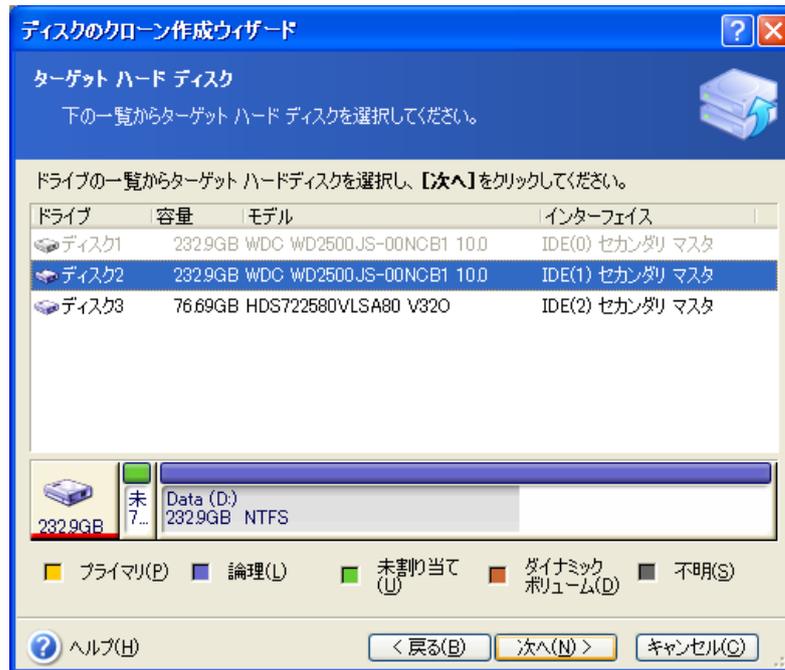
プログラムがパーティションを持つ複数のディスクを検出すると、オリジナル ハード ディスク(移行元)を指定する画面が表示されます。



この画面に表示される情報(ディスク番号、容量、ハード ディスク型番、パーティション、およびファイル システムの情報)を参照して、移行元と移行先を決定してください。

### 14.3.3 ターゲット ハード ディスクの選択

オリジナル ハード ディスクを選択後、ディスク情報のコピー先となるターゲット ハード ディスク(移行先)を選択する画面が表示されます。



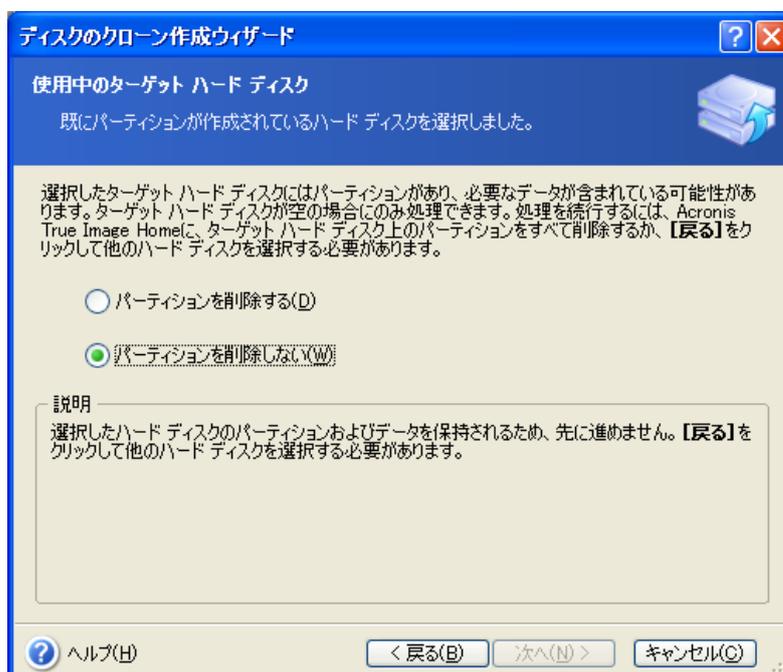
**[オリジナル ハード ディスク]**画面で移行元として選択したディスクは淡色表示され、ここでは選択できないようになっています。



ディスクにパーティションが作成されていない場合は、プログラムは、自動的にそのディスクを移行先と認識し、この手順は省略されます。

### 14.3.4 使用中のターゲット ハード ディスク

ターゲット ハード ディスクが未使用ではない場合は、**【使用中のターゲット ハード ディスク】**画面が表示されます。ターゲット ハード ディスクにデータが格納されているパーティションがあるため、最初にそのパーティションを削除する必要があります。



次のどちらかを選択します。

- **【パーティションを削除する】** — クローン作成時に既存のパーティションがすべて削除され、そのデータがすべて消去されます。
- **【パーティションを削除しない】** — 既存のパーティションは削除されませんが、クローン作成処理が中断されます。この場合は処理をキャンセルし、別のディスクの選択に戻ります。

クローン作成を続行するには、上のオプションを選択して**【次へ】**をクリックします。



この時点では、実際の変更やデータ消去は行われません。ここで行われるのは、クローン作成の計画だけです。すべての変更が実行されるのは、**【実行】**がクリックされたときだけです。

### 14.3.5 オリジナル ハード ディスクおよびターゲット ハード ディスクのパーティション レイアウト

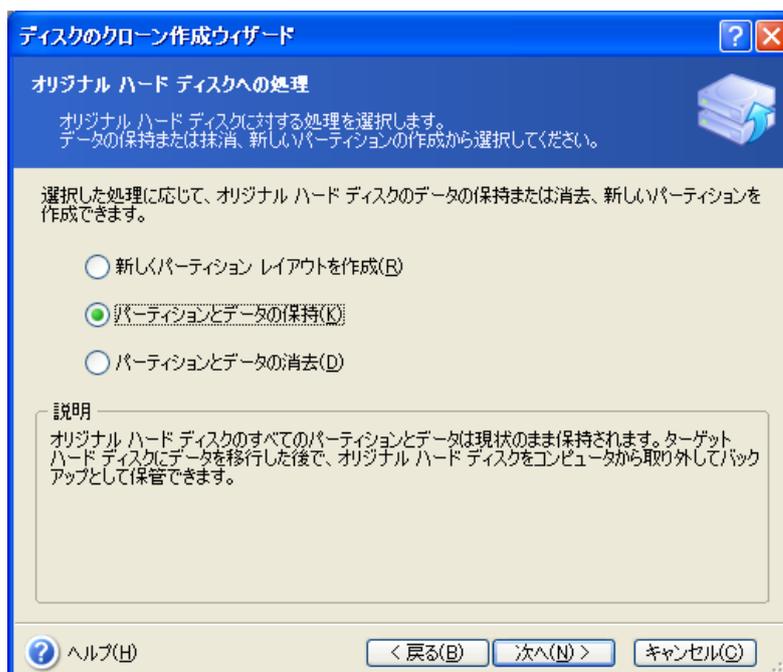
自動モードを選択した場合、次の手順は自動的に実行されます。オリジナル ハード ディスク(パーティションと未割り当て領域)とターゲット ハード ディスクのレイアウトに関する情報が、図表形式(四角形)で画面に表示されます。ディスク番号とともに追加情報(ディスク容量、ディスク ラベル、パーティションおよびファイル システム情報)が表示されます。パーティションの種類(プライマリ、論理)と未割り当て領域は、それぞれ異なる色で表示されます。

手順の最後に、クローン作成の概要画面が表示されます。

### 14.3.6 オリジナル ハード ディスクへの処理

手動モードを選択している場合は、元のディスクであるオリジナル ハード ディスクへの処理を選択する画面が表示されます。

- **[新しくパーティション レイアウトを作成]** — 既存のすべてのパーティションとデータを削除して、新しいパーティションを作成します(ただし、オリジナル ハード ディスクのデータはクローン処理により、ターゲット ハード ディスクへコピーされます)。
- **[パーティションとデータの保持]** — オリジナル ハード ディスクのパーティションおよびデータがそのまま残されます。
- **[パーティションとデータの消去]** — オリジナル ハード ディスクからパーティションおよびデータが削除されます。



オリジナル ハード ディスクを売却または譲渡する場合、ディスクのデータの消去を確認することをお勧めします。

このディスクをデータ保存用として使用する場合、新しいパーティション レイアウトを作成できます。この場合、ディスクはクローン作成の完了直後から使用できます。

古いデータはクローン処理が成功したことを確認した後も削除できるため、不測の事態に対処できるように、元のディスク データはそのまま残しておくことをお勧めします。

### 14.3.7 オリジナル ハード ディスク データの消去

**[オリジナル ハード ディスクへの処理]** 画面で**[パーティションとデータの消去]**を選択した場合は、抹消方式を選択します。

- **[高速]** — すべてのデータを 1 工程で消去します。
- **[通常]** — 複数工程で消去します。

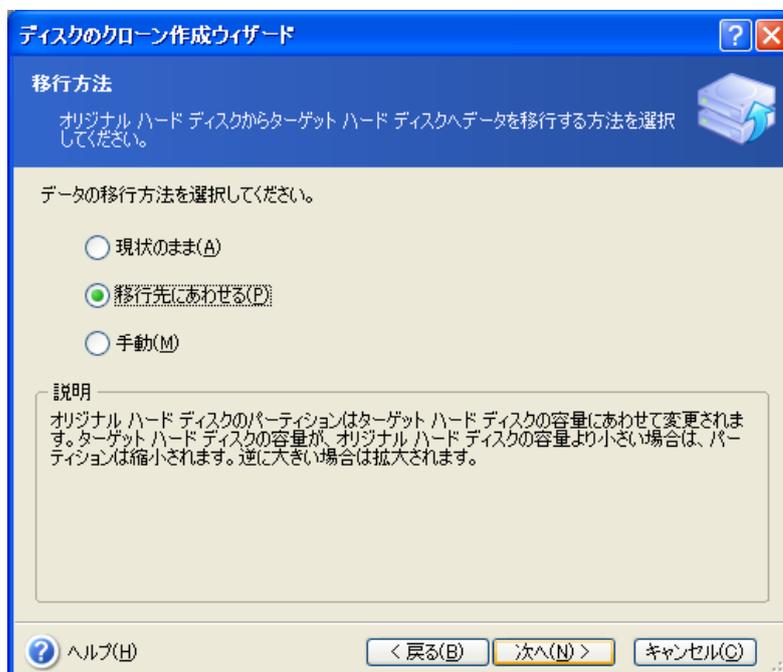
**[通常]**は実行に時間がかかりますが、特殊な装置を使用してもデータの修復は不可能になります。

**[高速]**は安全性が高くありませんが、ほとんどの場合この方法でも十分です。

### 14.3.8 移行方法

Acronis True Image Home で提供されているデータの移行方法は次の 3 種類です。

- **【現状のまま】**
- **【移行先にあわせる】** — ターゲット ハード ディスクの領域が、そのハード ディスクのサイズにあわせて配分されます。
- **【手動】** — 新しいサイズとそのほかのパラメータを独自に指定します。



**【現状のまま】**を選択して情報を転送すると、同じサイズ、種類、ファイル システムおよびラベルが指定された新しいパーティションが、元のディスクごとに作成されます。使用していない領域は未割り当てとなります。未割り当て領域は、新しいパーティションを作成したり、Acronis Disk Director などの特別なツールを使用して、既存のパーティションを拡張したりするために使用できます。

通常、**【現状のまま】**でデータを転送すると、新しいディスクに未割り当て領域が多く残るため、お勧めできません。**【現状のまま】**を使用すると、Acronis True Image Home は、サポートされていないファイル システムおよび損傷したファイル システムも転送します。

移行先にあわせてデータを転送すると、各パーティションが、元のディスク容量と新しいディスク容量の比率に応じて拡張されます(拡張の際には、Acronis True Image が自動的にブート ロードを書き換えます)。

FAT16 のパーティションはサイズに 4GB の制限があるため、拡張される比率もほかに比べて小さくなります。

**【オリジナル ハード ディスクへの処理】**画面で**【新しくパーティション レイアウトを作成】**を選択すると、**【ハード ディスクの構成】**画面と**【新しいパーティション】**画面が表示されます。それ以外の場合は、**【ハード ディスクの構成】**画面が表示されます。

### 14.3.9 新しいパーティション

**【オリジナル ハード ディスクへの処理】**画面で**【新しくパーティション レイアウトを作成】**を選択した場合、**【新しいパーティション】**画面が表示されます。この画面では、オリジナル ハード ディスクのパーティションの構成を再設定します。

この手順中に、現在のディスク パーティション レイアウトが表示されます。始めてこのレイアウトを表示したときには、ディスク領域がすべて未割り当ての状態になっています。新しくパーティションを作成すると、この表示が変更されます。

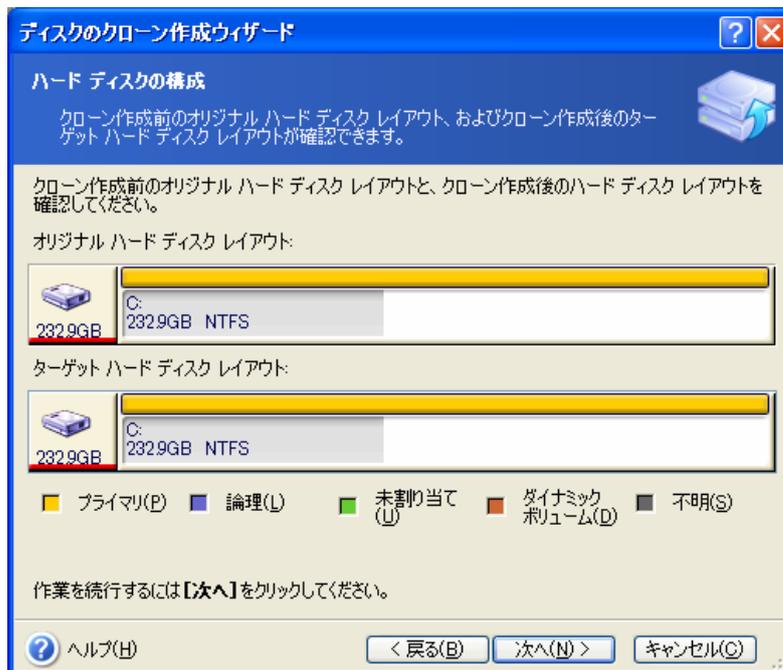
この手順が完了すると、新しいパーティションが追加されます。別のパーティションを作成する場合は、これらの手順を繰り返します。

パーティションの設定をやり直す場合は、**【戻る】**をクリックします。

必要なパーティションの作成が完了したら、**【パーティションを作成する】**チェックボックスをオフにして、**【次へ】**をクリックします。

### 14.3.10 ハード ディスク構成

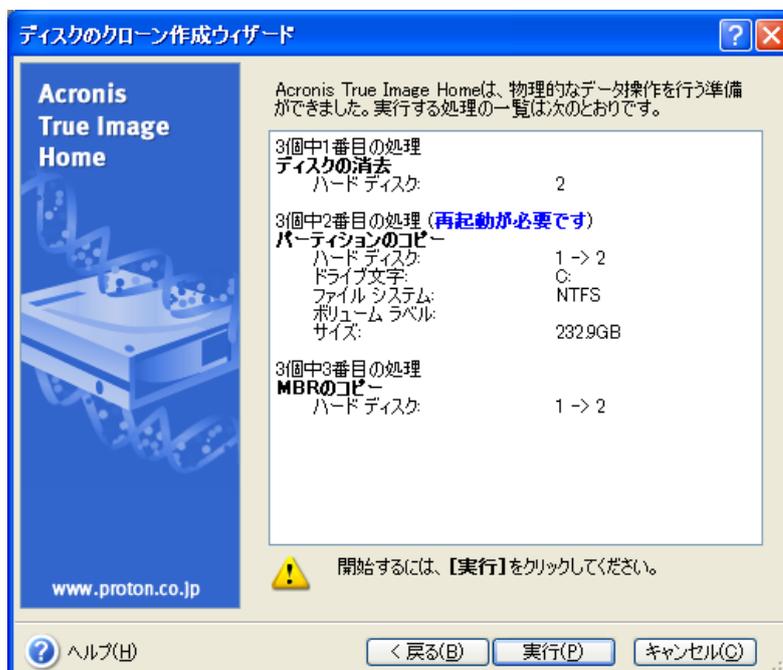
[ハード ディスクの構成]画面では、オリジナル ハード ディスクとターゲット ハード ディスクのパーティション レイアウトが表示されます。



それぞれの項目にマウス カーソルを合わせると、ディスク番号、ディスク容量、ボリューム ラベル、およびファイル システム情報がポップ アップで表示されます。パーティションの各種類(プライマリ、論理)と未割り当て領域は、それぞれ異なる色で表示されます。

### 14.3.11 クローン作成の概要

クローン作成の概要画面では、クローンで実行される処理が一覧として簡単に説明されています。



現在アクティブになっているオペレーティング システムを含んだディスクのクローン作成には、再起動が必要です。この場合は、【実行】をクリックすると、再起動するように求められます。再起動をキャンセルすると、クローン作成処理はキャンセルされます。クローン処理の完了後、コンピュータをシャットダウンすることができます。シャットダウン後、ハードディスクを取り外し、必要であればマスタスレープのジャンパ位置を変更することができます。

システム ディスクではないディスク、または現在アクティブになっていないオペレーティング システムを含んだディスクのクローン作成の場合は、再起動の必要はありません。**[実行]**をクリックすると、Acronis True Image Home によってターゲット ハード ディスクへ、オリジナル ハード ディスクのクローン作成が開始され、別の画面に進行状況が表示されます。**[キャンセル]**をクリックすると、この処理は中断されます。キャンセルした場合は、新しいディスクにパーティションを再作成してフォーマットするか、クローン作成の手順を繰り返してください。クローン操作が完了すると、結果のメッセージが表示されます。



**[Congratulation ! ...press any key to shut down]**というメッセージが表示されましたら、クローンが完了になります。



システム パーティションを含むディスクのクローンを実行した場合は、クローン完了後にオリジナル ハード ディスクを取り外して、ターゲット ハード ディスクをオリジナル ハード ディスクが接続されていたインターフェイスに接続してから電源を入れて下さい。



オリジナル ハード ディスクは安全な場所に保管することもできます。



**[キャンセル]**をクリックした場合、処理を途中まで進行しているため、ターゲット ハード ディスクはパーティションを再作成するか、またはフォーマットする必要があります。

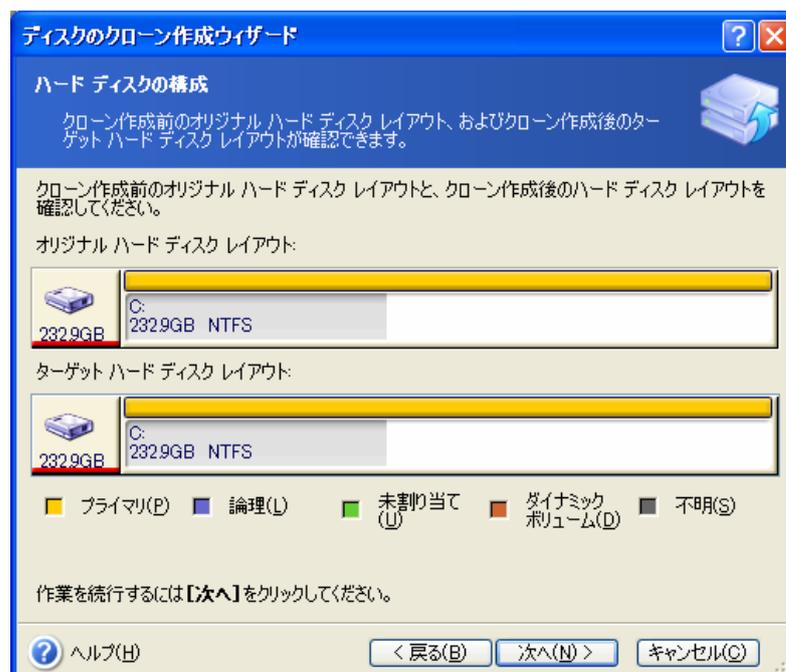
## 14.4 手動パーティショニングによるクローン作成

### 14.4.1 手動によるレイアウトの確認

**[移行方法]**画面で**[手動]**を選択した場合、**[手動によるレイアウトの確認]**画面が表示され、ターゲット ハード ディスクのパーティション サイズを変更できます。ターゲット ハード ディスクの容量に応じて、自動的にパーティション サイズの比率を調整します。

**[手動によるレイアウトの確認]**画面では、オリジナル ハード ディスクとターゲット ハード ディスクのパーティション レイアウトが表示されます。

それぞれの項目にマウス カーソルを合わせると、ディスク番号、ディスク容量、ボリューム ラベル、およびファイル システム情報がポップ アップで表示されます。パーティションの各種類(プライマリ、論理)と未割り当て領域は、それぞれ異なる色で表示されます。



パーティション サイズを変更するには、**[レイアウト変更を行う]**チェックボックスをオンにして、**[次へ]**をクリックします。パーティション レイアウト構成の変更が必要ない、または、変更が完了した場合は、**[レイアウト変更を行う]**チェックボックスをオフにして、**[次へ]**をクリックします。クローン作成の概要画面が表示されます。



**【手動によるレイアウトの確認】**画面で**【戻る】**をクリックすると、サイズと位置の変更内容がすべて破棄されるため、再設定する必要があります。

**【パーティションの選択】**画面では、パーティション サイズや位置を変更するパーティションを選択します。選択したパーティションには、赤い下線が表示されます。

**【次へ】**をクリックすると、**【サイズと位置】**画面が表示され、パーティションのサイズおよび位置が変更可能となります。

**【前方の未割り当て領域】**、**【パーティション サイズ】**、**【後方の未割り当て領域】**の各フィールドに値を入力するか、パーティションの境界またはパーティション自体をドラッグすると、パーティションのサイズおよび位置が変更できます。

パーティションの境界にマウス カーソルを置くと、左右に矢印が付いた縦の二重線に変化します。この二重線をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。パーティション上にマウス カーソルを置くと、4 方向の矢印に変化し、パーティションを左右に移動できるようになります(未割り当て領域がない場合は、パーティションの移動はできません)。

パーティションを新しい位置とサイズに変更したら、**【次へ】**をクリックします。**【手動によるレイアウトの確認】**画面に戻ります。目的のレイアウトになるまで、手順を繰り返す必要があります。



**【手動によるレイアウトの確認】**画面では、パーティションの位置とサイズを変更できるのみで、新しいパーティションを作成することはできません。

## 第 15 章 新しいハード ディスクの追加

データを保存するためにハード ディスクに十分な空き領域がない場合は、古いハード ディスクを大容量の新しいハード ディスクに交換するか(新しいハード ディスクへのデータの転送については前の章で説明しています)、システム用に古いハード ディスクを残して、データの保存用として新しいハード ディスクを追加することができます。コンピュータにハード ディスクを増設する空きがあれば、システム ディスクのクローンを作成するよりも、データの保存用として新しいハード ディスクを追加の方が簡単です。

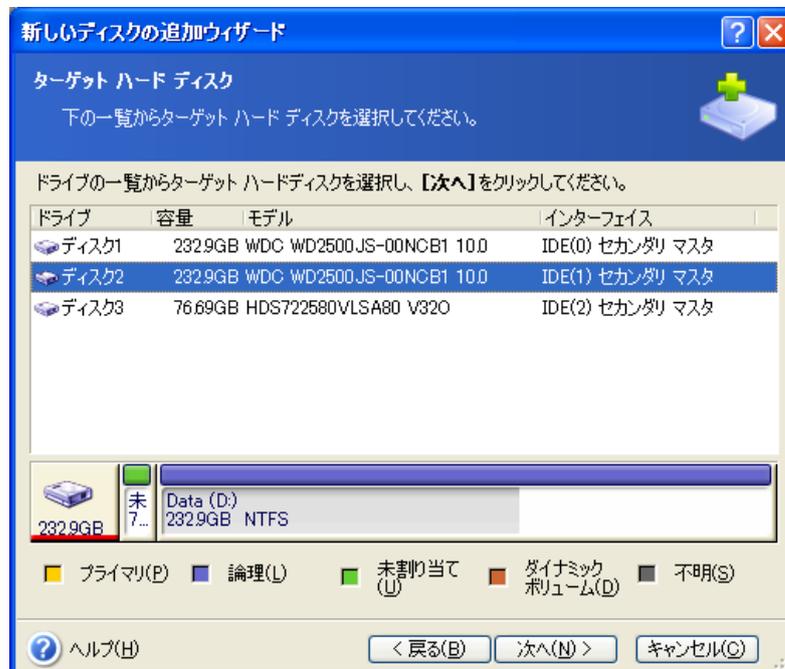
新しいハード ディスクを追加するには、まずコンピュータにハード ディスクを増設する必要があります。この作業は比較的簡単ですが、ハード ディスクの増設には専門知識が必要なため、慣れた方が作業することをお勧めします。

### 15.1 ハード ディスクの選択



[新しいディスクの追加ウィザード]を起動するには、メイン プログラム ウィンドウから[ディスク ユーティリティ]を選択して、[ハード ディスク ユーティリティ]グループにある[新しいディスクの追加]をクリックするか、[ツール]メニューから[新しいディスクの追加]を選択すると、[新しいディスクの追加ウィザード]が表示されます。

[ターゲット ハード ディスク]画面で、コンピュータに追加したハード ディスクを選択して、[次へ]をクリックします。



プログラムが新しいハード ディスクを自動的に検出した場合、この画面が表示されない場合があります。その場合は、15.2 新しいパーティションの作成に進んでください。

新しいハード ディスクに既存のパーティションが存在する場合は、最初にそのパーティションを削除する必要があります。**[パーティションを削除する]**を選択し、**[次へ]**をクリックします。

## 15.2 新しいパーティションの作成

**【新しいパーティション】**画面では、現在のディスク パーティション レイアウトが表示されます。始めてこのレイアウトを表示したときには、ディスク領域がすべて未割り当ての状態になっています。新しくパーティションを作成すると、この表示が変更されます。

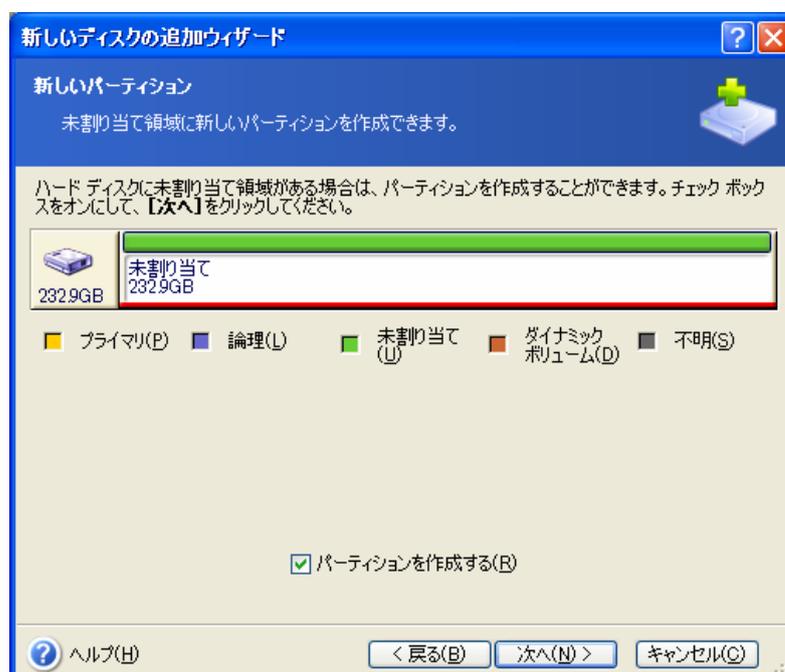
パーティションを作成するには、**【パーティションを作成する】**チェックボックスをオンにして**【次へ】**をクリックします。

**【サイズと位置】**画面で、パーティション サイズおよび位置が設定できます。

**【前方の未割り当て領域】**、**【パーティション サイズ】**、**【後方の未割り当て領域】**の各フィールドに値を入力するか、パーティションの境界またはパーティション自体をドラッグすると、パーティションのサイズおよび位置が変更できます。

パーティションの境界にマウス カーソルを置くと、左右に矢印が付いた縦の二重線に変化します。この二重線をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。パーティション上にマウス カーソルを置くと、4 方向の矢印変化し、パーティションを左右に移動できるようになります(未割り当て領域がない場合は、パーティションの移動はできません)。**【次へ】**をクリックすると、新しいパーティションのボリューム ラベルを入力することができます。

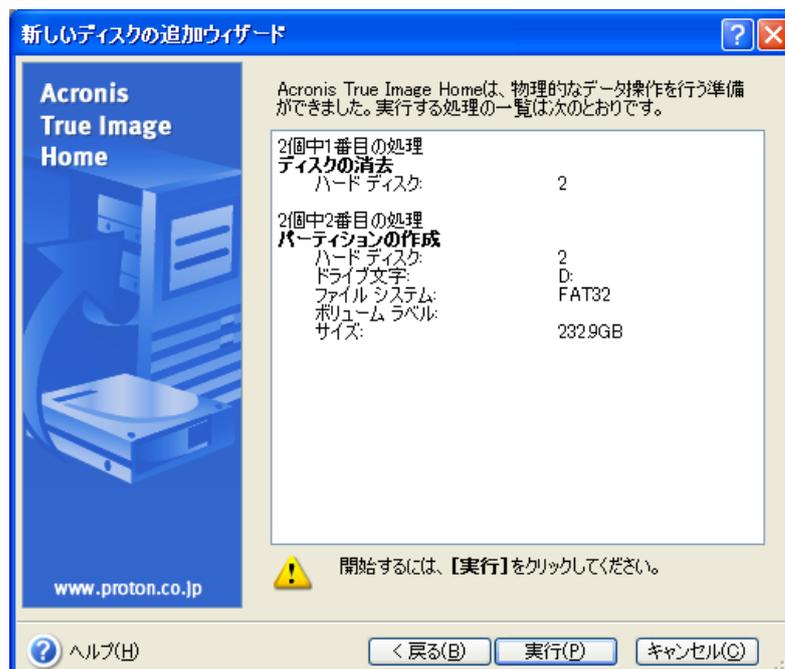
パーティションの設定をやり直す場合は、**【戻る】**をクリックします。



ボリューム ラベルの入力が完了すると、**【新しいパーティション】**画面に戻ります。必要なパーティションの作成が完了したら、**【パーティションを作成する】**チェックボックスをオフにして、**【次へ】**をクリックします。

## 15.3 ディスクの追加の概要

新しいディスクの追加の概要画面では、新しいディスクの追加で実行される処理が一覧として簡単に説明されています。



**【実行】**をクリックすると、Acronis True Image Home によって新しいパーティションの作成が開始され、別の画面に進行状況が表示されます。**【キャンセル】**をクリックすると、この処理は中断されます。キャンセルした場合は、新しいディスクにパーティションを再作成してフォーマットするか、**【新しいディスクの追加ウィザード】**を再度実行する必要があります。

## 第 16 章 セキュリティおよびプライバシー ツール

これらのユーティリティを使用すると、ユーザーも気づかなかったシステムに残されたユーザー名やパスワードなどの操作の痕跡をクリーンアップできるため、コンピュータで作業する際にプライバシーを維持しながら機密情報を完全に保護できます。

選択したファイルやフォルダを完全に消去するには、**[ファイル シュレッダー]**を実行します。

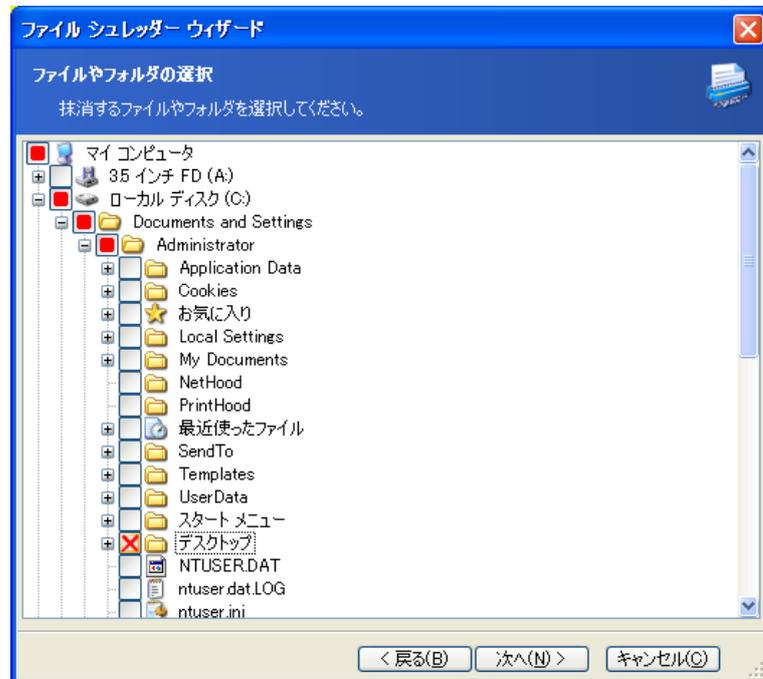
- 選択したパーティションやディスクのデータを復元できないように完全に消去するには、**[Acronis Drive Cleanser]**を実行します。
- 一般的なシステム タスクやユーザー操作の痕跡を保持する Windows コンポーネントに関する情報をクリーンアップするには、**[システム クリーンアップ]**を実行します。

### 16.1 ファイル シュレッダーの使用

**[ファイル シュレッダー]**では、完全に消去するファイルやフォルダを簡単に選択できます。

**[ファイル シュレッダー]**を実行するには、メイン プログラム ウィンドウから**[ディスク ユーティリティ]**カテゴリを選択して、**[ファイル シュレッダー]**をクリックします。**[ファイル シュレッダーウィザード]**が起動し、ファイルやフォルダを完全に消去するのに必要な手順が表示されます。

1. **[ファイルやフォルダの選択]**画面で、消去するファイルやフォルダを選択して、**[次へ]**をクリックします。



2. ウィザードの次の画面でデータの抹消方法を選択します。**[デフォルトの抹消方法を使用する]**を選択した場合、「高速」が使用されます。**[抹消方法を指定する]**を選択すると、あらかじめ定義されている抹消方式がドロップダウンリストに表示され、いずれか 1 つを選択できます。



デフォルトの抹消方法を変更するには、**[システム クリーンアップウィザード]**の最初の画面で**[ここをクリック]**をクリックして、表示される**[プロパティ]**画面で設定することができます。

3. 選択したファイルを指定した方法で完全に抹消するには、概要画面で**[実行]**をクリックします。

## 16.2 Acronis Drive Cleanser

多くのオペレーティング システムには、信頼できるデータ消去ツールが提供されていないため、削除したファイルは復旧アプリケーションなどを使用して簡単に復旧できます。ディスクを完全に再フォーマットしても、機密データの完全な抹消は保証されません。

Acronis Drive Cleanser は、選択したハード ディスクまたはパーティションのデータを完全抹消することを保証し、この問題を解決します。機密情報の重要性に応じて、多くのデータ抹消方式の中から必要な方式が選択できます。

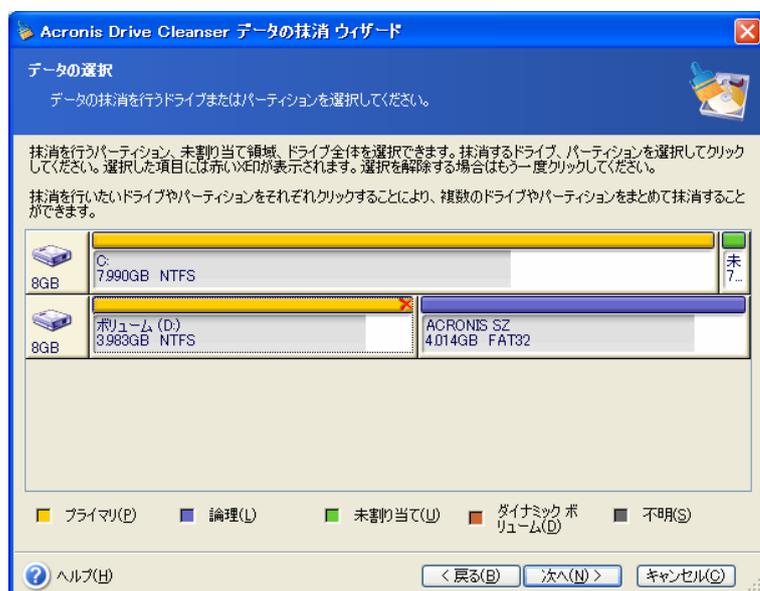
Acronis Drive Cleanser を起動するには、メイン プログラム ウィンドウの[ディスク ユーティリティ]カテゴリを選択して、[Acronis Drive Cleanser]をクリックします。Acronis Drive Cleanser を使用して、次のことができます

あらかじめ定義されている抹消方式を使用して、選択したハード ディスクまたはパーティションを抹消します。

ユーザーが独自の抹消方式を作成し、実行できます。

Acronis Drive Cleanser では、すべてのハード ディスク処理をウィザードで進行する形を取っているため、手順の最後に表示される概要画面で[実行]がクリックされるまで、データの抹消は実行されません。ウィザードは、いつでも前の手順に戻り、他のディスクやパーティション、または別のデータ抹消方式を選択しなおすことができます。

ウィザードを実行すると、はじめにデータを抹消するハード ディスク パーティションを選択します。



抹消するパーティションを決定するには、該当する四角形を選択します。選択されたパーティションは、赤い×マークが右上隅に表示されます。

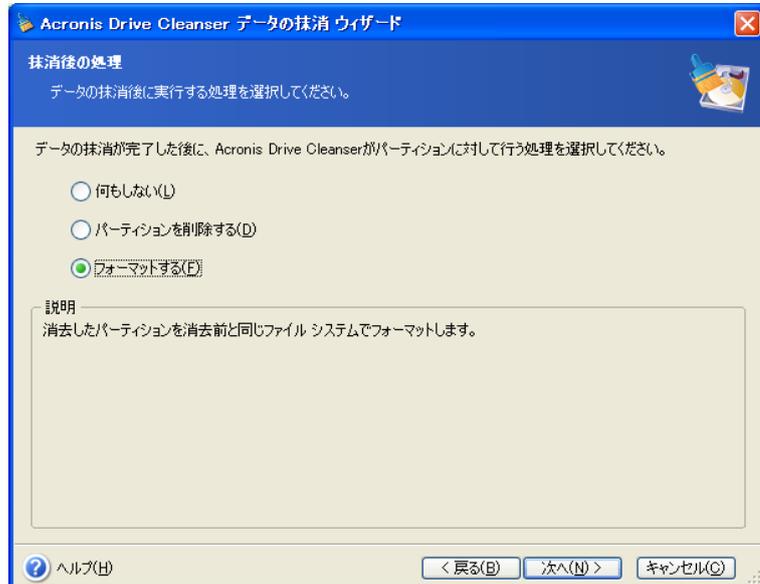
データを抹消する対象として、ハード ディスク全体または複数のディスクを選択することもできます。これを行うには、目的のハード ディスクのアイコンをクリックします。

抹消するハード ディスクあるいはパーティションを続けてクリックすれば、複数のハード ディスクまたはパーティションを同時に選択できます。

[次へ]をクリックして、データ抹消後の処理を指定します。

[抹消後の処理]画面では、データを抹消した後に実行する動作を次の3つから選択できます。

- [何もしない] – 選択した抹消方式を使用して、データの抹消のみを行います。
- [パーティションを削除する] – データを抹消し、パーティションを削除します。
- [フォーマットする] – データを抹消し、パーティションをフォーマットします(デフォルト)。



説明欄には、選択した抹消後の処理の説明が表示されます。

## 16.3 定義済みデータ抹消方式の利用

Acronis Drive Cleanser は、実績のあるデータ抹消方式を複数用意しています。これらの方式の詳細については、付録 C「ハード ディスクの抹消」をご参照ください。



[アルゴリズムの選択]画面で、抹消方式を選択し、[次へ]をクリックすると、Acronis Drive Cleanser によってデータ抹消処理の概要が表示されます。この手順までの間に、ユーザーは[戻る]をクリックして設定をやり直すことができます。[実行]をクリックすると、処理が開始されます。

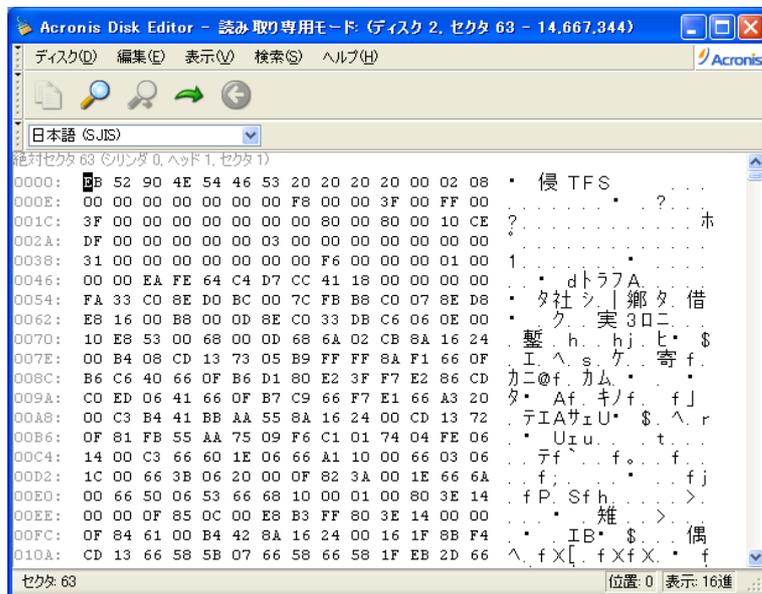


高度な抹消方式を使用する場合は、ハード ディスクに対して負担をかける可能性があるため、ハード ディスクの故障の原因となることがあります。

Acronis Drive Cleanser によって、選択したパーティションまたはディスクの内容を消去するために必要な動作が実行されます。処理が終了すると、データの消去が正常に実行されたことを示すメッセージが表示されます。

Acronis Drive Cleanser には、ハード ディスクやパーティションで実行したデータ抹消結果を評価する機能として、読み取り専用の Disk Editor が提供されています。

前述の各抹消方式は、機密データの抹消レベルがそれぞれ異なります。そのため、Disk Editor で表示されるセクタ内容は、データ抹消方式によって異なる場合があります。ほとんどの場合は、ゼロまたはランダム記号で埋められています。



## 16.4 ユーザー定義のデータ抹消方式の作成

Acronis Drive Cleanser では、ハード ディスクを抹消するために、ユーザー独自の抹消方式を作成できます。Acronis Drive Cleanser には複数のデータ抹消方式が用意されていますが、ユーザー独自の抹消方式を作成することも選択できます。この機能は、データ抹消のアルゴリズムに詳しい上級ユーザーに対してのみお勧めします。

ユーザー独自の抹消方式をステップ バイ ステップで作成できます。

ユーザーが作成した抹消方式は保存することができます。保存しておくと、作成した方式を再利用する場合に便利です。

作成した方式を保存するには、ファイル名を指定し、左側のペインに表示されるフォルダ ツリーから保存先のフォルダを選択します。



各ユーザー定義ファイルは、任意のファイル名で保存されます。既存の定義ファイルに上書き保存すると、以前の定義内容は消去されます。

保存されたユーザー定義のデータ抹消方式は、次の手順で使用できます。

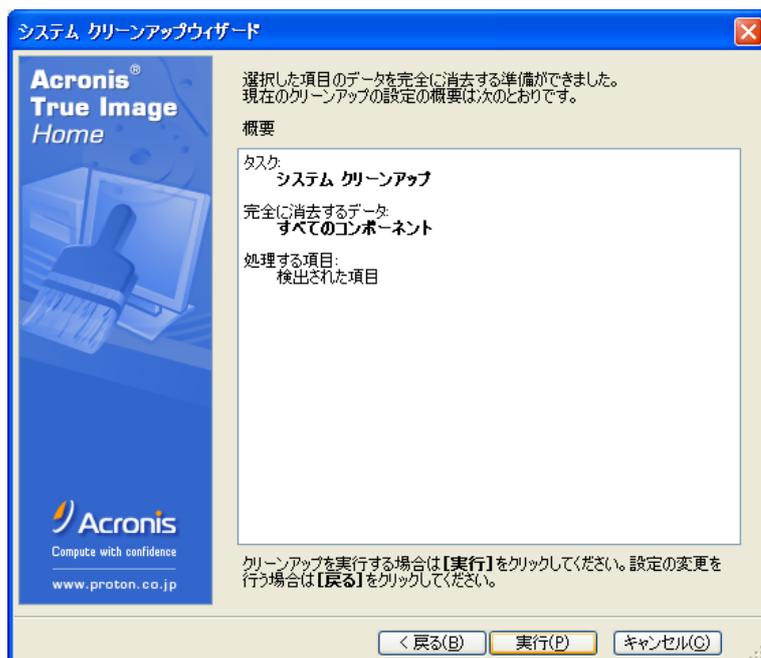
**[抹消方式の選択]**画面で、ドロップダウン リスト ボックスの**[ファイルから読み込む...]**を選択し、**[抹消方式の読み込み]**画面で保存したフォルダから利用するファイルを選択します。デフォルトでは、作成されたファイルには、\*.alg の拡張子が付いています。

## 16.5 システム クリーンアップ

[システム クリーンアップ ウィザード]を使用すれば、Windows によって保存されたコンピュータ操作すべての痕跡を完全にクリーンアップすることができます。

このウィザードでは、次のクリーンアップを実行できます。

- Windows の一時フォルダ内のクリーンアップ
- Windows ごみ箱内にあるデータのクリーンアップ
- ハード ディスク空き領域に保存されていたすべての情報の痕跡のクリーンアップ
- 開かれたファイルや保存されたファイルの履歴のクリーンアップ
- ユーザーのシステム パスワードの一覧のクリーンアップ
- Windows Prefetch ディレクトリのクリーンアップ(Windows XP のみ)。このディレクトリに Windows は最近実行されたプログラムに関する情報を保持しています。
- 接続されているハード ディスクおよびローカル エリア ネットワーク内のコンピュータに対するファイル検索の履歴のクリーンアップ



クリーンアップする項目を選択して、**[実行]**をクリックします。

## 16.6 システム クリーンアップ ウィザードの設定

システム クリーンアップの項目を有効または無効にするには、[この項目のクリーンアップを有効にする]チェックボックスをオンまたはオフにします。



[プロパティ]画面の[デフォルトに戻す]をクリックすると、設定を標準の状態に戻せます。

### [データ抹消方法]の設定

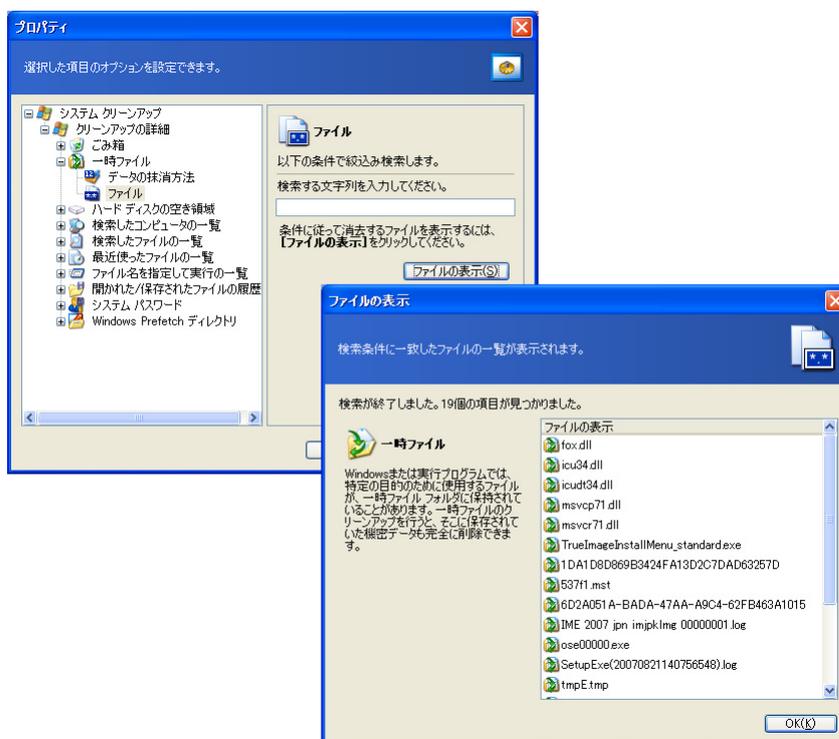
特定の項目をクリーンアップするために使用するデータ抹消方式を選択または設定します。

標準では、デフォルトのデータ抹消方法を使用するように設定されています(付録 C 「ハード ディスクの抹消」をご参照ください)。

デフォルトの抹消方法を変更するには、[この設定を変更する場合はクリックしてください]をクリックし、表示される[オプション]画面のドロップダウンリストから抹消方式を選択します。

項目に個別のデータ抹消方式を適用する必要がある場合には、[抹消方法を指定する]を選択し、ドロップダウン リストから希望する方式を選択します(付録 C 「ハード ディスクの抹消」をご参照ください)。

### 16.6.1 [ファイル]の設定



Windows オペレーティング システムでは、検索文字列にファイル名全体またはその一部を指定できます。検索文字列にはセミコロン(;), およびワイルドカード文字を含む任意の英数字や記号を含めることができ、それらは次のような意味を表します。

- \*.\* — ファイル名や拡張子に関係なく、すべてのファイルがクリーンアップされます。
- \*.doc — 特定の拡張子の付いたすべてのファイル(この例では Microsoft Word の文書ファイル)がクリーンアップされます。

複数の検索文字列をセミコロンで区切って入力できます。たとえば、次のように入力できます。

\*.bak; \*.tmp; \*.~\*~;

複数の検索文字列が設定されている場合、検索文字列いずれかに一致するファイルが、すべて検索されます。

[ファイル]設定の値を入力する際に、検索文字列に一致するファイルを参照できます。この操作を行うには、[ファイルの表示]をクリックします。見つかったファイルの名前が表示されます。これらのファイルがクリーンアップの対象となります。



完全なファイル名あるいはその一部を含む検索文字列の長さには、特に制限がありません。たとえば、\*.tmp、read?.\*といったファイル名あるいはその一部をセミコロンで区切っていくつでも入力できます。

## 16.6.2 [コンピュータ]の設定

[コンピュータ]の設定では、ローカル ネットワーク上のコンピュータを検索するために使用した検索文字列をレジストリからクリーンアップします。これらの検索文字列には、ネットワーク内でユーザーが関与したコンピュータに関する情報が保持されています。機密を維持するためには、これらの項目もクリーンアップする必要があります。

[コンピュータ]の設定は、[ファイル]の設定と同じです。[コンピュータ]の設定は、完全なコンピュータ名あるいはその一部をセミコロンで区切って複数入力できます。コンピュータ名の検索文字列は、Windows の規則に従って[コンピュータ]の設定内容と比較され、クリーンアップされます。

ローカル ネットワークで検索されたすべてのコンピュータ名をクリーンアップする手順は、次のとおりです。

1. [検索したコンピュータの一覧]を選択します。
2. [検索したコンピュータの一覧]について、[この項目のクリーンアップを有効にする]チェックボックスをオンにします。
3. [コンピュータ]の設定で、クリーンアップするコンピュータ名を入力します。空欄はアスタリスク(\*)と同意です。通常、ここは指定しないので、すべてのコンピュータ名がクリーンアップの対象となります。

[コンピュータ]設定の値を入力する際に、検索文字列に一致するファイルを参照できます。この操作を行うには、[コンピュータの表示]をクリックします。見つかったコンピュータが表示されます。これらのコンピュータがクリーンアップの対象となります。

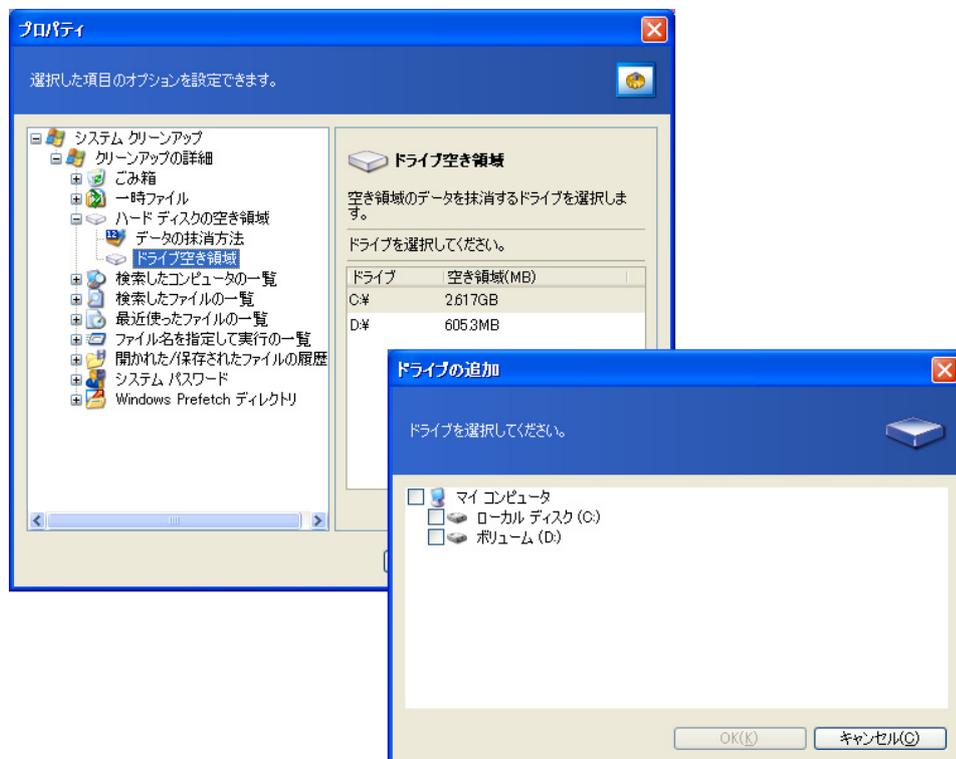
## 16.6.3 [ドライブの空き領域]の設定

空き領域をクリーンアップするドライブを手動で設定します。

システム クリーンアップは、使用可能な全ドライブの空き領域をクリーンアップします。

クリーンアップから除外するには、[削除]をクリックして、ドライブを一覧から削除します。

削除したドライブを再び一覧に追加するには、[追加]をクリックします。



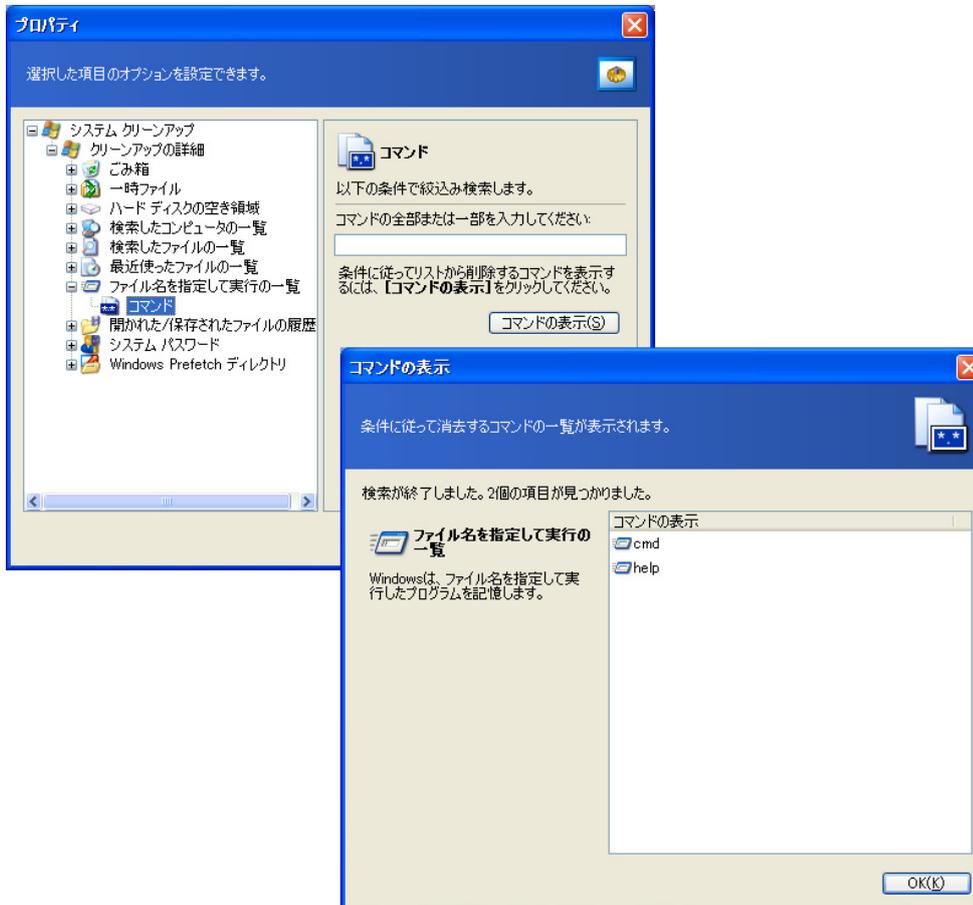
## 16.6.4 [コマンド]の設定

Windows の[ファイル名を指定して実行]の一覧からクリーンアップするコマンドを指定します。

次のようにセミコロンで区切ることで、複数のコマンド名を指定することができます。

```
*help; cmd*; reg*
```

検索文字列いずれかに一致するコマンドが、すべて検索されます。



## 16.6.5 [システム パスワード フィルタ]の設定

Windows に記録されているシステム パスワードをクリーンアップします。

ワイルドカード文字を使用して、完全なパスワードあるいはその一部をセミコロンで区切って複数入力できます。

[システム パスワード フィルタ]設定の値を入力する際に、検索文字列に一致するパスワードを参照できます。この操作を行うには、[パスワードの表示]をクリックします。見つかったパスワードが表示されます。これらのパスワードがクリーンアップの対象となります。

## 16.7 個別の項目のシステム クリーンアップ

各項目は個別にクリーンアップすることができます。

システム クリーンアップのプロパティで指定された設定は、各項目のクリーンアップに対しても有効です。

各項目を個別にクリーンアップするには、[システム クリーンアップ]画面の[プレビュー]で対象項目を選択し、実行します。

## 付録A パーティションおよびファイル システム

### A.1 ハード ディスクのパーティション

1 台のコンピュータに複数のオペレーティング システムをインストールしたり、1 つの物理ディスク ドライブを複数の「論理」ディスクドライブに分割したりする仕組みを**パーティショニング**といいます。

パーティショニングは特別なアプリケーションを使用して実行します。MS-DOS と Windows では、FDISK とディスクの管理を使用します。

パーティショニング プログラムには次の機能があります。

1. プライマリ パーティションを作成する。
2. 複数の論理ディスクに分割できる拡張パーティションを作成する。
3. アクティブ パーティションを設定する(単一のプライマリ パーティションにのみ適用)。



ハード ディスク上のパーティションに関する情報は、パーティション テーブルと呼ばれる特別なディスク領域(シリンダ 0、ヘッド 0、セクタ 1)に格納されます。このセクタはマスタ ブートレコード、または MBR と呼ばれます。



物理ハード ディスクに構成できるプライマリ パーティションは最大 4 個です。この制限は、4 つまでの文字列にのみ対応しているパーティション テーブルによるものです。ただし、これはコンピュータにインストールできるオペレーティング システムが最大で 4 種類に制限されることを示しているわけではありません。ディスク マネージャと呼ばれるアプリケーションは、ディスク上ではるかに多くのオペレーティング システムをサポートしています。たとえば、Acronis Disk Director Suite に含まれる Acronis OS Selector を使用すると、最大 100 個までのオペレーティング システムをインストールできます。

### A.2 ファイル システム

オペレーティング システムがパーティションに対してサポートする何らかのファイル システムによって、ユーザーはデータを操作できます。

すべてのファイル システムが、データの格納と管理に必要な構造を備えています。これらの構造は通常、オペレーティング システムのブート セクタ、フォルダ、およびファイルで構成されています。ファイル システムの基本的な機能は次のとおりです。

1. 使用中および未使用のディスク領域を管理する(不良セクタが存在する場合はこれも管理する)。
2. フォルダ名とファイル名をサポートする。
3. ディスク上のファイルの物理的な場所を管理する。

オペレーティング システムによって使用するファイル システムは異なります。1 種類のファイル システムしか扱うことのできないオペレーティング システムもあれば、複数の種類のファイル システムを扱うことが可能なオペレーティング システムもあります。最も広く使用されているファイル システムのいくつかを次に示します。

#### A.2.1 FAT16

FAT16 ファイル システムは、DOS(DR-DOS、MS-DOS、PC-DOS、PTS-DOS など)、Windows 95/98/Me、および Windows NT/2000/XP/Vista といったオペレーティング システムで広く使用され、これ以外のほとんどのシステムでもサポートされています。

FAT16 の主な特徴は、ファイル アロケーション テーブル(FAT)とクラスタです。FAT はファイル システムの中核的な機能です。データの安全性を高めるために、単一のディスクに FAT のコピーを複数持つことができます(通常は 2 つ)。クラスタは FAT16 ファイル システムにおける最小のデータ ストレージ単位です。1 つのクラスタは、決まった数のセクタで構成されます。FAT は空きクラスタと不良クラスタに関する情報を格納し、ファイルが格納されるクラスタの場所も決定します。

FAT16 ファイル システムは、クラスタ数が最大 65,507、クラスタサイズが最大 32KB に制限されているため、最大サイズは 2GB になります(Windows NT/2000/XP/Vista は最大 4GB のパーティションで最大 64KB のクラスタをサポート)。通常は最小クラスタ サイズを使用し、クラスタ数 65,507 の制限内でできるだけ多くのクラスタを構成します。パーティションが大きくなると、クラスタサイズも大きくなります。



通常、クラスタサイズが大きいとそれだけディスクスペースを無駄に消費します。クラスタサイズが 32KB または 64KB の場合でも、1 バイトのデータで 1 つのクラスタが占有される可能性があります。

ほかの多くのファイル システムと同様、FAT16 にもルート フォルダがあります。ただし、ほかのファイル システムとは異なり、FAT16 のルート フォルダは特別な場所に格納され、サイズも制限されています(標準のフォーマットで作成されるルート フォルダに格納できるファイルやフォルダの数は最大 512 です)。

初期の FAT16 にはファイル名にも制限がありました。ファイル名に使用できたのは、最長 8 文字までの名前のほか、ドットと 3 文字の拡張子のみでした。ただし、Windows 95 および Windows NT でロング ファイル ネームがサポートされ、この制約が回避されています。OS/2 でもロング ファイル ネームがサポートされますが、その方法は異なります。

## A.2.2 FAT32

FAT32 ファイル システムは Windows 95 OSR2 で導入されました。このファイル システムは、Windows 98/Me/2000/XP/Vista でもサポートされています。FAT32 は FAT16 を発展させたファイル システムです。FAT16 との主な相違点は、クラスタを 28 ビットで管理する点、およびルート フォルダがより柔軟になり、サイズに制限がなくなった点です。FAT32 が導入された理由は、8GB を超える大容量ハード ディスクのサポートと、現在も Windows 95/98/Me がベースにしている MS-DOS に、これ以上複雑なファイル システムを実装できなくなったことにあります。

FAT32 の最大ディスクサイズは 2TB です(1TB は 1024GB に相当します)。

## A.2.3 NTFS

NTFS は、Windows NT/2000/XP の主要なファイル システムです。その構造は公開されていないため、NTFS を完全にサポートするオペレーティング システムは Windows NT/2000/XP/Vista 以外にありません。NTFS の主な構造は、MFT(マスタ ファイル テーブル)です。NTFS は MFT の重要な部分のコピーを保存して、データの損傷や消失の可能性を低減しています。その他のすべての NTFS データ構造は特別なファイルとなっています。NTFS は NT File System の略称です。

FAT と同様、NTFS はクラスタを使用してファイルを格納しますが、クラスタサイズはパーティション サイズに左右されません。NTFS は 64 ビットのファイル システムで、ファイル名の保持には Unicode を使用します。ジャーナリング(耐障害)ファイル システムでもあり、圧縮および暗号化をサポートします。

フォルダ内のファイルには、ファイル検索の高速化を図るため、インデックスが付けられています。

## A.2.4 Linux Ext2

Ext2 は、Linux オペレーティング システムで主に使用されるファイル システムの 1 つです。Ext2 は 32 ビット システムです。最大サイズは 16TB です。ファイルを記述する主なデータ構造は i ノードです。すべての i ノードを含むテーブルを格納する場所を事前(フォーマット時)に割り当てる必要があります。

## A.2.5 Linux Ext3

Ext3 は、Linux オペレーティング システムのバージョン 7.2 で正式に導入された、Red Hat Linux のジャーナリング ファイル システムです。Linux ext2 とは上位および下位互換です。複数のジャーナリング モードを備え、32 ビットと 64 ビットの両方のアーキテクチャで、プラットフォームに依存しない幅広い互換性を実現します。

## A.2.6 Linux ReiserFS

ReiserFS は 2001 年に正式に Linux に導入されました。ReiserFS により Ext2 の弱点の多くが克服されています。これは 64 ビットのジャーナリング ファイル システムで、データ サブストラクチャに対して動的に領域を割り当てます。

## 付録B ハード ディスクおよび BIOS セットアップ

この補足では、ハード ディスクの機構に関する詳細な情報、情報がディスクに格納されるまでの流れ、ディスクをコンピュータに取り付けてマザーボードに接続する方法、BIOS でのディスクの構成、パーティションとファイル システム、およびオペレーティング システムとディスクとの相互作用について説明します。

### B.1 コンピュータへのハード ディスクの設置

#### B.1.1 一般的なハード ディスクの設置方法

新しい IDE ハード ディスクを設置する手順は、次のとおりです。なお、**作業を開始する前にコンセントを抜いてください。**

1. 新しいハード ディスクをスレーブに設定します。通常、ディスク ドライブには、ジャンパを正しく取り付けする方法が示された図が貼られています。
2. コンピュータを開き、新しいハード ディスクを 3.5 インチまたは 5.25 インチ スロットに挿入します。ディスクをネジでしっかり固定します。
3. 電源ケーブルを新しいハード ディスクに差し込みます(黒 2 本、黄 1 本、赤 1 本から成る 4 芯ケーブル。このケーブルは決まった向きでしか取り付けられません)。
4. 40 芯または 80 芯のフラット ケーブルをハード ディスクとマザーボードのソケットに差し込みます(差し込みに関する規則については後で説明します)。ディスク ドライブのコネクタ部分またはコネクタの付近には 1 番ピンを表す印が付いています。フラット ケーブルの一端は、1 番ピン用に芯が 1 本だけ赤くなっています。ケーブルがコネクタに正しく差し込まれていることを確認してください。また、ケーブルの多くは、1 方向にしか差し込めないように、「切り欠き」が付けられています。
5. コンピュータの電源を入れ、コンピュータの起動時に画面に表示されるキーを押して BIOS のセットアップ画面に入ります。
6. 設置したハード ディスクを **type**、**cylinder**、**heads**、**sectors**、**mode**(または **translation mode**)などのパラメータを設定して構成するか(パラメータの情報はハード ディスクのケースに記載されています)、あるいは BIOS の IDE 自動検出ユーティリティを使用して自動的に構成します。
7. 起動シーケンスを A; C;、CD-ROM、またはそのほかに設定します。シーケンスは Acronis True Image Home のコピーが格納されている場所によって異なります。起動ディスクがある場合は、このディスクがシーケンスの最初になるように設定します。CD から起動する場合は、起動シーケンスが CD-ROM から始まるようにします。
8. BIOS セットアップを終了し、変更を保存します。Acronis True Image Home は、マシンの再起動後に自動的に起動されます。
9. Acronis True Image Home を使用し、ウィザードの質問に答えてハード ディスクを構成します。
10. 作業が完了したらコンピュータの電源を切り、ディスクを起動用にする場合は、ディスクのジャンパを**マスタ**位置に設定します(ディスクを追加のデータ ストレージとして設置する場合は、**スレーブ**位置のままにします)。

#### B.1.2 マザーボードのソケット、IDE ケーブル、および電源ケーブル

マザーボードには、ハード ディスクを接続できる、**プライマリ IDE** と**セカンダリ IDE** の 2 つのスロットがあります。

IDE(Integrated Drive Electronics)インターフェイスを備えたハード ディスクは、マーキングされた 40 芯または 80 芯のフラット ケーブル経由でマザーボードに接続されます。ケーブル芯線のうちの 1 本は赤色です。

各ソケットには 2 台の IDE ハード ディスクを接続できます。つまり、この種のハード ディスクはコンピュータに最大 4 台設置できます(各 IDE ケーブルには 3 つのプラグがあります。2 つはハード ディスク用で、1 つはマザーボード ソケット用です)。

前で説明したように、IDE ケーブル プラグは通常、ソケットに決まった向きでしか接続できないように設計されています。通常、ケーブル プラグのピンホールは 1 つが埋められており、埋められたホールに対応する部分のピンがマザーボードソケットから取り除かれているため、ケーブルを間違った向きで差し込むことはできません。

ケーブルのプラグ側に突起があり、ハード ディスクのソケットやマザーボードのソケットにくぼみがある場合もあります。この場合も、ハード ディスクとマザーボードを接続する際の向きは 1 つのみになります。

以前のプラグはこのように設計されていなかったため、「**IDE ケーブルをハード ディスク ソケットに接続する際は、マーク付きの芯線が電源ケーブルに最も近くなるようにする、つまりマーク付きの芯線をソケットの 1 番ピンに接続する。**」という経験則がありました。ケーブルとマザーボードの接続にも同様の経験則が使用されていました。

ケーブルがハード ディスクまたはマザーボードと正しく接続されていないからといって、必ずしもディスクやマザーボードの電子回路部品が損傷するわけではありません。単に、ハード ディスクが BIOS によって検出されなかったり初期化されなかったりするだけです。



以前のハード ディスク、特に古いハード ディスクには、接続を間違えるとドライブの電子回路部品が損傷するモデルもありました。



ここではすべての種類のハード ディスクについては説明しません。現在、最も広く普及しているハード ディスクは、IDE または SCSI インターフェイスを備えたものです。IDE ハード ディスクとは異なり、SCSI ハード ディスクは 6～14 台をコンピュータに設置できます。ただし、これらを接続するにはホスト アダプタと呼ばれる特別な SCSI コントローラが必要です。SCSI ハード ディスクは、通常はパーソナル コンピュータ(ワークステーション)では使用されず、ほとんどの場合サーバーで使用されます。

IDE ケーブルとは別に、4 芯の電源ケーブルをハード ディスクに接続する必要があります。このケーブルは、決まった向きでしか差し込むことができません。

### B.1.3 ハード ディスクドライブとジャンパの設定

コンピュータではハード ディスク ドライブを**マスタ**または**スレーブ**として設定できます。設定は、ジャンパと呼ばれるハード ディスクドライブの特別なコネクタの位置によって決まります。

ジャンパは、ハード ディスクの電子回路基盤上か、ハード ディスクとマザーボードを接続するための特別なソケットに存在し、通常は取り付け位置の説明が書かれたステッカーがドライブに貼られています。典型的なマークは、**DS**、**SP**、**CS**、**PK** です。

それぞれのジャンパ位置は、ハード ディスクの次に示す特定の設置モードに対応します。

1. **DS – マスタ/工場出荷値。**
2. **SP – スレーブ(またはジャンパ不要)。**
3. **CS – マスタ/スレーブのケーブル セレクト。** ハード ディスクの用途は、マザーボードとの物理的な位置関係によって決定されます。
4. **PK – ジャンパのパーキング位置。** 既存の構成でジャンパが不要な場合に、ジャンパを配置できる位置です。

ジャンパを**マスタ**位置に設定したディスクは、BIOS(Basic Input/Output System)によって起動用として扱われます。

同じケーブルに接続した複数のハード ディスクのジャンパを**マスタ/スレーブのケーブル セレクト**の位置に配置できます。この場合、BIOS は、IDE ケーブルに接続されているディスクの中で、マザーボードに近いほうのディスクを「マスタ」と見なします。



残念ながら、ハード ディスクのマークは標準化されていません。ご使用のハード ディスクのマーキングが上述のものと異なる場合もあります。さらに、旧式のハード ディスクの場合は、1 つではなく 2 つのジャンパによって用途が定義されることがあります。ハード ディスクをコンピュータに設置する前に、マーキングについてよく確認してください。

ハード ディスクをマザーボードに物理的に接続し、ハード ディスクが機能するようジャンパを正しく設定しただけではまだ不十分です。マザーボードの BIOS で、ハード ディスクを適切に構成する必要があります。

## B.2 BIOS

コンピュータの電源を入れると、オペレーティング システムのスプラッシュ画面が表示される前に、何行もの短いテキストメッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは、BIOS に属している POST(Power-On Self Test)プログラムをプロセッサが実行した結果出力されるものです。

BIOS(Basic Input/Output System)は、コンピュータのマザーボード上の不揮発メモリ チップ(ROM または Flash BIOS)に常駐するプログラムで、コンピュータの重要な要素です。各 BIOS バージョンは、プロセッサ、メモリ、統合デバイスといったマザーボードのコンポーネントすべての特性をすべて「認識」します。BIOS バージョンはマザーボードの製造元によって提供されます。

BIOS の主な機能は次のとおりです。

1. POST でプロセッサ、メモリ、および入出力デバイスをチェックする。
2. ソフトウェアによって管理されるマザーボードのすべての部分を初期構成する。
3. オペレーティング システム(OS)の起動プロセスを初期化する。

コンピュータには膨大な数のコンポーネントがありますが、その中の外部メモリ サブシステム(ハード ディスク ドライブ、フロッピー ディスクドライブ、CD-ROM ドライブ、DVD などのデバイスを制御)について、初期構成が必要です。

### B.2.1 セットアップ ユーティリティ

BIOS には、コンピュータの初期構成を行うための組み込みのセットアップ ユーティリティがあります。セットアップ ユーティリティ画面を表示するには、コンピュータの電源をオンにした直後に開始される POST シーケンス中に、BIOS によって異なる特定のキーの組み合わせ(Del、F1、Ctrl+Alt+Esc、Ctrl+Esc など)を押す必要があります。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、BIOS に組み込まれているセットアップ ユーティリティのメニューが表示されます。

メニューの外観、メニューに表示される項目と項目名は、BIOS の製造元によって異なります。コンピュータのマザーボード用の BIOS の製造元として最もよく知られているのは、Award/Phoenix と AMI です。また、標準セットアップのメニュー項目に関しては BIOS ごとの違いはほとんどありませんが、拡張セットアップの項目は、コンピュータおよび BIOS バージョンによって大幅に異なります。

ここでは、ハード ディスクの初期構成に関する一般原則を示します。



大手のコンピュータ メーカーは、自社でマザーボードを製造し、独自の BIOS バージョンを開発しています。必ずコンピュータに付属しているマニュアルを参照し、指示に従って適切に BIOS を構成してください。

### B.2.2 Standard CMOS Setup メニュー

Standard CMOS Setup メニューのパラメータは通常、ハード ディスクのジオメトリを定義します。コンピュータにインストールされている個別のハード ディスクに対し、次のパラメータ(および値)を使用できます。

パラメータ	値	目的
Type	1-47, Not Installed, Auto	Type 「0」または「Not Installed」は、ハード ディスクがインストールされていない場合に(そのハード ディスクをアンインストールするために)使用され、Type 「47」は、ユーザー定義のパラメータ、または IDE 自動検出ユーティリティによって検出されるパラメータ用に予約されています。「Auto」値は、起動シーケンス中の IDE ディスク パラメータの自動検出を可能にします。
Cylinder(Cyl)	1-65535	ハード ディスク上のシリンダの数。IDE ディスクの場合は、シリンダの論理番号が指定されます。
Heads(Hd)	1-16	ハード ディスク上のヘッドの数。IDE ディスクの場合は、ヘッドの論理番号が指定されます。
Sectors(Sec)	1-63	ハード ディスクのトラックあたりのセクタ数。IDE ディスクの場合は、セクタの論理番号が指定されます。
Size(Capacity)	MBytes	MB 単位のディスク容量。次の式に従って計算されます。 サイズ=(Cyl x Hds x Sec x 512)/ 1024 / 1024.
Mode(Translation Method)	Normal/ LBA/ Large/Auto	セクタ アドレスの変換方法。

たとえば、Acronis True Image Home の主な機能を実際に示すために、Quantum Fireball TM1700A ハードディスクを使用した場合は、次のとおりです。このハードディスクのパラメータは次の値を持ちます。

パラメータ	値
Type	Auto
Cylinder(Cyl)	827
Heads(Hd)	64
Sectors(Sec)	63
Mode	Auto
CHS	1707 MB
Maximum LBA Capacity	1707 MB

BIOS セットアップでは、Type パラメータを User Type HDD(ユーザー定義の種類)に設定できます。その場合は、Translation Mode パラメータの値も指定する必要があります。指定できる値は「Auto」/「Normal」/「LBA」/「Large」です。



Translation Mode は、セクタ アドレスの変換方法を表します。このパラメータが使用されるようになったのは、BIOS バージョンでディスクの最大アドレス容量が 504MB(1024 シリンダ 16 ヘッド 63 セクタ 512 バイト)に制限されていたためです。この制限の適用を避ける方法は 2 つあります。物理セクタ アドレスから論理セクタ アドレス(LBA)に切り替える方法と、計算によってアドレス指定されたセクタ(シリンダ)の数を減らし、ヘッドの数を増やす方法です。後者は Large Disk(Large)と呼ばれます。最も簡単なのは、Translation Mode パラメータの値を「Auto」に設定する方法です。

マザーボードに複数のハードディスクを接続しているが、いくつかは当面使用しない、という場合は、これらのディスクの Type を「Not Installed」に設定する必要があります。

ハードディスクのパラメータは、ハードディスクの製造元がケースに記載している情報を頼りに手動で設定できます。ただし、最新の BIOS バージョンには通常、IDE 自動検出ユーティリティが組み込まれており、これを実行するとより簡単に設定できます。

IDE 自動検出ユーティリティは、個別の BIOS メニュー項目となっている場合もあれば、Standard CMOS Setup メニューに組み込まれている場合もあります。



付録 B「ハードディスクおよび BIOS セットアップ」では、**物理的**なハードディスク構造の一般的な詳細が説明されています。組み込みの IDE ハードディスクコントローラは、物理的なディスク構造を隠ぺいします。その結果、マザーボードの BIOS は、**論理的**なシリンダ、ヘッド、およびセクタを「認識」します。ここではこの問題については詳しく説明しませんが、このことを知っておくと役に立つ場合があります。

### B.2.3 起動シーケンスの調整 – Advanced CMOS Setup メニュー

BIOS メニューには通常、Standard CMOS Setup とは別に、**Advanced CMOS Setup** 項目があります。この項目で、C:、A:、CD-ROM の**起動シーケンス**を調整できます。



**起動シーケンス**の管理は、AMI BIOS、AWARDBIOS、およびハードウェアの大手メーカーなど、BIOS バージョンごとに異なります。

数年前のオペレーティングシステムの起動シーケンスは、BIOS にハードコーディングされていました。オペレーティングシステムは、フロッピーディスク(ドライブ A:)からも、ハードディスク C: から起動可能で、BIOS は外部ドライブを参照する際に、ドライブ A: が準備できている場合はフロッピーディスクからオペレーティングシステムの起動を試み、ドライブが準備できていない場合またはフロッピーディスクにシステム領域がない場合は、ハードディスク C: からオペレーティングシステムの起動を試みる、というシーケンスを使用していました。

現在の BIOS では、フロッピーディスクとハードディスクだけでなく、CD-ROM、DVD、およびそのほかのデバイスからオペレーティングシステムを起動できます。コンピュータに C:、D:、E:、および F: のラベルが付いた複数のハードディスクが設置されている場合は、起動シーケンスを調整することにより、オペレーティングシステムをたとえば E: から起動するように設定できます。この場合、起動シーケンスを E:、CD-ROM、A:、C:、D: のように設定する必要があります。



これは、起動シーケンスの一覧にある最初のディスクから起動が実行されることを意味するものではありません。単に、オペレーティングシステムを起動する最初の試みがこのディスクから行われることを意味します。ディスク E: にオペレーティングシステムがない場合や、E: が非アクティブの場合もあります。この場合、BIOS は一覧に記載された次のドライブを参照します。起動中に発生する可能性のあるエラーについては、「B.2.4 ハードディスクの初期化エラー」をご参照ください。

---

BIOS は、IDE コントローラに接続されている順序(プライマリ マスタ、プライマリ スレーブ、セカンダリ マスタ、セカンダリ スレーブの順)に従ってディスクを列挙し、次に SCSI ハード ディスクを列挙します。

BIOS セットアップで起動シーケンスを変更した場合、この順序は崩れます。たとえば、起動をハード ディスク E: から実行するよう指定した場合、通常的环境下では 3 番目になるハード ディスク(一般的にはセカンダリ マスタ)から認識が開始されます。

ハード ディスクを設置し、BIOS で構成すると、コンピュータ(またはマザーボード)はそのディスクの存在と主なパラメータを「認識」するようになります。ただし、オペレーティング システムがハード ディスクを操作するためにはまだ十分ではありません。さらに、新しいディスク上にパーティションを作成し、Acronis True Image Home を使用してそのパーティションをフォーマットする必要があります。第 15 章「新しいハード ディスクの追加」をご参照ください。

## B.2.4 ハード ディスクの初期化エラー

デバイスは、通常は正常に初期化されますが、エラーが発生する場合があります。ハード ディスク関連の典型的なエラーは、次のメッセージによって報告されます。

```
PRESS A KEY TO REBOOT
```

このエラー メッセージは、ハード ディスク初期化中のエラーと直接の関係はありません。ただし、たとえば起動プログラムがハード ディスク上にオペレーティング システムを見つけられない場合、またはハード ディスクのプライマリ パーティションがアクティブとして設定されていない場合に表示されます。

```
DISK BOOT FAILURE,  
INSERT SYSTEM DISK AND  
PRESS ENTER
```

このメッセージは、起動プログラムがフロッピー ディスクやハード ディスク、CD-ROM などの利用可能な起動用デバイスを見つけられない場合に表示されます。

```
C: Drive error  
c: Drive failure  
error encountered  
initialization hard drive
```

このメッセージは、ディスク C: にアクセスできない場合に表示されます。ディスクが機能していることを確認できた場合、このエラー メッセージは次の設定/接続が間違っていることが原因で発生したと考えられます。

- BIOS セットアップにおけるハード ディスクのパラメータ
- コントローラのジャンプ(マスタ/スレーブ)
- インターフェイス ケーブル

デバイスが故障しているか、ハード ディスクがフォーマットされていない可能性もあります。

---

## 付録C ハード ディスクの抹消方法

ハード ディスクドライブから、セキュリティ上の措置を講じないで削除した(たとえば、Windows 上で削除しただけの)情報は、簡単に復元することができます。特殊な機器を使用すれば、何度も上書きされた情報を復元することも可能です。そのため、データの完全な抹消を保証する技術の重要性が、これまでになく高まっています。

磁気媒体(ハード ディスク ドライブなど)の**情報の抹消を保証**するということは、この分野の専門家があらゆるツールや修復手法を用いても、データの復元が不可能であるということを意味しています。

この問題を詳しく説明すると次のようになります。データとは 1 と 0 という 2 進数の連続としてハード ディスクに記録され、それぞれの数値はディスク上で異なった磁化の形態で表現されています。それぞれの数値はディスクの一部分を異なった状態に磁化することによって表現されています。

一般的に、ハード ディスクに 1 と書き込まれた場合、ディスク装置によって 1 と読み出され、0 と書き込まれた場合は、0 と読み出されます。しかし、0 の上に 1 と書き込まれた場合、読み出された値はたとえば 0.95 になり、その逆も同様で、1 の上に 1 と書き込まれた場合、結果は 1.05 となります。これらの違いは、コントローラにとっては問題になりません。ただし、特別なツールを使用すると、その「下にある」1 と 0 のシーケンスを簡単に読み取ることができます。

特殊なソフトウェアと比較的安価なハードウェアを使えば、このようにしてハード ディスク セクタの磁化の状態やトラックの両端に残留している磁気の詳細を分析したり、磁気顕微鏡を使って削除されたデータを読み出したりすることが可能なのです。

磁気媒体に書き込むことにより、次のような微妙な影響が生じます。つまり、磁気ディスクのすべてのトラックには、今まで**記録した値のすべてのイメージ**が残ってしまい、時間がたつにつれてこれらの記録(磁気層)は弱くなっていきます。

### C.1 データの抹消方法の機能原則

ハード ディスクからデータを物理的に完全に抹消するには、すべての磁気領域 1 つ 1 つに対して、特別に選び出した 1 と 0 の並び(サンプル データ)をできるだけ多く書き込み、磁気の状態を何回も切り替えます。

一般的なハード ディスクの論理データ エンコーディング方法を利用すれば、セクタに書き込まれる記号(または最小単位のデータ)の並びの**サンプル**を選択して、**継続的かつ効果的に機密データを抹消**することができます。

国家規格で提唱された方式では、ランダムな記号をディスク セクタに対して(1 回または 3 回)記録します。これは**単純で確実性に欠ける方法ですが**、それほど重大ではない状況では効果的です。

最も有効なデータ抹消方式は、あらゆるタイプのハード ディスクに記録されたデータの、微細な特徴の詳細な分析に基づくものです。

このような理由により、情報の抹消を**保証**するには、複数の工程で処理する複雑な方式が必要となります。

情報の抹消を保証する技術に関する具体的な理論は、Peter Gutmann 氏による論文で紹介されています。次のサイトをご参照ください。

[http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure\\_del.html](http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure_del.html)

## C.2 Acronis で使用できるデータ抹消方法

次の表では、Acronis で使用できる抹消方法について簡単に説明しています。それぞれ、各セクタに書き込む数字(バイト単位)と、ハード ディスク セクタのデータ処理回数を表しています。

### Acronis で使用できるデータ抹消方法に関する説明

番号	アルゴリズム (書き込み方式)	データ 処理回数	情報
1.	米国国防総省 準拠 5220.22-M 方式	4	1 回目-各セクタのバイトごとにランダムに選んだ記号。2 回目-1 回目に書き込んだ数の補数。3 回目-再度、ランダムな記号。4 回目-書き込みの確認。
2.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-RLL 方式	4	1 回目-全セクタに対して 0x01。2 回目-0x27FFFFFF。3 回目-ランダムな記号の並び。4 回目-確認。
3.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-MFM 方式	4	1 回目-全セクタに対し 0x01。2 回目-0x7FFFFFFF。3 回目-ランダムな記号の並び。4 回目-確認
4.	ドイツ VSITR 方式	7	1~6 回目-0x00 と 0xFF を交互に。7 回目-0xAA。すなわち 0x00、0xFF、0x00、0xFF、0x00、0xFF、0xAA。
5.	ロシア GOST P50739- 95 方式	1	第 6~第 4 セキュリティレベルのシステムの場合、各セクタのバイトごとに論理ゼロ(0x00)。 第 3~第 1 セキュリティレベルのシステムの場合、各セクタのバイトごとにランダムな記号(数字)。
6.	グートマン(Peter Gutmann)方式	35	非常に高度な方式である。この方式は、ハード ディスクの情報抹消についての Peter Gutmann 氏の理論に基づいている ( <a href="http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure_del.html">http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure_del.html</a> をご参照ください)。
7.	Bruce Schneier 方式	7	Bruce Schneier 氏は、応用暗号法に関する著書の中で、7 回上書きする方式を提唱している。1 回目の工程では 0xFF を 2 回目の工程では 0x00 を書き込む。その後の 5 回の工程では、暗号法的に安全である擬似的なランダム シーケンスを書き込む。
8.	高速	1	全セクタに対して論理ゼロ(0x00)で抹消。

---

## 付録D 起動パラメータ

Linux カーネルの起動前に適用されるオプションのパラメータ

### 説明

次のパラメータは Linux カーネルを特別なモードでロードするために使用されます。

- **acpi=off**

[ACPI](#) を無効にします。特定のハードウェア構成で有用な場合があります。

- **noapic**

APIC(Advanced Programmable Interrupt Controller)を無効にします。特定のハードウェア構成で有用な場合があります。

- **nousb**

USB モジュールをロードしません。

- **nousb2**

USB 2.0 をサポートしません。このオプションでも USB 1.1 デバイスは動作します。このオプションを使用すると、USB 2.0 モードでは動作しない USB ドライブを USB 1.1 モードで動作させることができます。

- **quiet**

起動メッセージを表示しないパラメータです。デフォルトで有効になっています。これを指定しない場合、Linux カーネルのロード中に起動メッセージが表示され、Acronis プログラムが実行される前にコマンド [シェル](#) が実行されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブに DMA を禁止します。特定のハードウェアでカーネルがフリーズすることを防止します。

- **nofw**

FireWire(IEEE1394)をサポートしません。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を行いません。

- **nomouse**

マウスをサポートしません。

- **[module name]=off**

指定したモジュールを無効にします(例: **sata\_sis=off**)。

- **pci=bios**

ハードウェア デバイスに直接アクセスを行わず、PCI BIOS を使用することを強制します。このパラメータは、コンピュータに標準的でない PIC ホストブリッジが使用されている場合などに使用されます。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を禁止し、ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。このパラメータは、コンピュータの起動直後に BIOS に起因すると思われるクラッシュが発生する場合に使用されます。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS 呼び出しを使用して割り込みルーティング テーブルを取得します。いくつかのコンピュータでは、PCI BIOS 呼び出しに不具合があり、使用するとコンピュータをハングさせることが知られていますが、他のコンピュータでは、これが割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合や、マザーボードにセカンダリ PCI バスがある場合にはこのオプションを試してください。

# 索引

## A

Acronis Drive Cleanser..... 12, 71, 95

## B

BIOS..... 81, 104, 107

## D

Disk Editor..... 97

## F

FAT16..... 4, 34, 45, 102

FAT32..... 4, 34, 45, 103

## L

Linux Ext2..... 4, 45, 103

Linux Ext3..... 4, 45, 103

Linux ReiserFS..... 103

## M

MBR..... 7, 102

Microsoft Outlook Express..... 28

## N

NTFS..... 4, 103

## O

One-Click Restore..... 35, 37

## W

Windows メール..... 28

## あ

アーカイブの参照..... 5, 7, 38, 76

アイコンの整理..... 12, 75

新しいハード ディスクの追加..... 91

圧縮レベル..... 33

アプリケーションの設定..... 27

暗号化..... 2, 32

インストール..... 5

## か

完全バックアップ..... 7, 30

完全版..... 35, 69

管理ツール..... 15, 17

検索..... 77

コメント..... 30, 58

## さ

サイレント モード..... 2, 36

差分バックアップ..... 8, 30, 39

シグナル バー..... 13

システム クリーンアップ..... 12, 98

システム パスワード フィルタ..... 101

自動モード..... 82

手動モード..... 82

試用モード..... 12, 49

スケジュール..... 8, 13, 17, 56, 72

ステータス バー..... 16

スナップ リストア..... 11

セーフ版..... 70

セキュアゾーン..... 8, 9, 11, 17, 49, 64

セキュリティ設定..... 35, 48

全セクタのイメージ..... 7, 22

増分バックアップ..... 7, 30, 39

## た

タスク..... 8, 13, 17, 56, 72

ツール バー..... 15

ディスク ユーティリティ..... 15, 81

ディスクのクローン..... 19, 81

データ抹消方式..... 109

テクニカル サポート..... 4

電子メールによる通知..... 73

電子メールのバックアップ..... 28, 38

ドライブ文字..... 9, 46

## は

パーティション サイズ..... 89

パーティション レイアウト..... 85

パスワード..... 32, 55, 67

バックアップ..... 1, 17, 20

バックアップ オプション..... 17, 30, 32, 58

バックアップ ポリシー..... 10, 54, 57

バックアップ ルール..... 10, 54

バックアップ ロケーション..... 9, 17, 53

表示項目の選択..... 12

ファイル システム..... 4, 45, 102

ファイル シュレッダー..... 12, 94

ブータブル メディア..... 5, 11, 19, 37, 69

復元..... 1, 37

復元オプション..... 17, 40, 46, 47

不良セクタ..... 2, 36

ベリファイ..... 72

## ま

マウント..... 76

マスタ ブートレコード..... 7, 102

抹消方法..... 94

メディア コンポーネント..... 35, 69

**や**

優先度 ..... 33, 40, 48

**ら**

リカバリ マネージャ ..... 9

ログ ..... 17, 75

**わ**

ワイルドカード ..... 23, 26, 99

Acronis True Image 11 Home ユーザーズ ガイド

---

2008 年 6 月 1 日 第 3 版発行 (非売品)

著作 Acronis, Inc.

発行所 株式会社ラネクシー  
東京都新宿区百人町 1-22-17

©2000-2008 Acronis, Inc.

---

Printed in Japan 落丁、乱丁はお取り替えいたします。